

---

Baby Baby Baby !

G A Y A

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B a b y B a b y B a b y !

### 【Nコード】

N 4 3 9 9 L

### 【作者名】

G A Y A

### 【あらすじ】

高校生の美央は夏休みに500万円でベビー・シッターのアルバイトをすることになった。ところがこの赤ちゃんにはとんでもない秘密が！ 青春ファンタジー

## 第1話 こんにちは赤ちゃん！

『月500万。養育費として支払おう』

そう言つて悪魔のように美しい男は天使みたいに笑つた。

(「ご、500……万?」)

ありえない。ベビー・シッターのバイトで1カ月500万?

確かに条件は揃つてる。高額な報酬、イケメンの依頼主、そして、そして……可愛い赤ちゃん！ 生まれて2週間の赤ちゃんは依頼人の膝の上ですやすや眠つてる。ちっちゃい。かわいい。超触りたい！

(アタシ一人っ子だし、赤ちゃんに触れ合うチャンスがなかったんだよね。だからちよつと嬉しいな)

いやいや冷静にならなくちゃ！ よーく考えよう。……うん。やっぱり問題アリだよ！

(アタシが赤ちゃんを育てる？ そんなの絶対無理。夏休み潰れちゃうし。てか何でアタシ?)

そんなアタシの迷いなんか関係ないって感じで悪魔のように美しい依頼主はソファにふんぞり返つた。

『どうした。何を迷っている?』

改めて威厳のある人だなあとと思う。ひよつとしたらその王子様みたいなドレスシャツのせいかも?

(例えるなら……なんだろ。『黒髪の貴公子?』『マントを脱いだ吸血鬼?』)

美しい依頼主は、まるで古いお城の主が豪勢な部屋でワインを楽しむように紅茶を飲んだ。そして黙つてるアタシとお母さんを交互に眺めながら念をおす。

『異論がないならこの条件で良いのだな?』

笑みを浮かべてはいるけど目は笑ってない。冷たい微笑。でも嫌な感じじゃない。というよりその涼しげな眼で見つめられると魂を持つていかれそう……。

(あれ?)

ふと鼻の下に違和感。で、ぼたって何か垂れた。

(へ? 鼻血? やだっ!)

膝の上に乗せてた契約書に血が着いちゃった。

アタシがパニくつてるところに美しき依頼主の笑い声…。

(何よ? 人があせってるのに! でも何で急に鼻血?)

依頼主が笑みを浮かべたまま言う。

『これで契約成立だな。言うておくが途中で解約することは出来な  
いぞ』

その言葉には静かな威圧感がある。

(そんな強引な……でもまあ、お母さんもいることだし。1カ月ぐ  
らいなら何とかなるかも)

そうそう。お母さんだつて16年前は赤ちゃんだったアタシの世  
話をしてたんだから。

「たぶん大丈夫だよね?」と、隣のお母さんを見る。けどお母さん  
は相変わらず放心状態。

(もう、まだ見とれてんの?)

呆れた。お母さんでは依頼主をガン見してるし…。

「ね、お母さんも手伝ってくれるんでしょ?」

「え? あ、まあね」

そんなアタシたちの会話を依頼主が遮る。

『それは駄目だ』

思わぬ言葉に驚いた。

「え! だつて、お母さんに教えてもらわなきゃ……」

すると美しき依頼主は静かに首を振る。

『ここでは駄目だ。環境が良くない』

(はつきり言うなあ。そりゃ部屋は狭いしゴチャゴチャしてるし、  
押入れの中はカオスだし、お父さんは服脱ぎっぱなしだし、赤ちゃ  
んが泣いたら隣にも迷惑だらうけど)

アタシが困っていると依頼主は冷静に理由を告げる。

『私が望むのは一般的な環境だ。例えば新婚家庭のような。そういう環境でこの子を預かってもらいたい』

「だったら、なおさらアタシじゃないような……」

『いいや。お前を選んだことに意味がある』

依頼主はそう言うけど選ばれる理由がマジでわかんない。アタシはごくごく普通の高校生なんですけど……。

「じゃあアタシは赤ちゃんと、どこでどうやって生活すれば？」

『住む場所なら既に手配してある。それとパートナーもこちらで用意しておいた』

「パートナー？」

それも意味が分からない。それってアタシとそのパートナーの2人だけで赤ちゃんの面倒をみるってこと？

アタシが戸惑っているとお母さんが言った。

「大丈夫よ。ケン太君がお手伝いしてくれるそうだから」

「ケン太って誰？」

「あら。忘れちゃったの？ ミツコおばさんのトコのケン太君よ」

「ああ……」

思い出した。そういえばそういう『いとこ』がいたなあ。確かアタシより10こぐらい上じゃなかったっけ？ カッコ良かったんだよなあ。憧れのケン兄ちゃんか……久々に会いたいな。でも、もう5、6年は会ってないかも。きつと今でもイケメンなんだろうなあ（ええっ？ でもケン兄ちゃんとふたりで新婚みたいな生活って何か……）

やだ。想像したら顔が赤くなってきちゃった！

ふと依頼主の視線に気付く。依頼主はニヤニヤしながらアタシの様子を伺っている。

『どつやら、やる気が出てきたようだな』

まるで心の中を見透かされたようできょつとした。

（ゲ！ アタシそんな嬉しそうな顔してた？）

しかしスゴイ事になってきた。明日の夏休み初日から1カ月間、

あこがれのケン兄ちゃんと一緒に新しいお家で赤ちゃんを育てる。ちよつとありえないシチュエーションだよね…。

「あ、そうだ！」

大切なことを忘れてた。

「ところでこの子の名前は？」

アタシの質問になぜか依頼主が不思議そうな顔をする。

『名前？ 名前はまだ無い』

（酷っ！ 猫じゃないんだから……）

『そうか。お前たちの間では必要なのだな。だったら任せる』

「お前たち？ って、そんな大事なことアタシが決めていいの？」

『ああ。構わん。適当に決めて差し支えない』

（ウソでしょ？ 赤ちゃんの名前を適当に決めろって……）

男の子というのは聞いている。けど、急に名前を決めると言われても何も浮かばないって！

「困ったな。でも、ちゃんと考えてあげないと」

美しき依頼主はアタシの言葉を無視してすつと立ち上がった。そしてアタシに赤ちゃんを抱くよう促す。

（落つことしたら大変！）

恐る恐る手を伸ばす。

タオルケットに包まれた赤ちゃん。軽いような重いような不思議な感覚。

「超ちつちゃい……」

なんだか胸の奥がじんじんする。守つてあげなきゃって気持ちがある。自然とこみあげてくる。

（うわゝ ぜんぜん動かないよお。だいじょうぶかなあ）

初めて抱く赤ちゃん。ハラハラしてるアタシに向かって依頼主がすつと顔を寄せて囁く。

『成功報酬として何でも望みを叶えてやる。ただしひとつだけだ』

「はい！？」

（望みを叶える？ この人、なに言ってるんだろ？）

赤ちゃんを抱いたままアタシが首をひねっていると依頼主は帰るようなそぶりをみせた。

『それでは……後は任せたぞ』

(え？ もう帰っちゃうの？ ちょっと無責任すぎない？)

スタスタと部屋を出て行く依頼主。こっちはまだまだ聞きたいことはあるのに！ でも赤ちゃんを抱いているので追うこともできない。

「ちょっとお母さん！ ホントにいいの？ こんなんでは」

「……いいのよ」

お母さんでは……まだ「ぽおっつ」として。

(こんなにあっさり引き受けちゃって……だいじょうぶ？ ホントに)

不安はある。というより……不安だらけだよっ！

\* \* \*

(わ〜い！ 思ってたよか新しい！)

美しき依頼主が用意してくれたのは結構、立派なマンションだった。

(やっぱりあの人、お金持ちなのかな〜？)

お母さんが入り口の脇にあった看板を見つけた。

「あら。『モデルルーム公開中』ってことはまだ全部埋まってないのねえ」

「じゃあ新築なんだ」

築ウン十年のうちの団地とはえらい違いだ。それだけでもドキドキする。

「美央は赤ちゃんをお願いね。荷物はわたしが持つから」

タクシーを降りて部屋に向かう。

13階の666号室。

(13階なのに666って変な番号のつけかただなあ)

そんな突っ込みもソコソコに入ってビツクリ!

「凄っ! 超きれい!」

「あらまあ。どこかの三ツ星ホテルみたいねえ。泊まったことないけど」

確かにお母さんの言う通りだ。新聞のチラシなんかで見る広告のように一通りの家具は揃ってる。もしかしたらこの部屋がモデルルームなんじゃないかと思った。

「ねえお母さん。ホントにここに住んでいいのかな?」

「いいんじゃない。1ヶ月間だけだし」

お洒落な感じの内装は、まるで初めてのパーティの為に『おめかし』した人みたいに見える。きれいなんだけど、どこかよそよそしいというか…。

そんなことを考えながらリビングを眺めていると隣の部屋から誰かがひよっこりと顔を出した。

「おばさん。こんにちは」

(誰? もしかしてケン兄ちゃん?)

お母さんが声の主をみとめて目を細める。

「あらケンちゃんお久しぶり。先に来てたのね」

「ええ。午前中に荷物持ってきてちゃいました。で、そっちが例の赤ちゃんツスか?」

(何っ! アタシはスルーかよっ!)

淡い期待が軽い敵意に変わる。

(それに何よその無精ひげ! 髪も無意味に長いし。なんか前よか『劣化』してない?)

ケン兄ちゃんはアタシが抱いてる赤ちゃんに顔を近づけて「よろしくな」と、笑った。で、その次にアタシの顔を見る。



「やあ。美央ちゃん。大きくなったね」

心なしかその視線が胸のトコに集中してるような気がするんですけど…。

そんなケン兄ちゃんのことをお母さんはすっかり信頼してるらしい。

「ケンちゃん、よろしくお願いね。よそ様の大事な赤ちゃんだから、おばさん美央だけじゃ心配で……」

（この人、娘の心配はしないのかしらん？ いくら『いとこ』でも同じ部屋に住むんだよ！）

「任せてくださいよ。しつかりサポートしますから！」

そう言ったケン兄ちゃんの目がキラーンと輝いたように見えた。その張り切りぶりが妙にエッチっぽい。

お母さんがケン兄ちゃんに尋ねる。

「ところでケンちゃん。お仕事は大丈夫なの？」

「はい。それは平気です。『自宅警備員』ですから」

（何それ？ 自宅警備員？ どんな仕事？）

「まあ。そうなの。感心だわ」

そんな具合でお母さんとケン兄ちゃんが話している間、アタシは改めてケン兄ちゃんの顔を眺めた。ヒゲと長髪は気になったけど相変わらず色白ですつきりした顔をしている。前より目つきが鋭くなっ  
た気もするけど、もとが涼しげな二重なのでそこだけ見る分にはまあカッコイイ。ただ最後に会ったのはアタシが小学生のときだからその時のイメージとはだいぶ違う。

（もっとサツパリすればイケてると思うんだけどなあ）

何か少し残念。ドキドキ感もレベルダウンしちゃった感じ。

「さあ。それじゃ皆で買い物に行きましょうか」

お母さんの提案で赤ちゃんの為の買い物に行くことになった。どうしてかっていうと、あの悪魔のように美しい依頼主は赤ちゃんだけ連れてきて何も置いていかなかったから。お金だけはたくさん置いていったけど…。

「ね、お母さん。服とかベビーカーとかはどうするの？」

「それなら国道沿いに赤ちゃん用品のショップがあったわね」

「じゃ、先にそっちにしない？ ずっとこの子抱いてると手が自由にならないし」

「そうね。じゃあそうしましょうか」

依頼主は前金で500万円をお母さんに渡してくれたのでお金は十分ある。

(可愛い服とかいっぱい買ってあげよつと)

そう思って自分の胸元を見る。赤ちゃんはアタシの胸に頭をちょこんとくっつけて眠っている。本当に良く寝る子だな。起きてたのはさつき家を出る前にミルクを飲んだ時ぐらい。赤ちゃんって四六時中泣いてるものだと思ってたからちよつと意外。

(今のところは順調、順調。これならいけるかも)

でも、その考えは甘すぎた。それを思い知らされるのはもうちよつと後のことだけだ…。

\* \* \*

お母さんが「多い方がいい」っていうから肌着は10着も買った。おむつカバーもたっぷり用意した。それと『つなぎ』みたいな服を何枚か。それ以外にも買わなければならない物がいっぱいあって、お母さんとケン兄ちゃんの両手がふさがってしまつぐらい買い物したんだけど、それでもまだ足りない。

いったんマンションに戻る為にアタシたち3人と赤ちゃんでのんびり歩いて帰る。

(晴れてるのはいいんだけど。日差しが強いなあ)

まぶしい青空を見上げる。7月の太陽が『上から目線』でアタシたちを見下してるみたいだ。こつもジリジリ照りつけられるとベビーカーを押す手のひらにまで熱が伝わってくる気がした。風がある

からまだ救われるんだけど。

(赤ちゃんって肌弱いだろっから直射日光は避けないとね)

ベビーカーの屋根を広げてるから大丈夫だとは思うけど念のために立ち止まって赤ちゃんの顔を覗き込む。

「あれ？ この子、目開いてる？ なんだか空を見てるみたい」

アタシが驚いてるとお母さんが呆れたように言う。

「まさか。見えるようになるのは生後三カ月後ぐらいからよ」

「そうなの？ でも空を見て笑ってるような気がする」

見上げるとクリアな青が果てしなく拡がっている。地表に追いやられた入道雲は遠方に並ぶビルの背後でこぢんまりと背中を丸めている。

(そうだ！)

急にひらめいた。

「この子の名前『空』にしようっつと！」

アタシがそう宣言するとお母さんがぼかんとした顔で呟く。

「……『ソラ』まあ、悪くはないけど。どうしたの急に？」

ケン兄ちゃんも呆れ顔で口をひらく。

「また安直な。ひねりがないな」

「そんなことないよ！」

確かに思い付きだけどさ……アタシは急いでそれらしい理由を考えた。で、反論する。

「ほら。今日みたいな青空っていいじゃない！ この子には青空みたいに明るくて広くてさわやかな男の子になっってもらいたいから」

お母さんは空を見上げながら頷いた。

「そうね。素敵な名前じゃない。美央にしてはよく考えたわね」

「でしょ？ うん。『空』っていい名前！」

「自分で言っつなよ。まあ凝りすぎて読めない名前よりはマシだけだな」

(よりはマシって何で素直にほめないかなあ？)

そう思って軽く睨んだつもりがケン兄ちゃんはぎょっとしたよう

に身を引いた。

「そ、そんな睨むなよ……」

「別にい。さてと。じゃケン兄ちゃんには罰としてもう1回買い物行ってもらおっか」

「な、罰って何だよ？」

「こんなにいい名前なのに文句言った罰」

「ちよっ、別に文句言ったわけじゃ……」

結局、ケン兄ちゃんには組み立て式のベビーベッドを買いに行ってもらったことにした。

\* \* \*

部屋に戻ってもホツとしてる余裕はない。

空が起きているうちにミルクを飲ませてお風呂にも入れなくちゃならないから結構、忙しい。それに初めてのことはばかりで覚えるのも大変。おかげで夕方にはクタクタになってしまった。

ケン兄ちゃんが買出しに何往復もしてくれたおかげで、とりあえず今晚からは何とかかなりそうな状態にはなった。

夕飯はお寿司。お母さんが奮発して一番高いのを出前であつてくれた。

「ケンちゃんも遠慮なく食べてね。引越し祝いよ」

真新しいダイニングテーブルで早めの夕食。にしても、この部屋どうも落ち着かない。

（何でだろ？ キレイすぎるのかな）

こういうお洒落な部屋ってドラマなんかで見てる分には素敵だなあとは思っけど、実際住むとなるとイマイチかもしれない。

（あれ？）

そういえばお母さんに聞かなくっちゃと思つてたことがあつたよ。うな……。

「あ、そうだ！」

アタシが急に大きな声を出したからお母さんが箸を止める。

「どうしたの？」

「依頼主の人。あの人ってお母さんの知り合い？」

「あら？ …… とうだったかしら？」

そう言ってお母さんが首を傾げる。

「は？ アタシが学校から帰ってきた時にはもうあの人居たでしょ。だからつきりお母さんの知り合いだと思ってただけど」

お母さんは箸を置いてしばらく考え込む。で、出した答えが、

「ごめん。やっぱり覚えてないわ」というもの。

（がくつ。本気で言ってる？ ならケン兄ちゃんは？）

そう思ってケン兄ちゃんにも聞いてみる。

「ね。ケン兄ちゃんはある人知ってるの？」

「いや。全然」

（がくつ。こつちもかいっ！）

変なの。2人もあの依頼主のことをよく知らないなんて！

（そんなんでよく引き受ける気になったなあ……）

アタシは大げさなため息をついて2人の顔を交互に見た。

「2人も怪しいと思わなかったの？ だって全然、知らない人の赤ちゃん預かるなんて普通じゃないでしょ？」

それでもお母さんは大して気にも留めていないらしい。

「まあ、いいんじゃない。お礼は十分頂いてるんだし」

ケン兄ちゃんはお寿司のネタをはがしてワサビを取り除きながら他人事みたいに言う。

「別にいいんじゃない？」

「もうっ！ 2人も真面目に考えてよ！」

だんだんハラが立ってきた。みんな無責任！ お母さんもケン兄ちゃんもあの依頼主も。

「だいたい何よ。2人も変だと思わないの？ あのドラキュラみたいな怪しい依頼主の正体を」

2人ともアタシの質問には答えずにお口をモゴモゴさせている。

(まったく、もう……)と、情けなく思った瞬間だった。

『誰が出来損ないの吸血鬼だ?』

急に誰かが話に割り込んできたのでビックリした!

(え?)と、振り返ると……「い、いつの間に!」

アタシは啞然とした。

なんとなんと! あの依頼主がダイニングの入り口に立ってる!

『クライアントに対して随分な言い方だな』

「や、で、出来損ないとは言っていないけど」

アタシの言い訳に対して美しき依頼主は『フン』と、鼻で笑う。

そしてテーブルのお寿司が入った桶を眺めながら言った。

『余計な詮索は無用。黙って契約に従いたまえ』

依頼主の言葉にお母さんとケン兄ちゃんがウンウンと同じリズムで大きく頷く。まるで催眠術にかかった人たちみたいだ。

(なんか変なの。2人とも人形みたいに首振っちゃって……)

美しき依頼主はアタシの顔をじっと見て言う。

『それから。この契約のことは他言無用だ。つまり誰にも言うなということだ』

その鋭い目つき……背筋がぞつとする。この人には何かある。逆らえないような何かが。

『用件はそれだけだ。それでは』

そう言い残すと依頼主はまたしてもスタスタと足早に立ち去ろうとする。

「あ!」

アタシは赤ちゃんの名前を『空』にしたことを伝えようとそれを追った。けど……アタシが玄関に出た時にはもう扉が閉まりかけていた。

(もう居ないし……てか、早すぎ)

やっぱり怪しい。そもそもどうやって入ってきたの? それはまあこの持ち主だから合鍵ぐらいは持っているのかもしれない。それに

しても……何かよく分かんない人だ。

\* \* \*

8時を廻ったところでお母さんが帰ることになった。

「それじゃね。美央。がんばってね」

「うん。わかんないことがあったら電話する」

「もしかしたら夜泣きするかもしれないけど。空ちゃんはぐっすり寝る子みたいだから大丈夫じゃないかしら」

「だといいけど。それじゃ帰り気をつけてねお母さん」

するとお母さんはアタシの耳元に顔を近づけてささやいた。

「あなたもね」

「へ？ な、なにを？」

「ふふ。これは練習なんだからね。本当に赤ちゃん育てるにはまだ早いわよ」

「ちよっ、ヤダ！ お母さんたら！」

やっと言ってる意味が分かった。

（冗談じゃないっ！ アタシにはれつきとした彼氏がいるんだから！ ケン兄ちゃんとは……何も無いと思う。たぶん）

その時なぜか依頼主の『新婚のような』という言葉が浮かんだ。

（いやいやいや……何もないって。だってアタシにその気がないんだから）

アタシがブンブン首を振ったのでお母さんが笑う。

「まあ。そんなに張り切らなくても」

「ちがーう！ ってか、何考えてんのよ。もう」

どこまで本気なんだか…。

とにかく、そんなお母さんを送り出してアタシは空の様子を見に部屋に戻る。

（空の面倒を見るためなんだからね！）と、自分に言い聞かせる。

『新婚』なんて甘い単語は頭からスポンと放り出す！

(だってアタシには持田君という彼氏が居るんだから。間違ってもケン兄ちゃんの変なことには……ならないよね？ たぶん)

今日一日で色んなことがありすぎて、さすがのアタシも疲れてる。でも、まだまだ。これからが大変なんだから！

でも、「子育ての大変さ」はアタシの想像をはるかに超えていた。おまけに後でとんでもないことが判明する。それは……空が普通の赤ちゃんではないってことだった…。



## 第2話 異変？

部屋割りは簡単に決まった。ケン兄ちゃんは「畳がいい」って言うからリビングとふすまで仕切られた和室。アタシと空は寝室で寝ることになった。一応、アタシたちの寝室にケン兄ちゃんは「立ち入り禁止！」って言うておいたので、まあ変なことにはならないと思う。

(さてと。お母さんも帰っちゃったし。これからが本番よね)

まだ夜は始まったばかり。空が夜泣きする子なのかどうかはまだ分からない。お母さんの予想通りよく寝てくれる子ならいいけど…。空にミルクを飲ませた後で『オムツ』の様子を伺う。

(うーん。これって汗？　なんか微妙……)

昼間は布のおむつ、夜は紙おむつということに決めたので、いったん脱がせて紙おむつにチェンジすることに。お母さんが言うにはずっと紙おむつだと『おしっこ』した後でもサラサラで気持ち悪くならないから赤ちゃんがおしっこを覚えてくれないんだって。だから『おむつ離れ』が遅くなるらしい。

「さ、おむつ替えるわね」

ペリペリっとオムツカバーをはがして布を解放。なんか空のオチンチン周りがちょっと赤くなってる。

(ベビーパウダー塗らなきゃね)

その時、空の可愛い足がひくひくつと小さく突っ張ったように見えた。それと同時につぼみから黄色い『しぶき』が噴水みたいに飛び出す！

「ぎゃー！」

せめて床に拡がらないように反射的に手で押える。けど止まるワケもなく温かい液体は容赦ない。

(早く止まれー！　てか長いよう。赤ちゃんなのに！)

手のひらに感じる圧力。もうカンベンしてくださいって感じ。と

ほほ…。

\* \* \*

空の場合、寝つきが良いのはとっても助かる。赤ちゃんは『添乳』  
とってオッパイがないと眠れない子が多いらしい。もしも空がそ  
うだったとしたら…：さすがに困る。だから正直ほっとした。  
とりあえず空が寝てくれたのでやっと一息つける。

(なんか大変な一日だったなあ)

つくづくそう思う。朝は学校で終業式。家に帰ったら見知らぬ人  
に赤ちゃんを押し付けられて、その後はずっとドタバタ続き。

(なんなんだろ？ アタシ、完全に流されてないか？)

時計を見ると9時半を過ぎていた。特に観るTVもないし、マナ  
ーモードにしたた携帯をいじりながらのんびり過ごすことにした。  
ユツ子とキョウウコにメールを返していると携帯に着信。

(持田君からだ！)

空を起こしちゃいけないと思って部屋を移る。

玄関に一番近い部屋は子供部屋になっているのでそこならケン兄  
ちゃんにも聞かれないはず。

「もしもし」

『おー、美央。今平気？』

「うん。だいじょうぶだよ」

子供用の小さなベッドに腰掛けながら明るく答える。ホントは疲  
れてるんだけど…。

『いやあ参ったよ。初日からこれかよって感じでサ。マジやばいっ  
て』

「練習おつかれさま」

『いやホント。ずっと走りっぱなしだぜ。足とか超パンパン』

「午後からずっと練習してたの？」

『まあな。てか暑いしマジ死ぬって』

持田君はサッカー部。うちの学校では力が入ってる部なので練習はかなり厳しいみたい。

『ゴメンな。美央に会いたいけど当分無理そうなんだ。日曜も休みじゃねえんだって……』

「そうなんだ……アタシも会いたいよ。でも仕方ないよね」

持田君は2年でもレギュラーだから練習がキツイのは仕方がないと思う。ただ練習を見に行くぐらいならできるとは思う。

(さすがに空は連れては行けないよね……)

そう思っただけで持田君にバイトの話をした。一応、あの悪魔のように美しい依頼主との約束があるので親戚の子を家で預かっていると嘘の説明をした。

『マジで？ けっこう大変そうじゃん。で、幾らぐらい貰えんの？』

「ん……1カ月で5万ぐらいかな」

ちよつと嘘ついた。さすがにホントのことは言えないから。

『すげーじゃん。オレなんてバイト出来ねえから羨ましい！』

しばらくおしゃべりをしてから電話を切った。

電話を切ってからしみじみと幸せをかみしめる。持田君と付き合い始めたのは7月の中頃。だからデートらしいデートもまだ2回しかしてない。告げてきたのは持田君から。持田君は2年でも目立ってたし、全然、予想もしてなかったから、まだアタシの気持ちを追いついてない感じ。だから今でもアタシの中では「持田君」。まだ下の名前で呼ぶのが照れくさい。

持田君の部活が忙しいのは分かってたし、それを承知でOKしたのはアタシだから「会えないのは嫌だ」なんて言えない。今でも幸せすぎるぐらいなんだ。「持田君の彼女」ってポジション。それを狙ってた子は多いはずだから。正直今はまだ(持田君が好きで好きでたまらない！)ってほどではないと思う。こうやって電話をくれたりすると嬉しい。ていうかアタシは「持田君の彼女なんだなあ」って考えるだけでじんわりと幸せな気持ちになる状態。だからこの

夏休みにどうなるかはまだ分からない…。

\* \* \*

(…何？ 何の音？ 声？ てか誰？ 泣いてる？ …… そうだ！ 赤ちゃん！)

がばつと起きて時計を見る。0時10分!?

(え、と、最後にミルクあげたのが…… やばつ！ 急いで作らなきゃ)

赤ちゃんのミルクは作り置きができない。なので空を抱き上げてキッチンに直行。お湯を沸かしながら哺乳瓶に粉ミルクを計量スプーンでんこ盛りで入れる。

(片手じゃやりにくいな) ちょっと多めだけど、ま、いつか味が薄いよりは濃い分にはコクがあつておいしいかも。

その間も空はずっと泣いてる。相当お腹が空いてるんだろうな。お湯が沸くまでがもどかしい。

(母乳の人がうらやまし〜！)

お湯が沸いたのでそこに粉ミルクをとかす。でもそれを冷ますのが一苦労。熱々の哺乳瓶をシンクに転がして水をガンガンかける。ビンの表面が冷めても中味はまだ熱い。自分の腕に垂らして熱くないとこまで冷まさないと。

(めんどくさいよう！ マジで母乳出したいっ！)

ようやくミルクの準備ができて空の口元に哺乳瓶の吸い口を差し込む。泣いていた空は一瞬、顔を背ける。でも、ミルクの匂いが分かったのか勢い良くそれを吸い始めた。

(ゴメンね空。やつぱお腹空いてたんだね……)

空にミルクをあげると急に眠気がおそってきた。

(いやいや、まだ寝れない)

飲ませた後はゲップさせなきゃなんないから。けど赤ちゃんのゲ

ツプって微妙すぎて分かりにくいんだよね。音が小っちゃいから聞き逃しちゃう。

結局、ミルクを作って飲ませてまた寝かせるまでに1時間以上かかった。

(うえー これをまた2時間後にやるのかあ)

赤ちゃんにミルクを与える間隔は2、3時間ごと。てことは空に待たせないようにするには30分ぐらい前に起きて準備しないと。

(いくら寝れないなあ)

アタシは目覚まし時計を2時半にセットしてベッドに横になった。

\* \* \*

プムプム……

(目覚ましの音。……もう時間？ 今寝たばっかなのに……あれ？ 空が泣いてる！)

時計を見ると2時半。予定の間には間に合ってるはずなのに……。慌てて空を抱き上げてキッチンへ向かう。これからさっきの繰り返しだ。途中で小さなショウジョウバエが飛んできてまとわりつく。(どっから入ってきたのよ！ やだもう。この忙しい時に！)

哺乳瓶の吸い口にバイキンでもついたら大変！ まったく余裕なし。バタバタだよ。まったく。で、何だかんだいって、ミルクを飲ませて寝かしつけるまでにやっぱり1時間近くかかってしまった。

(これは思ったよか重労働だ！)  
今さらだけど事の重大さに気付く。これはとんでもないことを引き受けてしまった。

(にしても……アタシがこんなに苦労してんのに)  
ふとケン兄ちゃん存在を思い出した。空が泣いてるのに全然部屋から出てきやしない。

文句のひとつも言っただろうとリビングのふすまを開けた。

和室の真ん中にふとんが敷いてあってケン兄ちゃんはグウグウ寝てる。その側にはテーブル。で、その上に並ぶビールの空き缶、マンガ、PC、ゲーム……ってゲーム？

(人が苦勞してんのに、のん気にゲームですか。マジで使えない！) 何だかムカついてきたので、ずいっと部屋の中に入って足の指で軽くわき腹を突いてやった。

でもまったく起きない。おまけに寝言。

「無理だあ……プリンちゃん！」

(はあ？ どんな夢みてんのよっ！)

むかつとして思わずそばにあったクッションを投げつけた。

(どこがパートナーなんだか。まったく先が思いやられるなあ。もう)

長い夜になりそう……。

\* \* \*

明け方に1回、朝にもう1回、まったく同じことの繰り返し。ちつとも寝た気がしない。

(学校休みでよかった……夏休みでなきゃ無理だわ)

もつろうとする頭で次にミルクをあげる時刻を計算する。それまでもう1回寝るかどうか、ちょっと迷った。今横になってもたぶん寝られないだろうし……。

その時、ピンポンとインタフォンが鳴ってお母さんが来てくれた。

「おはよう美央。どう空ちゃんは？」

「おかあさん！ 助かったあ」

マジでこのときばかりはお母さんが仏様に見えた。

「その様子じゃあんまり寝てないみたいね。いいわよ。しばらく寝てなさい」

「ありがと。マジ助かる」

お母さんにバトンタッチしてアタシは寢室のベッドに倒れこんだ。

\* \* \*

目が覚めると、いつの間にかお昼をすぎている。

アタシが寝てる間にお母さんは空の面倒をみながら掃除に洗濯、それからお昼ご飯の準備までしてくれていた。さすが…。

お昼ごはんを食べながら気がついた。

「そっぴやケン兄ちゃんは？」

「10頃に起きてきて出かけたわよ」

「仕事？」

「どうかしら。仕事とは言ってなかったわね。夕方には帰ってくるらしいけど」

「ふーん」

仕事じゃないんだ。っていうかホントに仕事してんのかなあ。昨日は何とか警備員って言ってたような気がする。

「ところで美央。空ちゃんのことなんだけど」

急にお母さんが真面目な顔をするのでアタシはぼかんとした。

「何？ 空がどうかした？」

「空ちゃんて今月生まれたばかりって言ってたわよね？」

「ん。確かそう聞いたけど」

「そう。私の気のせいかもしれないけど……」

お母さんは何か言いたそうにアタシの顔を見る。けど、結局その話を打ち切った。

(何か空のことで気になることでもあるのかな？)

その時は軽く考えていた。お母さんが気付いた異変。そのことにアタシが気付くのはもう少し後のこと…。

2日目はお母さんのおかげで何とか乗り切れた。てか、やっぱりお母さんってスゴイと思う。ウチの家事をやってからこっちに来て、こっちの面倒までみてくれるんだからホントに大活躍って感じ。それに比べてパートナーの役に立たないこと……。

3日目の朝、お母さんが来る前にケン兄ちゃんに聞いてみた。

「ケン兄ちゃんってホントに仕事してる?」

「い!?! ま、まあ、そのう適当に」と、口ごもるケン兄ちゃんは明らかに挙動不審。

「前に自宅警備員とか言ってたっけ?」

「そ、そうだよ」

「それってさ。友達に聞いたんだけど二トってことじゃないの?」

「うっ!?! ま、まあ……そうとも言っ」

「やっぱり!?! だったら何で空の面倒みてくれないの?」

「いや。そのオレはオレなりにやること」

「ってゲームでしょ!?! 一応、ケン兄ちゃんもアルバイト代貰ってんでしょ?」

「うん。一応」

「だったらその分働いてよ。もう」

「す、スマン」

「すまそ? 何それ?」

「いや。だから申し訳ない。……美央ちゃん乙」

「おつ? 何それ? ふざけてんの?」

「だから悪かったって。その、次からは手伝うよ。散歩とかなら喜んで」

「あのね。犬の世話じゃないんだからね。やることはいっぱいあるんだよ!?! 散歩だけとか少なすぎ」

毎日、昼間にどこに行っているかは知らないけど、だいたい想像はつく。アタシがケン兄ちゃんを責めると急に空の泣き声が聞こえた。

「あれ? もう起きちゃった?」



慌てて寝室に行つて空を抱き上げる。

「なんかいつもより大泣きしてない？」

なんとなくだけでも空の泣き方が激しい気がする。いつもなら抱っこして軽く揺すつてやるかアタシの心臓の音を聞かせてあげれば収まるんだけど。

(空がこんなに泣くなんて初めてだよ。どつか痛いとかなのかな？  
ちつとも泣き止まない空を見てると、だんだん焦つてきた。

「ね！ ケン兄ちゃん！ お母さんに連絡してくんない？」

「え？ もうちよつとしたら来るんじゃない？」

「何のん気なこと言つてんのよ！ もうっ！」

アタシがキレそうになつたせいで空がさらに大きな声で泣く。それが一層、大きくなつてついには「ぎゃあー！」と、ピークに達したような一声！

思わず目を閉じる。でも……

(あれ？)

急に静かになつたみたい。目を開けて空の顔を見る。一瞬、空と目が合う。きよとんとしたような空の顔。

(あれえ？ 今までのは何だったの？)

空は目をぱちくり。そしてゆっくりとまぶたを落とす。

(ね、寝ちやうの？ ひよつとして泣き疲れ？)

可愛いとは思うけどなんか納得できない。「じゃあ何で泣いたのよ？」って感じ。

アタシが空の寝顔を眺めると今度はリビングの方でケン兄ちゃんが変な声を出す。

「何じゃこりゃあ〜！」

やれやれと思つて空をベビーベッドにそつと下ろす。で、仕方なく様子を見に行く。

(……まったく、なに騒いでんだか)

ケン兄ちゃんは和室で立ち尽くしてる。

「どつしたの？」

アタシの言葉にケン兄ちゃんが情けない顔で振り返る。

「オ、オレのゲームが……」

「ゲーム？」

室内を覗き込んで驚いた。

「わっ！」

ケン兄ちゃんが驚くのも分かる。

「ば、爆発してる?!」

ひと目見てそう思った。だって、そうとしか言いようがない。なんせゲーム機が真っ黒こげで周りの畳にもこげた跡がくつきり。液晶テレビも画面の半分ぐらいが被害を受けてる。

「ケン兄ちゃんが壊したの？」

「違っつて! 別に変なことはしてねえよ。スイッチもちゃんと切ったし」

「不良品なんじゃない？」

「それは有りえね。だって新品だぜ」

「変ね。どう見ても機械が爆発したようにしか……」

「どうなっちゃってんだよ」と、ケン兄ちゃんはしばらく真剣な顔でゲーム機の周りを点検した。で、腕組みしながら呟く。

「無料補償、利くかな？」

(おいおい。そっちの心配かい)

普通は火事にならなくて良かったとか、電気屋さんに調べてもらおうだとか、もつと他に考えることがあるんじゃないかなあ。

とりあえず後始末はケン兄ちゃんに任せてアタシは空のお着替えをすることにした。

(あれだけ泣いたんだから汗かいてるよね。たぶん)

寝室に戻って空の肌着が湿ってないか確認する。

(やっぱり濡れてる。危ない。危ない。このままじゃ風邪ひいちゃう)

空を起こさないようにそっと肌着を脱がせる。ゆっくりと慎重に洗濯済みの肌着を先に広げてそこに空を乗せる。で、肌着で身体を包む。

(あれ？ 気のせいかな？　なんかこの肌着、ちょっと小さくない？)

確か買った時は全部同じサイズだったと思うけど。この肌着だけ縮んだ？

(いや。そんなはずは……)

そこではつとした。そして気付いてしまった。

(そんな急に大きくなったりするものなの？)

そんな疑問がわいてきた。というより昨日の夜にも似たようなことを考えてた。

(まさか……でもそんな急に)

昨日の夜に空を抱っこした時に(あれ？　こんなに重かったっけ？)と、一瞬だけ思った。あれって気のせいだと思ってたけど改めてじっくり空の身体を観察してみると……

(足……太くなってるよね。髪の毛……増えた？　てか増毛？)

分かんない！　赤ちゃんって日に日に大きくなるもの？　お母さんに聞いてみる？　いやいやいや。怖くて聞けないよ……！

(どうしよ……アタシの気のせいならいいんだけど)

ダメだ！　頭が混乱してる。

ふと気がつくと空が目をあけてる。

(また起きちゃったか)

しばらく空と見つめあう。何気なしに空の顔の前に手をかざしてみ。で、そつと手を右に動かす。すると……空がそれを目で追った！　偶然かもしれないと思つて今度は手を左に動かす。するとやっぱり空はそれを目で追いかける。

「見えてる？　そんな……」

確か見えるようになるのは3カ月とかじゃなかったっけ？

アタシはケン兄ちゃんを呼んで急いで頼んだ。

「ちよつとネットで調べてくれる？」

「へ？　何を？」

「赤ちゃんの成長。1カ月でどれぐらい体重が増えるとか、いつか

ら目が見えるようになるとか」

「なんでまた？ マンドくせ」

「いいから早くっ！」

「わ、分かったよ。すぐググってみるよ」

ケン兄ちゃんにインターネットで調べてもらって確信した。

やっぱりこの子成長早すぎ！ 首もすわってるし！ 目も見えてるし！ まるつきり生後3カ月の赤ちゃんと同じだよ！

\* \* \*

お母さんが来てくれたのは夕方だった。なんでも他に用があったみたいで昼間は来れなかったそう。

2人で洗濯物を片付けて空をお風呂に入れる。ホントはすぐにも空の異変のこと相談したかったけど何となく話を切り出せない。本当に大事なことって意外と口に出せないものなのかも。その問題に触れることなくお母さんは空をあやしたり、おしめを替えたり、普通に接している。

（おかしいなあ？ お母さんが気付かないなんて）

アタシが口にしなくても子育て経験のあるお母さんなら気付いてくれると思ってた。

（やっぱりお母さん気付いてないのかな。だとしたらショックだよな）  
いつも通りに空を可愛がるお母さんを見ると「空が異常だ」なんて言えっこない。それに今でも心のどこかではアタシの勘違いであって欲しいと願ってる。あるいはもしかしたら、あの悪魔のように美しい依頼主の方が勘違いしていてウチに来たときにすでに3カ月経ってたのかもしれないし。

2人で夕飯の準備をしている時に目の前を八工が横切った。

（やだ。また八工が……）

アタシがそれを手で払うとお母さんが呆れたように言った。

「あら。ここ13階なのに八エが出るの？」

「ん。たまに小っちゃいのが」

「普通、上の階までは上がって来ないんだけど」

「そんなことないみたいよ。結構、見るもん」

「そうなの。それじゃ蚊も気をつけないと。空ちゃんが刺されたら大変なもの」

ちょうどその時にケン兄ちゃんが帰ってきた。そこで空が寝ている間に3人で夕食をとる。今日はやけに静かな食卓になってしまった。何となく会話がよそよそしいっていつかぎこちない感じ。もしかしたらケン兄ちゃんが空の異常な成長の話をつてくれるかなって期待してたけど、それもなかった。

結局、お母さんが帰り支度をはじめるまでその話題が出ることはなかった。

「さ、それじゃ私は帰るわね」

「え？ お母さん帰っちゃうの？」

「ええ。お父さんが帰ってくるから」

「そっか……」

言わなくちゃならないことをずっと言いそびれてると何だか申し訳ないような気持ちになってしまう。

「ねえ美央。途中まで送って頂戴」

「え？ なんで？」

「いいから。じゃケン太君、しばらく空ちゃんをお願いね」

「あ、はい。良いですよ」

「それじゃ行きましょ」

お母さんに促されてアタシも一緒に外に出ることにした。

エレベーターで一階に降りながら空のことを切り出そうとしたけど、やっぱりうまく言い出せない。エントランスを抜け、マンション

ンを出てからも会話は無い。お母さんは無言で足早に歩く。

(なんかケンカした時みたいだな……)

こういう時のお母さんって何か言いたいことがある時なんだ。それは分かっている。

(何か怒っているように見えるのはアタシが隠し事してるからなんだよね。たぶん)

しょうがない。思い切って言ってみよう。

「あのね。お母さ……」

「分かっているわよ」

「え？」

「空ちゃんの成長。あり得ないスピードだわね」

「……うん」

「あなたが不安そうな顔をしちゃ駄目！」

お母さんは立ち止まって強い口調で言った。そして諭すように続ける。

「子供は敏感だから、たとえ不安があったとしても母親は絶対に子供の前でそれを見せちゃ駄目なの。この子は変じゃないかとか、普通の子と比べてどうだとか、そんなこと全部だまって受け入れなくちゃならないの」

「お母さん……」

「母親ってそういうものよ」

そう言っただけでこり笑うお母さんを見ると純粹に(すごいな)って思う。

「大丈夫よ。美央。ちょっとぐらい成長が早いからって全然心配することないわよ」

「うん……そだね」

「言わなかったけど私だって昔あなたのことで凄く心配してたのよ」

「へえ、どんなこと？」

「小学3年になってもおねしょが直らなくて……」

(お〜いっ!)

せつかくお母さんを尊敬しかけていたのに。まあお母さんらしいといえはらしいけど。

「じゃ、美央。明日からがんばってね。私は海外行っちゃうけど」「うん……え？ 今なんて？」

「あら。言ってなかったっけ？ 明日からお父さんとローマに行くの」

「き、き、聞いてないよぉ〜！ てかマジで？ マジで行っちゃうの？」

「そうよ。なんせ美央が500万も稼いでくれるんだもの。最高の親孝行じゃない！」

「そ、そ、そんな……」

めまいがしてきた。あり得ない。明日からはお母さん抜き？ ひとりで空を育てるなんて無理！

(どーしょ……ピンチだ。やばすぎるって！)

まるで地獄行きのバスに乗せられたような気持ちになって、アタシは深いため息をついた。

### 第3話 衝撃の真実！

昨夜の予告通りにお母さんたちは本当に海外旅行に行っちゃうらしい。

今日はお母さんが来る代わりに宅配便が届いた。しかも中味はぜんぶ育児本！ 自分が来れないからその代わりのつもりなんだろう。（やっぱ納得できないっ！）

文句言ってやろうと電話した時、お母さんたちは既に成田空港だった。

「ね、お母さん！ どういうつもり？ マニュアル読んでガンバレってこと？」

『そうよ。美央ならできるわよ』

「本だけ渡して後は自力でやれって……ちょっと無責任すぎない？」

『あら。美央の場合、誰かにごちゃごちゃ指図されるよりは良いんじゃない？』

「う……」

さすがにお母さんはアタシの性格をよく分かってる。アタシの場合、誰かに命令されたりダメ出しされると途端にやる気を失くしてしまう。たとえば自分で決めたことが間違ってる時なんかは直接「それは違うよ」と言われるよりは、さりげなくそれに気付かせてくれる方が素直になれるタイプだから。

『それにね。仕方がないのよ。これ以上、私が干渉すると契約違反になっちゃうから』

「契約違反？ そんなこと書いてあったっけ？」

中味なんてろくすっぽ読んでない。ていうか読む前に鼻血でちゃったし。

『子育ては契約者とそのパートナーの2人で行わなければならない。ただし最初の3日間は除くって項目があるのよ』

「そんなの聞いてないよ〜」



全身から力が抜けてくような気がした。

『美央なら大丈夫よ。それじゃ子育てがんばってね。チャオ〜』

「は!?!」

(な、何が「チャオ〜」よ。メチャメチャ楽しそうじゃん!)

電話を切った後もしばらくムカムカして昨日までの感謝の気持ちなんて完全にどっかに行っちゃったよ。

(空のお世話だけじゃなくなって洗濯や掃除もひとりでやるんだよね……)

そう考えると憂うつになってきた。

アタシがキツチンで途方に暮れていると空とケン兄ちゃんが散歩から帰ってきた。

「ただいま〜」と、ケン兄ちゃんが空を抱っこしながら入ってくる。

空はずいぶん機嫌がいい様子。ベビーカーで外に連れて行ってもらったのが嬉しかったみたい。アタシのお膝に乗せてあげると空は「あ〜」とかわいい声を出す。

(そっか。感情が芽生えてきたんだなあ)

昨日あたりから空は笑顔をみせるようになった。最初は寝てる顔か泣き顔だけだったのに。きっと赤ちゃんってこっぴどい風に少しずつ色んな感情を覚えていくんだなあ。

(赤ちゃんておもしろい……)

空の笑った顔。それだけが救いかも。

(この笑顔があれば何とか頑張れるかな。アタシ……)

ケン兄ちゃんがビールで一息つきながら報告する。

「そっぴやさ。隣、引越してきたみたいだよ」

「そっ」

「665号室。さっき部屋の前通ったら引越し屋が引き上げるとこだったよ」

「ふ〜ん」

隣に誰が引越してきたかなんて大して興味もないのでアタシは適当に話を合わせる。今はそれどころじゃないし空の笑顔にいやさ

れながら自分を励ましてるところだから。

しばらく空の相手をしてるとインタフォンが鳴った。

(ん？ 誰か来た？)

ここのマンションはテレビ機能付きのインタフォンを使っているのでキッチンの親機で玄関に来た人の映像を見れる。

「お母さんじゃないよね」

とりあえず空を抱っこしたまま親機の映像を確認する。

「あれ？」

(外人だ。って……東南アジア系？)

画像が綺麗なので訪問者の顔つきまではつきり識別できる。

「コニチワ。ハマドデース」

「アシムデース」

(カタコトの日本語？ 思いっきり怪しい……何者？)

「隣ガ、引ッ越シテ来マスタ」

「アイサツ、来ターッ！」

妙にハイテンションの外国人たちにアタシがドン引きしているとケン兄ちゃんが画像を覗き込んで言う。

「あ、お隣さんだ」

「ええっ？ お隣って外人さんなの？」

「そっだよ。665号室」

そっということなら仕方ない。3人で玄関に向かう。

ドアを開けると外国人の2人組がニヤニヤしながら立っていた。

2人ともブカブカのジーンズにすごく変な色のTシャツ。そんなTシャツ「どこで売ってるの？」というか「自分で染めたの？」というレベル。

(名前は……確か背の高いひげ面の方が『ハマコー』だっけ？)

背の高い方が口を開く。

「兄ノ『ハマド』デスヨ、『パキスタン』カラ、来マスタ」

(ああ、ハマコーじゃなくてハマド、ね)

「僕ハ『アシム』デス。デモ、鉄腕ジャナイヨ〜！ 八八八八」

（テツワン？ 意味わかんない）

アタシが首を傾げるとケン兄ちゃんがひと呼吸おいて急に笑い出した。

「ははは。なるほどね。鉄腕アシム。ははは」

（ケン兄ちゃんてばなに馴染んじやつてるの？）

ケン兄ちゃんはすっかりこの2人に気を許したみたいで笑顔であいさつする。

「自分は白石健太といいます。この家の主です」

（はあ？ 誰がアルジだつてえ？ ぜんぜん働かないくせに！）

「で、こっちが妻の美央です」

（な、な、何い〜！ 何、勝手な紹介してんの？ 信じらんない！）

互いに自己紹介が終わったところでハマドが両手で持っていた「うつわ」のようなものを差し出した。

「引越ソバ、デス」

（ラーメン？ しかもチャーシューどつちやりだし……）

アタシは思いっきり顔をしかめてやった。  
するとアシムが眉をひそめる。

「ホラ、ヤツパリ『引越ソバ』ハ『ラーメン』ジャナイヨ！ マツタク『ハヌケ』ダネ〜、兄ちゃんハ」

「タ、タレガ『歯抜ケ』ダヨ！ 才前コソ『モヌケ』ノクセニ！」  
ここでケンカしないでよね。『歯抜け』だか『もぬけ』だか知らないけど。

（変なのが越してきちゃったなあ）

兄弟喧嘩を始めた2人を見てケン兄ちゃんはトホホという顔でハマドからラーメンのどんぶりを受け取る。

「いや。ま、せっかくだから頂くよ」

東南アジア系の外人さんとお話するのは初めて。ちょっと緊張するけど、でもまあ基本は悪い人たちではないんだと思う。こうやっ

て律儀に挨拶に来てるんだし…。  
そこでちらつと空の顔を見る。

(空は怖がつてないかな?)

けど、そんな心配は不要だったみたい。赤ちゃんって人見知りするって聞いたけど空はハマドとアシムの顔を見上げて笑ってる！  
逆に赤ちゃんだから外人でも関係ないのかも。

ハマドが大げさに両手を広げておどける。

「ウォー！ ボク達見テ笑ッテルヨ！ カワイイ赤チャンデスネ〜」  
負けじとアシムも空のご機嫌を取ろうと両手で自分の顔を隠して

……

「イナイ、イナイ…… ババア！」

(ババア?)

どこで教わったか知らないけど間違ってるし。いくらなんでも『  
婆あ』はないでしょ…。

それにしても家を出るところという付き合いもしくちゃならないんだなあ。でもまあ面白いお隣さんで良かった。おかげでアタシもすこし明るい気持ちになれたみたい。

\* \* \*

空がお昼寝してる間に友達とメールをやりとりしていたらミチカに「赤ちゃんの写真送って」ってリクエストされた。アタシは携帯に保存してあった写真の中で空が笑ってる顔を選んでメールで送った。するとしばらくしてミチカから電話が入る。

『美央〜。赤ちゃんの写真って言ったでしょ。お部屋の写真送ってきてどうすんのよ〜』

「あれ？ アタシ間違えてた？ ゴメン。すぐ送り直す」

(おかしいなあ。ちゃんと送ったつもりだったのになあ)

どうせならアタシと2人で写ってる写真にしようと思って今度は

慎重に携帯を操作する。

「これでよし」と

(ミチカどんな顔するかな。空ってば超かわいいから。驚くだろうな)

そんなことを考えながら洗濯物を取り込もうと立ち上がった時、またミチカから電話。

「もしもしミチカ？ どう？ かわいいでしょ！」

『ちよつと美央〜 また間違えてるよ〜』

「……え？ ちゃんと確認したけど」

『自分しか映ってないじゃん！』

(そ、そんな!?)

ミチカの言葉に絶句。血の気が引いていくのが自分でも分かった。

(嘘でしょ……どういうこと?)

『どうしたの美央？ だいじょうぶ?』

「ん……うん。平気だよ。た、たぶん携帯の調子が良くないんだね」

『マジで？ だったら新しいの買えば?』

「そ、そうだね。そうする。そ、それじゃまたね」

辛うじて平静を保って震える指で携帯を切る。

(何で？ 何で？ どうして?)

頭が混乱してきた。アタシは確かに…。

『他言無用と断ったはずだ』

背後で誰かの声がしてアタシは「ひっ！」と飛び上がった。

「誰!?!」

声のした方向に目を向けると……やっぱり!

『無駄なことを』

そう言っただけでアタシを見る黒ずくめの男。あの悪魔のように美しい依頼主だ。

「い、いつの間に? ってか、む、無駄って何が?」

アタシが動揺しながらたずねると依頼主は腕組みしながら答えた。

『この子の写真を送ったようだが、それが無駄な行為だと言ってい

る

(な、何でそれを知ってるの？ この人いったい……) 恐る恐るきいてみることにした。

「何でこの子が写真に写らないのか理由を知ってるの？」  
すると美しき依頼主はあきれたような口調でこう言った。

『当たり前だ。何しろ我々は悪魔だからな』

その言葉に自分の耳を疑った。

今、何て言いました？ 『アクマ』？ 何の冗談？ てかマジ笑えないんですけど……

(ああ。夢か。夢なんだ。これって)

そう思っただけでホッペをつねろうとすると、それより先に頭にガツン！ ときた。

「痛っ！」

頭のでっぺんに鋭い痛み。で、痛みに混じって重み？

(何か乗ってる？)

何だろうと思っただけで頭に手を伸ばすと……

(リンゴ!?)

なんとアタシの頭の上に乗ってたのは赤いリンゴだった！

悪魔と名乗った美しき依頼主は得意げに言う。

『どうだ？ 夢ではないだろう』

(何で突然リンゴ？ これって、もちろん……)

『言っておくが手品ではないぞ』

「え？」

(この人やっぱり……アタシの心が読めるんだ！)

それは間違いない。今のやりとり。それに前に会った時もこんなことがあった。

『お察しの通り、私にはお前の考えていることが理解できる』

(ほ、本物……)

悪魔って空想の生き物じゃないんだ。幽霊とかネッシーとか……。失敬な。そんなつまらないモノと一緒にするな』

そう言って悪魔の依頼主はアタシを睨んだ。やっぱり読まれてる。  
(これは信じるしかない!?)

でも、なんか納得できない。目の前の悪魔はアタシのイメージとはだいぶ違う。だって悪魔って……

「そのう……悪魔つてもつとツノとか牙とかこうゴチャゴチャって感じで……」

『それはお前たち人間が勝手に創ったイメージだろう』

アタシの中で悪魔はもつとブサイクでギザギザなイメージなんだけどなあ。こんなにキレイなはずがないと思うけど。

悪魔の依頼人主はアタシの考えを読み取ってバカにしたように言う。

『悪魔が美しいのは当たり前だ』

(やっぱりアタシの考えてることは筒抜けなワケね……)

『そうでなければお前たち人間を誘惑できないだろう?』

そう言って悪魔の依頼主はニヤリと笑った。

「確かに……」

妙に納得。

『最も悪魔をどうしても悪役に仕立てたい連中にとっては認めたくない事実だろうが』

依頼主の説明を聞いているとなんとなく分かるような気もする。

たぶん悪魔が醜いつていうのは神様とか天使とかしか信じない人がわざと広めた考え方なのかもしれない。だとすると案外この依頼主が言っていることの方がホントなのかも。

(でも待って。この人が悪魔ってことは……? まさか!)

「ね、ってことは『空』は? 空も悪魔、なの?」

『勿論だ。その子は悪魔の血を引いている』

「だから成長が早いのか?」

『そういうことになる』

「ウチに来てまだ4日目だけど……毎日大きくなってらんですけど」

『正確に言えばお前たち人間の66・6倍の早さで成長する』

悪魔の依頼主の説明では人間界と魔界では時間の流れが違う。なので、空は1日で人間の66・6倍、つまり2カ月分以上の成長を  
するらしい。

(だから空は毎日大きくなるんだ……)

その時、急に小さくなってしまった肌着を思い出した。

(てことは服もいっぱい買い替えないといけないんだなあ。やれや  
れ)

アタシがそんな事を考えていると美しき悪魔の依頼主は、(もう  
行かないと)という風に肩をすくめた。

『それでは引き続き頼んだぞ』

『あの……せつかく来たのに会っていかないの?』

『必要ない。いつも見ている』

『いつも?』

アタシがぼかんとしていると悪魔の依頼主はくるりと背を向けた。

そして何か思い出したように振り返る。

『ああ。ひとつ言い忘れていた』

『?』

『なかなか良い名前だ』

『ああ、空の名前……よかった』

名前、気に入ってもらえたみたい。けど依頼主は去り際に一言。

『思いつきでつけたにしてはな』

(……やっぱバレてるか)

悪魔の依頼主はそのまま帰ろうとする。

(他になんか聞いとくべき事って無かったっけ?)

アタシがそう思う間にもさっさと部屋を出て行く依頼主。

依頼主は音もなく廊下を進みまっすぐに玄関に向かう。するとド  
アがひとりでに開いて、依頼主はあつという間に外へ消えていった。  
(ふうん。悪魔でも玄関通るんだ。幽霊みたく出たり消えたりする  
わけじゃないのね)

なんて妙に感心しながらひとりで閉まるドアを見つめる。そし



て、今頃気付いた。

(靴！ 靴は？)

ひよっとして最初から履いてた？ ような気がする。けど廊下とか床とか汚れてないし足音も…。

(やっば、悪魔なのね……はぁ)

なんかドツと疲れがわいてきたんですけど。……はぁ。

## 第4話 すくすく育つ！

「マジで？」

そう言ったきりケン兄ちゃんはすっかり考え込んでしまった。

そりゃそうだ。いきなり『悪魔』なんてねえ。ふつうはドン引きするよね？

「マジで？」

もう1回同じセリフを言ってケン兄ちゃんは目をパチクリ。

ケン兄ちゃんはゲームとかマンガとか好きそうだから、もしかしたら悪魔の存在を信じてくれるかもって思ってた。けど……さすがにこれは無理だよな。

「……なるほど。そういうことか」

「え？ 信じてくれるの？」

「ああ。オレは現実主義者だが、適応力は人より高いんだ」

(適応力が高い人はニートやっではないような気もするけど……)  
まあ、それは黙っておこうと。

「なるほどな。それなら空の異常な成長力の説明もつく」

「よかった。信じてくれる人がいて」

「そうか。それで分かった。悪魔の子なら不思議な力を持っててもおかしくはないな」

「不思議な力って？」

「ああ。今日、散歩に行ったときのことなんだけどさ」

「何かあったの？」

「うん。風船が木に引っかかっているのを空が見つけてさ。空のやつ、それに向かって手を伸ばしたんだ。届くわけないのにさ」

「へえ。かわいい」

「2メートルぐらいの高さかな。空はそれ見上げながら「あー」とか「うー」とかやってたんだ。そしたらさ」

「そしたら？」

「風船がスルスルって降りてきたんだよ。自然にな」

「風船が？ 風に流されたんじゃない？」

「いや。そういう風には見えなかったな。まるで風船の方から空の方に近付いてきた感じだった」

「まさか。空が風船を呼んだとでも？」

「なんせ悪魔の子だからな。もしかしたらそうかもよ」

ケン兄ちゃんはそう言っただけでニヤリと笑うけど……笑うけど……それもアリかも。

「で、その風船はどうしたの？」

「ああ。しばらくベトベト触ってたけどすぐ飽きたみたいだな。空が手を離れたらまた宙に浮かんでどっか行っちゃった」

「お祭りかなんかの風船かしら」

「たぶんな。中にヘリウムガスが入ってたんだろ」

「じゃあ、やっぱりひとりひとりで降りてくるなんておかしいよね？」

「だから言っただろ。空が呼び寄せたんだよ。きっと  
「やっぱり空は『悪魔の子』？ で、悪魔みたいに不思議な力を持つてる？」

だとしたら……それも能力なんかなあ。

\* \* \*

悪魔の子どもだってミルクも飲めばおむつも濡らす。おなか为空けば泣くし、機嫌が悪いとやっぱり泣く。その笑顔は見るものに幸せを、泣き顔には母性を与えてくれる。笑えば天国、泣いたら地獄（うん。やっぱり、ふつうの赤ちゃんだよ）

こつやつとお世話をしているとホントそう思う。

変ってるっていえば、ちょっと成長が早いことぐらい。いや、6・6倍だから……ちょっとどころではないけど。でも、考えようによってはアタシと一緒にいられるのは夏休みの間だけ。だからそ

の方がアタシのこと覚えてくれるかもしれないし。

(空がずつとアタシのこと覚えててくれたら……今の苦勞も報われるんだけどなあ)

そんな感じでいつものようにバタバタとお世話をして空を寝かすつける。

(ふう。やつと寝てくれた)

正直、この時間が一番ほっとする。携帯をチェックするのもこの時間。メールはユツ子とミチカ。簡単に返信して軽くため息。

(やっぱり無い……持田君からの電話)

きのう今日と2日間。続けて電話がないなんてはじめて。なら、こっちからかけてもいいんだけど……

(今10時過ぎかあ。微妙。疲れて寝てたら悪いし)

そういえば自分から電話したことって1回もなかった気がする。

電話だけじゃない。いつもアタシは持田君の誘いに応じてるだけ。そうだ。アタシっていつも待ってばかり。完全に受身なんだ。

(だから進展しないのかな……)

学校があればふつうに会えるのに。そう考えると夏休みっていいことばかりじゃないのかもしれない。

(べつに2日空いたぐらいで、どうってことないよね?)

なのに……なんだろ。妙にさみしい。

少しブルーな気持ちで空の様子を見に行く。薄明かりの中、ベビーベッドですやすや眠る空の顔にそっとほっぺを寄せてみる。やわらかくてスベスベしてる。

(空ってホントにかわいい!)

こうやって寝てるトコなんかホントに天使みたい。これで夜泣きしなければ本当に天使なんだけど。

それに赤ちゃんなのにキレイ。悪魔が美しいのは当たり前ってアノ人が言ってたけど本当なんだなあ。

(長いまつげ……赤ちゃんなのに。きつとこの子はスッゴイ『イケ

メン』になるんだらうなあ。今のうちに唇奪っちゃおうかな。ふふ）  
空のお口のトコに鼻を近づける。赤ちゃんのお口はコンデンスミルクみたい甘い香りがする。

（やっぱ、かわいすぎっ！）

やだ……思わずチューしちゃったじゃん。

（空の初キスうばっちゃった！ でも……アタシも同じだ）

赤ちゃん相手にファースト・キスって。アタシっては何やってんだろ。まるで吸い寄せられるようにキスしてしまった。

（だって、かわいすぎるんだもん！）

そう考えると赤ちゃんの魅力ってすごいと思う。これも一種の能力なのかな。そっぴや前に聞いたことがある。赤ちゃんが『かわいい』のは守ってもらわないと生きていけないからだって。

風船を引き寄せる能力。思わずチューしたくなるかわいさ。

（空ってやっぱ悪魔の子なんだね）

空の寝顔を見てるとそんなことを忘れそうになっちゃう。

でも後になって思うと、この時すでに空はもういっぼの『能力』をみせてたんだ……

\* \* \*

5日目の朝。大変なことに気付いた。

「やだ！ この子もう歯が生えてる！」

急いで育児書をめくってみる。赤ちゃんに歯が生え始めるのは……

「7ヶ月頃!？」

そっか。人間の66・6倍の成長力ってことは、1日で2カ月分ぐらい育っちゃうんだ。そうすると……

「やっぱ昨日の夜で7ヶ月ぐらいだよな？ だいたい合ってるんだ」  
けどもっと大事なことを忘れてた。

「離乳食！」

もつとちゃんと本読んでればよかった。

(てか、ふつうじゃないでしょ。もう離乳食なんて。全然、考えてなかったよ)

ホントは昨日から始めてなきゃなんなかったのに…。

「ごめんね。空」

とにかく本を見て離乳食を用意しなきゃ。

味付けは要らないんだよね。ふむふむ。固さはヨーグルトぐらいか。

(えーと。どれがいいんだろ？ レシピいっぱいだけど)

結局、ごはんをドロドロに溶かして『おかゆ』を作る。

(よく冷まして、と)

赤ちゃんスプーンで空のお口に運ぶ。けど予想通り空は顔をぷいぷい。

「ね。空。おいしいよ。食べてみよ？」

スプーンの先っちょを強引に押し込む。でも、お口に入ったかなって思ったら……ヨダレといっしょに『おかゆ』がデローンと出てきちゃう。

もう一回、すぽっとお口に。すぐにデローン。

めげずにもう一回！ またまたデローン。その繰り返し。

(え〜ん。全然ごっくんしてくれないよう。どうしよう)

泣きたくなくてくる。けど「無理に飲み込ませないように」って本に書いてあるから、ちよっとずつチャレンジするしかないみたい。(これは根気があるなあ……ふう)

\* \* \*

お昼ごはんの後。空の笑顔を見ながら考える。

(空に感情が芽生えてきたのは嬉しいんだけど、それってその分『自己主張』も激しくなるってことだよなえ……)

なんだか同じ泣くのも前よかしつこいし、時々「わざと泣いてる？」って気がすることがあるし。思い通りにならないことが増えた？

(ていうかそればかり？)

ちよつとしたストレスなんだけど、それがたまつてくるとやつぱキツイ。相変わらず夜泣きするし。てか、夜泣きが一番辛いかも。お腹いっぱいになってるはずなのに寝てくれないし。何で眠くならないかなあつて不思議に思うくらい。

それよかもつと不思議なのは隣で空がワンワン泣いてるのに起きない人。昨日の夜なんかわざとケン兄ちゃんの枕元に泣いてる空を置いてみたのに、ちつとも起きやしない。それどころか相変わらず意味不明の寝言。

(昨日はなんだっけ？ ……確か)

そうだ。昨日は寝言で「イ、インディアナ・ジョーンズ……だと？」とか言つてた！ どんだけ変な夢みてんだか！ 勿論、枕投げつけてやったけど。

とにかく子育てがこんなに大変なものだとは思わなかった。

(てか、『想像』超えすぎ！)

空の場合はすぐ大きくなってくれそうだけど、他のお母さんはどうなんだろ？ よく耐えられるなあつて思う。マジで尊敬する。なんていうか、ずっと赤ちゃんのお世話していると段々自分の時間が占領されてつて、いつのまにか支配されちゃつてるような気分になってくるんだよね。だから「アタシは子育てマシーンじゃないっ！」つて叫びたくなる時がある。いやマジで。ホントに機械になつちゃつたんじゃないかつて思うことあるもん。

そんな事を考えながら空の相手をしてると携帯が鳴つた。

「あ〜」と、すかさず空が興味を示す。いつの間にかお座りできるようになった空は手を伸ばしてアタシの携帯を触ろうとする。けど、口に入れようとすると危ないんだよね。

「これはダメよ。ヨダレでベトベトになつちゃうから」

「ぷーっ」

（空のそれは一応、怒ってるのかな？　けど、かわいいブーイングだな）

電話はキョウコからの花火大会のお誘いだった。

『ねえ美央。あさって大丈夫？』

そうだった。夏休み前に約束してたんだ。そっか……あさってなのか。

「ごめん。ちよっと無理っぽい」

『マジで？』

「うん。今ね。赤ちゃんのお世話してるんだけどさ。うちのお母さん居なくなってる」

『え？　美央がひとりでも面倒みてんの？　ありえない？』

「まあ色々あってね」

『んじゃ赤ちゃんも連れてくれば？』

「それは無理でしょ。まだ小さいから。人ごみとかはちよっとね」

『そっかあ。超残念』

「ホントごめんね。ユツ子とミチカにも後で謝っとくよ」

キョウコとそんな会話をしているとケン兄ちゃんが昼間っからビール片手にすうーっと思の前を通過した。

（あんたさえしっかりしてればね……）

ホント、うらめしい。けど、正直、身体が異様にダルいのも事実。それに気力が無いっていうか……。やっぱり、ずっと赤ちゃんといると体力も気力も奪われちゃうのかな……。

\* \* \*

6日目。空がハイハイを覚えた。

昨日の夜、床でゴロゴロしてるとは思ってたけど只やみくもに転がってたわけじゃなかったのね。



けど、最初はびっくりした。冷蔵庫を開けてたらいきなり足になんか絡みついて（何だろ？）と、思って足元を見たらリビングでお座りさせてたはずの空がくっついてるんだから！

（ワープした？）って本気で思った。

試しにちよつと移動してみると空は『犬かき』みたいにお手手で床をかきこんで、しゃかしゃかしゃかかって追いかけてくる。今度はリビングまで移動する。やっぱり空はしゃかしゃかしゃかかってついてくる。

（追っかけてくるのはうれしいんだけど……やっぱり早すぎるって）人間の子供だと今日で10ヶ月目ぐらいだからハイハイしててもおかしくないんだけどさ。

やれやれと思って空を抱き上げる。ずっしり重い。日に日に大きくなってるんだなあと改めて実感。

抱っこしてもらった空は「あ〜」って満面の笑み。

（ダメだ。この笑顔に萌えちゃう。この子の笑った顔見たら何も言えない〜）

空とアタシだけの至福のひととき。

そこにケン兄ちゃんが割り込んでくる。

「今日は買い物行くか」

「買い物？ どこに？」

「デパート。もう電車でも大丈夫だろ」

「たぶんね。けど、何買うの？」

「おもちゃ。それと本とかも必要だろ。服だつてちゃんとしたの買つてやらないとな」

「ああ……そだね」

確かに空の服は近所のベビーショップやスーパーのもので間に合わせてばかり。すぐ大きくなっちゃうから仕方ないんだけど、たまには可愛いのを着せてあげたいよね。

「うん。ケン兄ちゃんにしては気がきくじゃん」

「まあ、それなりに謝礼は貰ってるからな。よし。今日は全部オレ

がお金出すよ」

「マジで？ よかったね〜 空！」

そういうわけで今日は始めての遠出。3人で電車に乗ってお出かけた。

\* \* \*

駅、電車の中、デパートと移動している間も何となく居心地が悪かった。

原因はわかっている。やっぱり、アタシみたいなのが赤ちゃん連れてたらみんな見るよね。いったい幾つで生んだんだよっ！ って思われてるんだろうな…。

けど、お買い物をしてるとそんなことは気にならなくなった。だって自分のものを買う時なんかよりずっと楽しいから。

(なんでだろ？ 空の為に思うとついつい買っちゃうんだよね)

おもちゃ売場で積み木、ブロック、ぬいぐるみ、車をまとめ買い。絵本を10冊。やっぱり歌は大事だからDVDも5本。お洋服売場ではケン兄ちゃんが青くなるぐらいに買いきり！ 店員さんに「ちよっとまだ大きいかも」って言われても空はすぐに大きくなっちゃうからわざと大きめのをいっぱい買い込む。配送してもらおうぐらい買い物をして、アタシはすっかり満足した。

「いっぱい買っちゃったね〜 なんかストレス発散しちゃった！」  
アタシは大満足だけどケン兄ちゃんは半べそかきながらサイフの中を点検してる。

「そりゃ満足だろうよ。こっちのふところは……ヤバすぎる」  
空はベビーカーの中ですやすや眠ってる。

「ね。お腹すいた。お昼食べてなかったし」

「そうだな。じゃ、最後に買うもの買ってからレストランに行くか」

「え？ まだ買うものあんの？」

「ああ。じゃ行くか」

(ひととおり必要なものは買ったつもりなだけだな。他に何かあったっけ?)

不思議に思いながらケン兄ちゃんについていく。

何も言わずについて来いっていうからそれに従ってきたものの…

…ケン兄ちゃんが向かったのは呉服売場?

(さすがに七五三には早いんじゃないかなあ)

そう思ってたアタシがそれを言おうとすると、ケン兄ちゃんが売場の一角を指差して言った。

「ほら。好きなを選びなよ」

「選ぶって……あ!」

それは『浴衣』のコーナーだった。

「明日、花火なんだろ。行って来いよ」

そう言ってるケン兄ちゃんは微かに笑った。

「ケン兄ちゃん……でも……」

「大丈夫だって。空はオレがみるから」

「けど……いいの? ホントに」

「おお。新しい浴衣着て息抜きしてこいよ」

「……ありがとケン兄ちゃん」

「さっさと選ぼうぜ。腹減ってるんだからさ」

「うん」

思ってもなかったプレゼント……正直、泣きそう。

感激してケン兄ちゃんがちょっとかっこ良く見えちゃった…。

\* \* \*

部屋に帰ってカーテンレールに吊るした浴衣を見てうつとり。

色はピンク。正確には『紅梅色』ってお店の人は言ってた。ケン

兄ちゃんもっと明るいピンクを薦めてくれたけど、これでも思い

切った方。本当は桜色でも良かったんだ。でも、こうしてみるとすっごい可愛い。柄は朝顔。花びらの色が、薄い青、淡い紫、赤紫の3色。朝顔って朝と夕方では花の色が変わってしまうからその3色なんだって。それ聞いてちよっと自慢!

(なんか浴衣見てニヤニヤしてるなんて怪しいよね。アタシ)

そこで携帯に着信。誰だろ……って持田君?

慌てて出る。

『よ! 元気にバイトやってる?』

『うん。大変だけど何とか……』

『こっちは毎日地獄だぜ。あの監督、絶対DSだな』

『そんなに練習キツイの? 身体大丈夫?』

『もう筋肉痛のレベルじゃないな。今も湿布だらけだよ』

『そっか……毎日大変なんだね』

『おお。家帰ったらヘトヘトでさ。悪いな。電話も出来なくなつて』

『ううん。ありがと』

良かった。気にしてくれてたんだ。それが分かってホッとす。

『ところでさ。美央は明日、花火行くの?』

『え? うん。ユツ子たちと約束してるの』

『マジで? そっか……だったら途中で抜け出さねえか?』

『抜け出す?』

『なんかさ。こっちはサッカー部みんなで行くみたいなんだけどさ。』

ぶっっちゃけ嫌じゃん』

『そだね。先輩とか一緒だと楽しめないかもね』

『だろ? だから途中で抜けてさ。会わない?』

『でも……ユツ子たちに悪いような……』

(事情を話せばユツ子たちも分かってくれるかなあ?)

『どうせなら2人で花火みようぜ!』

持田君はすっかりその気になつてる。アタシもそれは嫌じゃない。

てか、会いたいつてのが本音。

「わかった。明日、電話してくれれば何とかするよ」

『よっしゃ！ んじゃ、楽しみにしてるぜ！』

電話を切った後も、しばらく頭が火照るような感じ。

(何だろ？ この感覚？)

久しぶりに持田君の声を聞いた！ それに、お互いに抜け出して

『密会』みたいなデートするって！ 明日の花火大会がさらに楽し

みになってきちゃった。もう一度、浴衣を眺めてひとりで照れる。

明日はこれ着てデートだ。

(空には悪いけど……超楽しみ！)

## 第5話 嵐の予感

夕方にユツ子の家に集合して浴衣に着替える。

ユツ子のお母さんがみんなの帯と髪をセットしてくれた。ユツ子は赤、キヨウコは黄色、ミチカは水色、そしてアタシはピンクの浴衣。ちょうど4人の色が分かれてる。

「色、かぶらなくて良かったね」と、ミチカが笑う。

キヨウコが団扇をバツバツサあおりながら言う。

「なんかさ。ウチら何とかレンジャーみたいじゃない?」

「そだね。もう1人いればそうなるね」と、ユツ子。

それを聞いてキヨウコがニヤリ。

「そしたらウチら…… 悩殺レンジャー!」

そう言っでぐいつと胸を強調したポーズを決めるキヨウコ。

それを眺めながらユツ子が苦笑い。

「悩殺レンジャーって……キヨウコ『ハレンチ』すぎ!」

「何言ってんの。浴衣は女の戦闘服だよ?」

あっけらかんとしたキヨウコのリアクションに皆で大笑い。そんな感じでにぎやかに縁日に向かう。

\* \* \*

カキ氷に綿菓子。青海苔が歯につくのでたこ焼きはパス。なのでイカ焼きをごはん代わりに縁日を楽しむ。けどそこは女の子同士。そこはやっぱり話題は自然と…。

「ねえねえ! あのお面屋のお兄さん。超カッコ良くない?」

「え〜 ひよつとしてミチカおじさん好き?」

「おじさんじゃないって! ユツ子がさっき言っただのよりはイケメンだと思っけど?」

「まあまあ2人も。あたしはどっちもいけるわよん」

「キョウコは守備範囲広すぎ！」

そんなユツ子の突っ込みにもかかわらず、キョウコはすれ違った中学生ぐらいの男の子3人組にまでチラ見して愛想笑い。男の子たちのリアクションを見てミチカがクスクス笑う。

「ね。さっきの子たち。キョウコの胸ガン見してたよ」

「ガキには興味ねえ」

カッコいい男を物色したり、中学生ぐらいの男の子たちの視線を楽しんでみたり、女の子四人でお祭り気分を味わう。

1時間ぐらい遊んだところでアタシの携帯が鳴った。持田君からだ。

『そっちは出れそう？』

「ん。大丈夫だよ」

『こつちもドサクサで抜けてきたんだ。じゃあさ。西口のたこ焼き屋の前あたりで』

「わかった。今から行くね」

電話を切ったところでキョウコたちに冷やかされる。

「うらやましいね」このこの「と、キョウコには肘で突かれ、ミチカには「帯。直す時には連絡してね」って言われる。

意味がわかんなくて聞いてみる。

「え？ 帯を直すって、どういうこと？」

するとミチカは意味深に笑う。

「脱いじゃった後」

「へ？ な、な、何それ？ アタシはそんな」

もう。なにエツチな想像してんだか！ そんなことになるわけないじゃん。……わかんないけど。

とにかく皆に見送られてアタシは持田君との待ち合わせ場所に向かった。

あまり広い神社じゃないけどこの時間になると人ごみが凄くてち

よつと焦る。

(ヤバ。化粧なおしてる余裕は無いよね……)  
で、ようやく持田君とご対面。

持田君は「よ！」と、軽く手をあげてアタシのを見る。

(なんか照れる……)

「浴衣いいじゃん！　なんか大人っぽいし」

「……ありがとう」

声にならないくらい小さな返事。やばい。いっぱい、いっぱいだよ。

「もうすぐ花火だな。ゆつくり観れる所に移動しようっか？」

「……うん」

アタシが頷くと同時に持田君が手を伸ばしてくる。指先をきゅつと握られてぐいっつと引かれる。

(あ！)っと思っただけど一気にテンションが上がる。

(……手、繋いじゃったよ)

西口を出て打ち上げ会場に向かう。商店街にはたくさんの方が行き交っていてとてもにぎやか。そんな中を持田君に手を引かれてチヨコチヨコついて行くアタシ。なんだか小型犬が飼い主の後にくつついていく散歩みたいだ。

「やべー。もうすぐ始まつちゃうかな」

持田君がそう言った時だった。ポツンとひとつ。おでこに違和感あれ？　って思ってたらまたひとつ、今度は腕にポツリ。

「マジかよ？」

持田君が天を仰ぐ。アタシもつられて上を見る。すると、ポツ、ポツ、ポツ、とリズムカルに水滴が顔に当たった。

(雨？　そんな予報は無かったけど？)

周りの人達も気付いたようで不安そうに空を見上げる。いつの間にか上空を雲が覆っている。どこからか雷の音も聞こえてきた。

「マジで降んのかよ！」

持田君がうらめしそうな顔をする。と、同時にポツポツの間隔が



短く、より強くなつてアタシたちの居る場所を狙い撃ちしてきた。そして大きな雨粒があちらこちらで音を立て始め、やがて大雨になつてしまつた。

(やだ！ どうしよ？)

突然の大雨に辺りはちよつとしたパニック。雨宿りできそうな場所を求めて持田君とアタシも走つた。メインの通りから脇道に抜ける。どこかのお店の軒先で何とか雨をしのぐ。

「大丈夫か？ 美央」

「うん。ちよつと濡れちゃつたけど」

滝のような雨が凄い勢いで地面を打つ。その跳ね返りが足元を濡らす。おまけに雷があちこちでゴロゴロ。

「うえっ！ カミナリ酷えな」

「花火できるのかな？」

「どうだろ。中止かもな」

「そんな……」

想定外の大雨。周りを見回しても誰も居ない。まるで陸の孤島に取り残されたみたい。

その時、ピカツと辺りが照らされて数秒後にドツカーン！ 近くに落ちた？

(ひっ！)

思わず持田君の腕にしがみついた。地響きのような音の余韻。何気に彼の顔を見上げる。目が合った。

(あっ！)

……それは突然の出来事だつた。目を閉じる間も無かつた。

持田君の顔……持田君のくちびる……。

はじめてのキスは、ちよつぴり濡れたくちびる同士の出会いだつた。はじめにヒンヤリ、そして広がっていくぬくもり……。余裕なんて、ない。震えをこらえながらくちびるで彼を受け止める。だんだん頭の中がジンジンしてきた。

しばらくしてアタシは目を開けた。持田君はいたずらっ子のよう

な笑顔でアタシの様子を見てる。

「な。どうする?」

止まない雨。突然のキス。次に何をしようなんて言われても……。その時、なんでか分からないけどフツと不安がよぎった。なんで分からないけど『空』のことを思い出した。

(ちゃんと寝てるかなあ……………)

アタシがそんなことを考えてると持田君がもう一度聞いてきた。

「なあ。これからどうする? 浴衣も濡れちゃったし……………」

(え? それって……………どういう意味?)

怖くて口に出せない。まさか持田君…。

「ホテル行かね?」

「え……………」

(そんな……………急に言われても……………)

「な。いいだろ?」

「……………だめ」

思わずそう答えてしまった。すると……………

(え?)

持田君の怒ったような顔! 『何だよ』って顔してる。

(……………なんでそんな顔するの?)

気まずい……………。

ふと雨音の存在に気付く。まるで止まっていた時間がまた動き出したみたい。

「じゃあ帰んのかよ?」

その言い方。完璧、怒ってる。

(……………エッチじゃなきゃダメなの?)

気分が落ちる。雨音が、うざい。

止む気配が無い雨の中、花火大会は中止というアナウンスが流れしてきた。

(もう意味ないじゃん)

泣きたくなってきた。

ほとんど衝動的にアタシはその場から逃げ出した。  
ただ独りになりたくって、びしょ濡れになりながら、ひたすらタクシーを探す。なんでか分からない。ただ、ただ、持田君のあんな顔を思い出したくなくて……アタシは逃げ出した。

\* \* \*

部屋に戻ってから、とりあえず濡れた浴衣を脱いで着替える。お風呂に入りたかったけど空の様子が気になってリビングへ。

「……ただいま」

リビングをのぞくと空を抱っこしてたケン兄ちゃんが振り返った。

「あれ？ ずいぶん早くね？」

「花火……中止になっちゃったの」

「中止？ なんでまた？」

「大雨。雷も凄かったし」

「んなバカな。この辺、まったく降ってねえぞ」

「マジで？ だってあんなに……」

そう言いかけて思い出した。確かにタクシーを降りた時、雨が降った跡は無かったような気がする。

「ホントにひどかったんだよ。花火が中止になるぐらい」

「ゲリラ雨なんじゃね？ ていうか、もしかしたら空が降らせたのかもよ」

ケン兄ちゃんはそう言って笑う。

「どういうこと？」

「空がすっげえ泣くからさ。大雨でも降れば花火中止になって早く帰ってくるかもよって言ったんだ」

「まさか。いくら空でもそんな……」

「いや。分かんねえよ。なんせ悪魔の子だからな」

ケン兄ちゃんは冗談っぽくそう言うけど、さすがにそれはちよっ

と信じらんない。

空はというとケン兄ちゃんに抱かれてスヤスヤ熟睡してる。

「よく寝てるね」

「寝るまでが大変だったよ。こいつ、ずっと美央ちゃんのこと探し回ってたさ」

「……そんな」

ケン兄ちゃんから空を受け取った瞬間、すぐ着替えさせなきゃと思っただ。

（たぶん泣き疲れたまま寝ちゃったんだろうな。ゴメンね……空）

ケン兄ちゃんに着替えを持ってきてもらって空をソファに寝かせ。で、服を脱がせて気がついた。空の膝小僧が赤黒くなってる！

（何これ？ もしかしてハイハイでアタシのこと探してたから？）  
膝のところが体育館の床で擦った時のように軽いやけどみたいになってる。そんな痛々しい跡を見て猛烈な自己嫌悪……。

（ごめんね。ごめんね……）

急に涙が溢れてきた。どうしようもなく涙が出ちゃう。タクシーの中でも泣かなかったのに。

（ごめんね。ごめんね……空）

空の泣きはらした顔に何度も謝る。

「どうした？」

ケン兄ちゃんが心配してくれる。けど、悪いのはアタシ。

「アタシ……ダメな母親だよ」

空が必死でアタシを探し回ってる時にアタシは……。

「そんなことないって！」

ケン兄ちゃんはそう言ってなくさめてくれるけど、アタシが空をこんなに泣かせちゃったんだ。アタシは母親失格……。

申し訳ない気持ちがいっぱいで、そつと空の顔をなでる。すると突然、空が目を開いた。

一瞬、きょとんとした顔でアタシの方を見る空。そして次の瞬間、空の顔がくしゃくしゃに崩れる。

「んまんま！ んまんま！」

空は泣きながら繰り返す。

「んまんま！ んまんまっ！」

アタシがそつと抱きしめると空は一生懸命、アタシの首にしがみついてくる。

「んまんまっ！ んまんまっ！」

（もしかしてママって言うてるのかな……）

いつもより強く空を抱きしめる。

「もうだいじょうぶだよ。ごめんね。空」

（ホントの母親じゃないのに。こんなに泣くなんて……）

頭をなでてやりながら思った。

小っちゃな子供にとっては母親がすべてなんだ。小さな子供には世界がひとつしかない。そして、そのちいさな世界には母親しかない。たとえそれがどんな母親であっても、子供にとってはそれがすべて。だから空にとってはアタシが居ない世界は怖くてたまらないんだ……。

（ずっと抱っこしてあげて……ゆるしてね。空）

\* \* \*

8日目の朝。昨日の夜は空と抱き合ってたまま寝ちゃったらしい。

空は空で1回も起きなかったし、アタシも疲れてた。目が覚めた時、一瞬、違う夢にジャンプしちゃったかと思った。

一晩、泣いたらずいぶん気分が楽になった。持田君のことも、空を泣かせたことも。

（今日は空といっぱい遊んであげよつと）

そう思ってベッドから起きる。

（今日の天気はどんなかな？）

何気なくカーテンをあけて気持ちのいい朝を迎えようとした時だった。

「……………何これ？」

バルコニーに出るガラス戸…。

そのガラスになぜか大きな『ひび』が入ってる。それもひとつじやない。まさかと思ってバルコニーに出てみた。するとやっぱり…。

「やだ……………こつちも……………」

リビング側のガラス戸にも同じように大きなひび割れが広がっている。

いったい何が起こってるのか理解できない。そして、今日の前にある現実が、ある事件を連想させた。

（ケン兄ちゃんのゲーム……………あのときと同じだ。……………これってまさか？）

昨日の夜も空は激しく泣いたらしい。それに気付いた時、背筋がぞつとした。

（まさか……………まさか、空が……………）

## 第6話 天秤

空はどこまでもついてくる。たぶん、昨日のことを覚えてるんだろうな。

「だいじょうぶよ。ママ、居なくなったりしないから」

何度そう言い聞かせても空はハイハイでついてくる。で、アタシが立ち止まると抱っこしてっという風に足にからみつく。そのうちにアタシの足につかまって立ち上がるうとする。

「ちよつ、危ないよ！」

つかまり立ち？ そっか。今日で空が来て8日目。例の66・6倍で計算すると、もう1歳を超えてるんだよね……。

抱っこしてあげると空はうれしそうに「あ〜」って声を出す。とつてもかわいいんだけど……重い！

（ホント毎日重くなってるんじゃない？）

この調子だとあつという間に大人になっちゃうんじゃないかなあ……。ちよつと空が成長したところを想像してみた。うん。絶対にイケメンだ。間違いないっ！

（けど……まさかヒゲなんか生えたりしないよね？ こんなにお顔ツルツルなのに、いつかはケン兄ちゃんみたいなヒゲが……）

「そんなのヤダ〜！」

自分でもバカみたいとは思っけど、やっぱり空にはツルツルの美少年になつて欲しい！

\* \* \*

今日は空とたっぷり遊んであげることにしたから午前中に公園にお出かけ。

（ケン兄ちゃんが言ってた公園ってここだよな）

大きな木がある公園。日陰があるから日差しもなんとかなりそう。

たぶん、みんな同じ考えなんだ。意外と親子連れが多い。

「ね、空と同じぐらいの子もいるよ」

空はベビーカーから身を乗り出して早く降りたいみたい。

空を砂場に降ろしてあげると、さっそくお座りして「あ〜」と、ごきげん。この前買ったおもちゃを出してあげるとさらに空のテンションがアップ。ケン兄ちゃんの言った通りだ。空は夢中で砂をほじくってる。

(砂場遊びのどこが楽しいんだろ。子供って不思議だなあ)

しばらく空を遊ばせると、誰かの「あ!」と、いう声が聞こえた。

(なんだろ?)と、思って他のお母さんたちのおしゃべりに耳をす  
ます。

「やだ。またあの入よ」

「頭おかしいんじゃない?」

「警察って超使えくない?」

なんの話してんだろ? と思ってアタシも周りを確認。

(ウソ?!)

目を疑った。大きな犬を連れたおじいさんが堂々と公園の中を散歩してる。

(あの犬、超でかくない?)

なんて種類の犬なんだろ。顔はブルドッグみたい。けど大きさが全然ちがう。

(てか、こんな小さな子が集まる場所にその犬はないでしょ!)

お母さんたちも無神経なおじいさんを非難する。

「あのジジイ注意すると逆ギレするんだよね」

「前なんかユキノちゃんとおじいちゃんに殴りかかってきたんだって!」

「マジで? ボコられれば良かったのに」

「てか、死んで欲しい」

そんなお母さんたちの会話を聞いてるとアタシもだんだんムカついてきた。



(子供が犬に襲われたら大変じゃない！ 信じらんない)

「あ。雫ちゃんのお母さんとミクちゃんのお母さんが行った」

「また逆ギレすんじゃない？」

「あらら。ジジイ早速、大声出してるとし」

「けど、珍しくない？ 今日引き下がるみたいよ？」

お母さん2人組に注意されたおじいさんは、犬を連れて公園出口に向かった。途中で何回も振り返って何か怒鳴ってるけど。

(ふう。良かった。でも色んな人が公園にくるんだなあ  
ところが……。)

(え？)

信じられないことが起きようとしてる。さっきのおじいさん。いったんは公園から出ようとしてた。けど、急に立ち止まると屈みこんで犬の首輪をいじってる、ように見えた。みんなは異変に気付いてない。

「う、うそでしょー！」

思わずアタシが口走ったので近くにいたお母さんたちが「なににな？」、「どうしたの？」と、反応した。

アタシは公園出口を指差した。それを見てみんなが啞然とする。

「は？ あのジジイ何を？」

「ちよつとアレ！ まさか？」

おじいさんはリードを外すと犬を解放してしまった！

(危ない！ 空を逃がさなきゃ！)

アタシは慌てて砂場の空を抱き上げる。犬の動きに注意しながら息を飲む。するとおじいさんはこっちの方を指差して犬をけしかけた。

「きゃっっ！」

「うそっ！」

砂場近辺に居たお母さんたちがパニックになる。

(ど、ど、どこに逃げたらいいの？)

大型犬がこっちに走ってくる！

「危ないっ！」

誰かの子供が逃げ遅れた！ その子供に向かってドタドタと走ってくる犬。ハアハアって犬の吐く息が近付いてきた。

（やっぱ大きい！ あんなのに襲われたらあの子……）

思わず目を閉じた。その瞬間。

パンツ！ という甲高い破裂音。と同時に『ギャウンツ！』という悲鳴？

恐る恐る目を開ける。

「ぎゃー」と、泣くのは襲われかけた男の子。その子の母親が子供を抱きしめる。

で、そのすぐそばでは……。

犬が仰向けになってヒクヒクとケイレンしてる……。

（血？ 犬の血？）

犬は血まみれになりながら苦しそうな声を出した。死んではいないみたいだけど血の量がハンパない。

シーンとした中で男の子の泣き声。いったい何が起こったのか誰もわからない。

「鉄砲？」と、誰かが呟いた。

そう言われてみればそうかも……でもお腹のところが切れてるよっに見えるけど……。

「うああっ！」って誰かが叫ぶ。見ると飼い主のおじいさんがいつの間にか駆け寄ってきてたらしい。

「誰じゃあ！ 誰がやったんじゃあ！」

犬を抱き上げておじいさんがわめく。

「誰か救急車！ 救急車よんでくれ！」

おじいさんの訴えにお母さんたちの冷たい視線。

「ばっかじゃないの？ 犬に救急車って……」

「ざまあ」

「行こ、行こ。巻き込まれたくないし」

確かにこんな公園で犬を放すなんてひどいと思う。

(でも、ちょっとかわいそう……)

おじいさんは血まみれの犬を抱きかかえて泣き叫んでる。だんだん人が集まってきた、その様子を遠巻きに見物しはじめた。ここにいちやいけないような気がして、アタシは空をベビーカーに乗せた。(あれ? この子寝てるし……今の騒ぎとか平気なの?)

不思議に思いながら砂場のおもちやを回収する。そしてはつとした。

(まさか……これも?)

嫌な予感。妙な胸騒ぎ。まさか……空が……やったの?

(ヤバ……)

震えが止まらない。

(訳わかんないけど、とにかく逃げなきゃ!)

やじうまを避けて公園出口に向かう。すると、慌てていたせいで、すぐく背の高い男の人にぶつかりそうになった。

「う、ごめんなさい」

アタシが謝りながら見上げると、その男の人はふつと顔をこちらに向けて、ニヤリと笑った。

(キモッ……)

その笑い方にアタシはぞっとした。こういう雰囲気ですんな風になんか笑うのが変っていうのもある。けど……なんていうか、危ない感じ。格好も変。この季節、こんな時間に真っ赤なシャツに黒いチヨッキは無いでしょ。夜のお仕事なのかな?

(それにこの人、なんかイタチに似てる……)

頭が妙に小さいからなのかな? 動物の『イタチ』を連想しちゃった。

(怖……)

なんだか余計に逃げ出さなくなって、アタシは慌ててベビーカーを押す。で、コソコソとその人の脇を通り過ぎようとした時だった。すれ違いざまに声がした。

『まだだな』

そんな風に聞こえた。

「え?」と、思って振り返る。

(誰に……言ったの?)

イタチみたいな男の人はニヤニヤしながらアタシたちの方を見る。

(今のはホントにこの人が言ったの? だとしたら、どういう意味?)

頭が混乱してきた。

(もうヤダ!)

とにかくアタシはダッシュで逃げた。後ろは振り返らずに…。

\* \* \*

部屋に戻ってから公園での出来事をケン兄ちゃんに報告した。

ケン兄ちゃんはフンフンと頷きながらアタシの話を聞くと眉間にしわを寄せて名探偵みたいに呟いた。

「やっぱりな。思った通りだ」

「どういうこと?」

「恐らく、空にはサイコキネシスの能力があるんだろうな」

「何それ?」

「簡単に言えば超能力。普通なら信じられんが、悪魔の子なら十分あり得る」

「……超能力?」

「ああ。もしかして犬が襲ってきた時、空は大声で泣かなかったか?」

「それは気がつかなかったけど……襲われそうになったのは他の子だし」

「そうか。とっさの出来事だったから判らなかつたんだろうな。けど、その後で急に寝ただろ?」

「……うん。気がついたら寝てた」

ケン兄ちゃんはアゴをさすりながら何か考えてる。そしてじつとアタシの顔を覗き込む。

「前にも同じこと無かったか？」

ケン兄ちゃんのゲーム機が破壊された時と同じだ。それに今朝の割れたガラスも……。

「オレのときも同じことがあったよ」

「そうなの？」

「ああ。ベビーカー押してたら車が飛び出してきてさ」

「危ないじゃない！ 何やってんのよ！」

「いや。それは大丈夫だったんだけどさ。「こんな所でスピード出しやがって」ってム力ついたんだ」

「ふうん。それで？」

「したらさ。空が「あーっ！」って叫んだんだ」

「ホントに？」

「本当だって。空も頭にきたんじゃないかな。でき。パンッ！ て何か破裂音がしたわけよ」

「破裂音って……さっきのと同じかも」

「だろ？ で、その車の後輪が片方、外れたんだよ！」

「マジで？ それって……」

「一瞬だったよ。まあ、大事故にはならなかったけど」

空が怒ると何かが壊れる……それは空の能力？

（そんなの信じたくない。けど……）

怖くなってケン兄ちゃんに確認する。

「ね。それってやっぱり空のしわざなのかな？」

「だろうな。どうやら空にはそういう能力があるらしい  
ため息が出ない。

（たしかに空は悪魔の子だけど……そんな力があるなんて）  
突然、誰かがアタシたちの会話に割り込んだ。

『今頃気付いたのか？ お前たちは』

ハツとして声のした方向を見る。

(やっぱり……)

予想通り。リビングのソファで悪魔の依頼主がふんぞり返ってる。

やれやれと思って一応、文句を言う。

「聞いてないんですけど！ てか、危なすぎ！ 空になんてことさせんのよ！」

悪魔の依頼主はきれいなラインの眉を寄せて涼しい顔。

『別に私がやらせた訳ではない。あの子はお前達の気持ちを代弁したに過ぎない』

「アタシたちの気持ち？」

『そうだ。あの子は感受性が強いんだ』

(カンジユセイ?)

聞きなれない単語にアタシが戸惑ってる悪魔の依頼主は呆れたように言う。

『辞書を引け。辞書を』

「はいはい」

『ハイは1回で良い。バカモノが』

(なんでそこまで言われなきゃなんないの？ てか、細かいって！  
それでもホントに悪魔なの?)

『何ならもう一回頭にリングを落としてやろうか?』

「いえ。結構です……」

そんなやりとりを黙って見守ってたケン兄ちゃんが恐る恐る口を開いた。

「あの……つまり、それって空の感情が高ぶると『パンツ』って感じで爆発が起ると?」

『そうだ。可愛いもんだがな』

「可愛いって！ ちよっ、何言っちゃってんの?」

「待ちなよ美央ちゃん」

「だって……」

「いいかい。よく考えてみなよ。それってオレ達にも責任があるってことなんだよ」

「責任？」

アタシはケン兄ちゃんの顔を睨む。

(何が言いたいわけ?)

「多分、空はオレ達の感情を読み取ってそれに反応してるんだよ」

『ほう。察しが良いな。ニートにしては』

依頼人の言葉にケン兄ちゃんがうなだれる。

「ニートは余計です……」

「ま、まあ、分かったから。うん。そうよね。空はアタシたちの心に反応してるんだよね？」

アタシのフォローにケン兄ちゃんが頷く。

「うん。だから気をつけなくちゃな」

だいたいの意味は分かる。育児の本にも書いてあった。赤ちゃんは大人の顔色とか良く見ていて、その感情とかを読み取ってるって。悪魔の依頼主はソファから立ち上がるとクールに言った。

『お前たち次第だ。あの子がお前たち人間の味方になるか、それとも……』

やっぱりその顔つきは悪魔そのもの！まるで氷の微笑。

「だ、大丈夫だもん。空はアタシたちが絶対にいい子に育てるんだから！」

『クク。だといいがな。子供は繊細な『天秤』と同じだぞ。どちらにでも転ぶ』

悪魔の依頼主はそう言い残してマントをひるがえした。

(真夏にマント……悪魔でなきゃただの危ない人だよ)

そこでドロンと消えると思いきや、依頼主はダイニングのアタシたちの脇をスルーして、今回もスウィット音も無く廊下を進んで、やっぱり玄関から出て行った。

その様子を見ていたケン兄ちゃんが首を捻る。

「なんで玄関なんだ？普通に消えればいいのに」

良く分らないけど、アタシは適当に答える。

「一応、礼儀なんじゃないの？」

けど、悪魔の依頼主が居なくなつてからジワジワと嫌な汗が出てきた。簡単に言ってくれちゃったけど、アタシたちの育て方次第で空が…。

(人間の味方。それとも……敵？)

そんな恐ろしいこと！ 空が『悪い悪魔』になつちゃうなんて！  
そんなの嫌だ！

「ちよつとぐらいヒゲが生えてもいいから普通の男の子になつて欲しいよ。ケン兄ちゃんみたいにナマケ者だと困るけど」

「あのなあ」と、ケン兄ちゃんが頭をボリボリかく。そして真面目な顔で呟いた。

「つまり悪魔にも天使にもなるつてこと……か」

そう言われてズシンと責任感が…。

「そうだね。気をつけないといけないね」

「オレ達のせいで人類滅亡とかなつたらシャレにならんからな」

「ちよつと！ 怖いこと言わないでよ」

「いや。今は赤ちゃんだからあれぐらいだけどさ。大きくなつたらもつと凄えことになつしまうかもしれないね」

ケン兄ちゃんの言うことは大げさだと思う。けど、改めて思う。空を育てるつていうのは、本当に責任重大なんだ。

(だいじょうぶか？ アタシ)

\* \* \*

空にお昼ご飯を食べさせながら考えた。

(やつぱは信じらんない。こんなにかわいい赤ちゃんが人類の敵になつちゃうとか……)

食欲旺盛な空は、ぱっくん、ぱっくんご飯を食べる。アタシがス



ブーンの手を休めると「あゝ」って怒る。そのうち自分の手でナポリタンをひったくって口元にもっていきこうとするからお口のまわりがベチヨベチヨ……。

「よく食べるね。空は」  
「うゝ」

空はきれいになったお皿を手で叩いてアピールする。

（もっと食べたいのかな？ けど大人と同じぐらい食べてない？）  
これで2回目のおかわり。身体が急に大きくなってから足りないのかなあ。

「はいはい。ちょっと待っててね」  
キッチンでおかわりを用意する。結局、フライパンの中味は全部出しちゃった。

（あれ？ またハエだ）  
いつの間にかハエが入ってきたみたい。

「どうもこのマンション、ハエが多いんだよね」  
何か叩くものがないか探したけど適当なのがない。

アタシが手でハエを追い払っていると、空が騒ぎ出す。

「んまんま、あうゝ」  
「もうちょっと待ってね」

（ハエ……どこに行ったんだろ。やっぱり衛生的じゃないよね）  
そんな感じでハエを追っていると、「マゝマ」って声が出た。驚いて振り返る。

「空？ 今……『ママ』って言った？」  
空は目をまん丸にしてアタシの顔を見てる。そしてもう一度、「マゝマ」と言った。

「アタシのこと……だよね？」  
昨日の夜に大泣きしてた時には「んまんま」って繰り返してたけど……今のはアタシのこと呼んでくれたんだよね？

はじめて空が『ママ』って言うてくれた！  
ウルウルってきた。

「空」

アタシは思わず空に抱きついた。で、空のほっぺにいっぱいチュウをした。

(かわいい！　かわいい！　超かわいいっ！)

テンション上がりまくりっ！　超うれしー！

気がつくと空が驚いた顔でアタシの顔を見てる。でも嫌そうな顔じゃない。

なんだか涙出てきちゃったよ…。

アタシは空をそっと抱きしめた。

(この子は絶対にいい子！　絶対に悪い悪魔になんかささせないから！)

## 第7話 ないな！

クーラーの効いた部屋で空に絵本を読んであげる。

さつき空が「ママ」って呼んでくれたからアタシは張り切って空に言葉を教える。

アタシが言った単語を空が真似する。犬の絵を指して「ワンワン」って言えば、空も「ワンワン」熊が転んでる場面で「転んだ」って言えば空は「こりよんだ」と真似をする。

(この子、頭いいんだな) やっぱ人間の66・6倍だから?)  
ゆっくり、じっくり時間をかけて絵本を読む。出てくる言葉をひとつひとつ空にインプットしていくみたいに。

あんまりにも空の覚えがいいからアタシが夢中で本を読み聞かせてると携帯が鳴った。

(いいとこなんだけどなあ)

着信を見るとキョウウコからだった。とりあえず出てみる。

『美央』 昨日の夜はどうだった?』

キョウウコは無邪気にそんなことを聞いてくる。

「や……それがね」

アタシは持田君を置いて帰ってしまったことを正直に話した。

『ふうん。そうだったの』

キョウウコはアタシの話を聞き終わると電話の向こうで軽くため息をついた。

……短い沈黙。

『あのね。美央。隠しておくの嫌だから言っね』

「どうしたの急に?」

『実はさ……見ちゃったんだよね。昨日』

「見ちゃったって、何を……」

『持田君。9時半ぐらいだったと思う』

9時半。アタシが別れてから1時間ぐらいかな……。

「で、どこで見たの？」

『モスの前。タクシー乗ってた』

「タクシー？」

『てつきり美央と一緒にだと思ってたんだけど……』

キヨウコが言いにくそうに続ける。

『ごめんね。さっきの話聞くまで勘違いしてた』

「ってことは……誰かと一緒だったのね？」

『……うん』

「それって、女？」

『だと思っ』

それを聞いてクラツときた。ズーンと気分が落ちる。キヨウコの言葉を信じないわけじゃないけど……信じられない。てか、信じたくない。

『ちよつ美央！ 大丈夫？』

「……うん。だいじょうぶ」

無理に答えてみたけど頭の中では（誰？ 誰と？）って疑問がグルグル巡る。

キヨウコがなぐさめるように言う。

『もしかしたら誰かを送って行ってただけかもしれないし』

「誰かまでは分からないんだ……」

『ん。ちよつとそこまでは……。そうだ。本人に聞いてみよっか？ それとなく』

「いや。それはダメ！」

『けどさ……』

これ以上キヨウコを心配させるのは悪いと思って精一杯、明るく振舞う。

「今度、持田君に聞いてみるよ。うん。自分で解決するから」

そう言って電話を切ったものの……。

（無理だ。そんなこと聞けないよ）

はぁ……やっぱアタシのせい？

けど……ひどくない？

よりによつて同じ日に？ 誰とタクシー乗ったの？ その後どこに行ったの？

今のアタシじゃそんな追及できない。というより持田君とケンカになつちやうよ。今の状態でそれは……正直きつい。そんな風にウジウジ考えてしまう自分が嫌だ。

(できれば持田君が説明してくれないかな)

結局、アタシはいつも待つてばかりだ。

\* \* \*

夕飯の準備をしてた時、大根を切つてると人差し指に激痛が走つた！

「痛っ！」

切つたというより指先が扉に挟まれたような痛み。

みるみるうちに血があふれてくる。ハンパない勢いにびびつた。

(やば……止まんない)

こついつ時どうすればいいんだっけ？ 冷やす？ タオルで押える？

完全にパニック！ それにこんな時に限つて空が「ママ、ママ」つて呼ぶし。

「ごめんね。ママお指が痛い痛いだから」

血が出る人指し指を見せる。すると空はとことこ歩いてきて今度はスカートの裾を下から引つ張る。

「ないな、ないな」

(しょうがないなあ)

かがんで空の顔をのぞきこむ。

「まだ血が出るから……ちよつと待つて」

その瞬間、なんと、空がぱくりとアタシの指をくわえてしまった。

「ちょ、ダメだつて！ 血が出てんのに！」

あわてて空のお口から指を引き抜く。空はちっとも悪びれた風でもなく、きよとんとした顔で言う。

「ないな、ないな」

（やば……血をなめさせちゃった）

アタシはあせった。

「もう。バツチいから『ペツ』しないと！」

でも、空は吐き出してくれない。

「ないな。いたいたい、ないな」

（何？ どういう意味？）

ちよつと考えて……ひらめいた。たぶん、空は『痛いのが無い無い』って言おうとしているのかもしれない！

「そっか。ママの指が痛いのが無くなれ〜って言うてくれてるんだね？」

そうだよつて感じに空の顔がぱつと明るくなる。

「ないな！」

「ありがと。空のおかげでもう痛く……え？」

……ホントに痛くない。

（あれ？）

切ったはずの箇所を見て驚いた。結構、深く切ってしまったはずなのに、それっぽい傷がまったく無い。

（傷が……ない？）

人指し指には血が着いている。包丁でざっくりいった場面を思い出す。

（確かに切っちゃったはずなのに……）

アタシがぼおつとしてると足元で空が「ないな」と、言った。それを見てアタシは気付いた。

「ひよつとして、空が治してくれたの？」

まさか……とは思うけど、これが夢じゃないなら……。

（そっか。ケン兄ちゃんを試してみよう！）

「ね！ ケン兄ちゃん！」

アタシが大声で呼ぶとケン兄ちゃんが眠そうな顔でキツチンに顔を出した。

「なに？ 寝てただけだ」

「あのさ。どつか痛いとかかない？」

「はあ？ 別に」

「肩でも腰でもどこでもいいんだけど」

「いや。だから別にどこも」

じゃあ、しょうがない。アタシはケン兄ちゃんの人指し指をぎゅつと握ると「えいつ！」と、適当な方向に折り曲げた。

「ぎっ！」と、ケン兄ちゃんが意味不明な叫び声。

「ででで！ 折れる！ 折れるって！」

「こんなもんかなと思って力を抜く。」

「ちよつと美央ちゃん！ いきなり何すんの？」

アタシはそれを無視して空にお願いする。

「ね、空。ケン兄ちゃんが痛い痛いなんだって。治してあげて」

「は？ ちよつと美央ちゃん。何を……」

「いいから。痛いところを空に見せて！」

ケン兄ちゃんはしゃがんで空に痛めた指を見せる。すると空は「ないな」と言っつてその指をぱくり。

「おいおい。何やってんだ空？」

驚くケン兄ちゃんは置いといて、アタシは空のお口からケン兄ちゃんの指を引き離す。

「はい。ごくろうさま。バッチいから後でうがいしようね」

「おーい！ 何だよ。もう。わけわかんね」

「で、どう？ 指の痛みは？」

アタシが得意になって聞くとケン兄ちゃんは変な顔をした。で、すぐにその表情が驚きの表情に変わる。

「……なんだ？ え？ マジかよ……？」

「ないな、ないな」

「でしょ。痛みが無くなったでしょ」

「ないな、ないな」と、足もとで空が繰り返す。

「嘘みてえ……てか回復の呪文かよ」

「ね。これって空の能力なんじゃないかな。だとしたら、この子やっぱ『良い悪魔』だよ！」

「確かに凄えな」

「すごい発見しちゃった！こんなことができるなんてやっぱり空は悪魔の子。でも、でも、天使なんだよきつと…。」

\* \* \*

今日は9日目。空の成長は人間でいうと一歳半ぐらい。

昨日の夜、ケン兄ちゃんがカレンダーに年表みたいなのを書いてくれた。日付の下に空が来て何日目、それを66・6倍したら何ヶ月になるかが書いてある。これを見れば空が今何歳ぐらいなのかが分かるスグレモノ。

一歳半っていえばしゃべり始める頃。だから、きのうあたりから空はいくつかの単語を繋げられるようになっていた。

「ママ、しゅき（好き）」

「ママ、いっちょ（一緒）」なんてかわいいことを言ってくれるし「そら、ねんねしゅる」みたいに自分のやりたいことも少しずつ言えるようになった。おまけにアタシがふざけて教えた事までそのまま口にする。

「ケンたん、むちよく！（無職）」

空にいきなりそう言われたケン兄ちゃんはびっくりして5秒ぐらいフリーズしちゃったけど。

「おいおい。何てこと教えるんだよ。それに『ケンたん』って何だよ」

「だって『ケン兄ちゃん』って言いにくいんだよ」

「そうじゃなくって。普通は『パパ』だろ？」



「無理。似合わないって」

「ひでえなあ」

ちよつとへこむケン兄ちゃんを見て、空がとことこと側まで歩いていく。そしてケン兄ちゃん頭の頭をなでてあげる。

「ケンたん、むちよく。ケンたん、むちよく」

「サンキユ、空。けど……フォローになってねえぞ」

空は純粹になくさめてあげようとしたらしい。それを見てたアタシは大爆笑。

子供ってホント、面白い。

\* \* \*

お昼前にご飯の材料を買いに行こうと思ってベビーカーでお出かけ。

マンションを出たところでちょうどお隣のハマドとアシムに会った。

「オ、空ちゃん元気デスカ」と、ハマド。

「才出カケ、デスカ」

そう言うアシムは腕に包帯を巻いている。

「どうしたの？ アシム」

「ソレガ仕事デ……ハッスル、ハッスル、シチャッタノヨ」

「そうなんだ。大変そうだね」

ハマドが空の顔をのぞきこむ。

「今日ハ、パパト一緒ジャナインダネ」

すると空は無邪気に反応する。

「ケンたん、ムチヨク！ ケンたん、ムチヨク！」

（やば……そこで使うかあ？ 使い方は間違っていないけど）  
幸い2人には意味が通じていない。

アシムが空の頭をなでる。

「空ちゃんハ、ホント可愛イネ、食べチャウ位、可愛イ」

その横でハマドがニタニタ笑いながら「モゲ〜！」って言う。  
「モゲ？」

アタシが変な顔で聞き返すとハマドはまた怪しい顔つきで言う。  
「空ちゃん、モゲ〜！」

……ハマドを除いて妙な沈黙。

「兄ちゃん……ソレハ『萌エ』ジャナイノ？」

アシムに間違いを指摘されてハマドがはっとする。

「モ、モエー……」

本人は言い直したつもりらしいけど機嫌の悪いヤギの鳴き声みたいに聞こえる。

アタシとアシムが爆笑していると空がアシムの包帯に興味をもったらしい。

空が「アチム、アチム」と、手を伸ばそうとする。

「ウワオ！ 空ちゃん、僕ノ名前、覚エテクレタノ〜」

アシムはとつても嬉しそう。それを見てハマドが割り込んでくる。

「ネ、ネ、空ちゃん！ 私ハ、誰デシヨウ？」

（私は誰でしょうって、アンタは記憶喪失の人かい）

ハマドはワクワクしながら空の反応を待ってる。けど……空は（こいつ誰だっけ？）みたいな顔をして固まってる。

ちようどその時、犬の散歩をしている人が横を通り過ぎた。すると空の興味はそっちに移ってしまった。

「ワンワン！」と、嬉しそうに犬を指差す空。

完全にスルーされたハマドは半べそ。それを見てアシムが大笑い。

「アハハ、兄ちゃんハ『犬』以下ネ〜」

「才前ハ、同情サレテルダケヨ！ ケガシテルカラ」

「違ウヨ！ 兄ちゃんノ『キャラ』ガ、薄インダヨ！」

「ナ、ナンダト！」

兄弟ゲンカに巻き込まれないようにアタシは慌てて移動する。

「それじゃ。またね〜」

ヤバイヤバイ。こんなところでケンカされたら空の教育に良くな

いって！

\* \* \*

スーパーでお買い物した帰りにドラッグストアに寄った。

「紙おむつ、どうしよっかな……」

トイレ・トレーニングのことを考えたなら、紙おむつはもう買わない方がいいかも。けど、夜はまだ『おねしょ』しちゃうだろうし……。

(買ったとしても小さいのでいいよね)

そんな事を考えながら店内を歩いてると思わぬ人に出くわした。てか、発見してしまった。見覚えのある横顔に思わず足が止まる。

(持田君……)

こんなところで会っちゃうなんて……。

(あれ？ 部活休み？)

そうだ。昨日の夜は結局、電話もメールも無かった。

(おとといの花火大会の日、アタシと別れて誰と会ってたんだろ？) できればそれを聞きたかった。なのに自分から連絡できないアタシ。それにこうやってコソコソ隠れてしまう自分が悲しい。

(誰かと一緒？)

そつと家庭用品のコーナーをのぞいてみる。

(あ！ 女の子と一緒にだ！ けど誰？)

心臓がバクバクしてる。見ちゃいけないものを見てしまったみたいな感じ。でも気になる。

「オレ、バリバリ湿布臭いッスよ」

「大丈夫よ。これ匂い取れるんでしょ」

「いや、マジで。堀川先輩、絶対引くつて！」

持田君たちの会話を盗み聞きしてあぜんとした。

(先輩？ ……堀川先輩？)

そこでハツとした。そういえばサッカー部のマネージャー。確か

そんな名前の先輩がいるって聞いたことがある。

(まさか……花火の時もこの人と?)

2人はとつても楽しそう。誰が見ても付き合ってる風にしか見えない。この2人やっぱり……

(ダメだ、ダメだ、ダメだ。そんな風に考えちゃダメだ)

感情を抑えきれない。どうしようもない痛みが胸をえぐる。

あのマネージャーが憎い……

「マ〜マ?」

その声でハツと我に返る。

「空?」

「マ〜マ?」

ベビーカーからアタシの顔を見上げる空と目が合った。

(そうだ。この子の前でそんなこと考えちゃダメなんだ)

自分に言い聞かせるようにアタシはしゃがんで空の顔をのぞきこんだ。

「心配ないよ。アタシはだいじょうぶだから」

空を安心させようとアタシは笑ったつもりだった。けど、自分が泣いてるのはすぐ分かった。声を出さないように、空を心配させないように、アタシは涙をこらえた。なのにこういう時にかぎって涙って止まらない。

「だいじょうぶ。だいじょうぶなんだから」

空のほっぺに自分のほっぺをくつつける。やわらかくてスベスベした感触。

(あつたかい……)

そう思った時、もっと温かいぬくもりが目の下をなでた。ペロリって感じで……

ビククリして空の顔を見る。

そこには空の心配そうな顔。

「ないな」と、空は言った。

ベビーカーから身を乗り出そうとする空を見てアタシは呆然とし

た。

「ないな、ないな、いたいの、ないな」

空は一生懸命、そう訴えた。

(アタシの痛みを治そうとしてるのかな?)

そう思うと余計に涙が出てくる。空はじつとアタシの顔を見つめて「ないな、ないな」を連呼してる。

(けど……ごめんね。空。この痛みは……)

「ないな、ないなよ。ないないよ?」

いつの間にか空の目に涙がたまってる。必死にアタシの痛みを止めようとしてくれてるんだ。

「ママ、いたいの、ないな。いたいたいのないな!」

いとおいしい…。

アタシは空の頭をそっと抱きしめた。小さな、小さな空の必死な願い。とつても、とつても嬉しいよ。今のアタシにとっては…。

## 第8話 予言？

心の痛みに効く特效薬は無い。

たぶん……時間が必要なんだと思う。それも長い、長い時間が。

持田君のことは忘れようって決めた。アタシにはまだ早かったんだ。そう思うことにした。告られて、OKして、ちょこっと付き合っ……で、フラれちゃった。今から思うと、アタシはいつも受け身で、何となく流されてただけ。ただ『持田君の彼女』を演じてただけなのかもしれない。

簡単に気持ちの整理ができるほどアタシは器用じゃない。けど、今のアタシには空がいる。かわいいアタシだけの天使。

しゃべるようになってからの空は、ますますアタシに甘えてくる。ひとりで遊んでるなって安心して他の部屋に行くと「ママ、どこ？」ってすぐにアタシを探しにくる。座ってる時なんて容赦なし。だーんと体当たりしてきて「あた、あた、あつたよ」ってアタシの顔中さわりまくる。『あつた』って……アタシは探し物かよ！

(にしても何でこんなにくっつきたがるんだろ?)

なんだか二十四時間ずっと一緒にいるみたいな感じ。ホント不思議に思う。けど、小さい子どもってみんなそうなのかもしれない。こんな調子だと自分の時間なんて持てるはずがない。そう考えると母親って大変なんだなって思う。本当の親子じゃなくてもこれなんだから実の子どもなんてストーカーを家で飼ってるようなものなのかもしれない。

(たぶん……ストレスたまっちゃうんだろうな)

空は成長が早いからこの程度ですんでるけど人間の赤ちゃんだとそうはいかない。もし、いつかアタシが子どもを生んだ時はどうなっちゃうんだろ……。

\* \* \*

あれ？ 二こ、どこだろ？

変な町……何で誰も居ないんだろ。

金網？ ふーん。

こつから中には入れないんだ。だって町の真ん中がフェンスで囲ってあるんだもん。仕方ないよね。

けど確か……その道を曲がった所に車があるはず。

やっぱりあった。で、こうして後ろのドアから入れば……中心部に抜けるんだった。

そういえば空は？ どこ行っちゃったんだろ？ この中かな？

そうだ。このボロボロのビル。ここは裏口からこうやって細かい階段上がっていくんだよね。

上の階は学校だから空はそこにいるはず……。

部屋の前で占い師のおばあさんが何か文句言ってる。

空は何の練習やってんのかな？

ああ、このイタチみたいなのが先生だった。

あちこちに転がってるのは……マネキン？ 人にしか見えないけど。

空は……「ないない！」って何回も繰り返してる。

これって空がやったの？

ダメじゃない！ 血がこんなに……。

そこで目が覚めた。

汗びっしょり。

(何だったの？ 嫌な……夢)

となりを見ると空が『くの字』になって寝息をたててる。柔らかそうな髪が寝ぐせになってる。

(エアコンは効きすぎてないよね)

空のおなかにタオルケットをかけてやる。

(変な夢みちゃったから喉かわいたな)

キッチンに行つて冷たい水を一気飲み。

「ふう。けど……なんであんな夢みたんだろ？」

なんだかカチャカチャうるさい。何気にリビングの方を見る。ケン兄ちゃんはまだ起きていてパソコンに向かつてる。

「何やってんの？」

「え、あ、いやあ……そのちょっと反撃を」

「反撃？」

「ちょっと生意気な奴がいてさ」

「どこに？」

「掲示板」

「インターネット？ こんな時間まで？」

時計を見ると午前3時をまわつてる。

「こいつを涙目にするまで眠れん！」

「あ、そ。じゃ、おやすみ」

呆れた。ご自由にどうぞつて感じ。

アタシは寢室に戻つてもう一度寝ようとした。けど、一度目が覚めてしまうとなかなか眠れない。

（それにしてもさっきの夢……）

断片的に思い出す。で、ぎよつとした。

（イタチみたいな人！ どっかで見たような……）

しばらく考えてはつきりした。

（公園だ！ 犬に襲われた時に見たんだつた）

確かあの時、すれ違いざまに何か言われた記憶がある。何だっけ？ そこまでは思い出せない。

（どうしてあんなキモい人が夢に出てきちゃったんだろ？ それに空が人を傷つけちゃうなんて……）

せつかく空の『癒し』に安心してたのに！

もしかしたらケン兄ちゃんの悪意を眠っている空が無意識に受け取つてアタシにあんな夢をみさせたのかも？

アタシは空の寝顔にそつとおでこを寄せて目を閉じた。



(だいじょうぶだよね。空は悪い子じゃないもんね)

アタシは空を信じてる。空は必ずいい子に育ててみせる。そう何  
度も繰り返すことでアタシはさっきの悪夢を振り払った。

\* \* \*

計算上は12日目で空は2歳を越えたことになる。で、今日が1  
4日目だから、まさに今は『魔の2歳児』ってところ。最も目が離  
せない年齢って本には書いてあった通り、色んなものに興味を示す  
のはいいんだけど「危ない！」って場面も少なくない。イヤイヤの  
回数も増えたような気がするし、なんかアタシの思いと空の気持ち  
がすれ違っているのか、かみ合わないことが度々あって困る。そん  
な時は(もう!)ってキレそうになる。けど、空をよけいに泣かし  
てしまった後で必ず後悔してしまう。

(ダメな母親だな……アタシって)

自己嫌悪の連続だ…。

アタシがへこんでるとケン兄ちゃんが急に变なことを言い出した。

「完璧な子育てなんてものは存在しない」

「全然子育てに協力しないケン兄ちゃんに言われてもねえ……」

「そりゃねえだろ。俺だって一応、気を遣ってだな」

「あのね。気が向いた時だけ遊んであげたり、お風呂入れるだけっ  
てのは子育てじゃないんだからね！」

「きつついなあ。美央ちゃんの旦那になる男は大変だな」

「大きなお世話なんですけど！」

アタシたちのやりとりを見守ってた空がぼつりと言う。

「ケンたん、めっ！」

アタシが叱るときの真似だ。

「おいおい。何で空にまで怒られなきゃなんねえんだよ」 まった  
く父親は辛いよ」

「どこが？ 百年早いつて！」

「しゃくねん、はい」

百年つて言えてないけど、やっぱ空はアタシの味方なんだね。なんだかホントの家族みたいで楽しい。

「父親つて言う前に働きなさい」

アタシが半分冗談で言うのと空もそれに便乗する。

「ケンたん、むしょく、ケンたんむしょく」

（OK。空つてば……グッドジョブ！）

\* \* \*

空と手をつないでの帰り道。信じられないことが起こった。

スーパーで買い物してた時から誰かに見られてるような気がしてた。あの独特の嫌な感じ。妙に落ち着かない。レジで支払いを済ませて早くその場を離れようと思った。けど、お店を出てすぐだった。アタシと空の前に男の人が突然、立ちふさがった。薄汚れたシャツにカーキ色の作業ズボン。年齢はケン兄ちゃんよかちょっと上ぐらい。髪がボウボウでちよつと目がイツてるような…。

（ひよつとしてこの人が私たちのこと見てたの？）

アタシは空を引き寄せて男の人を睨む。

相手は相手に気味の悪い笑顔を浮かべながらじつとこっちを見ている。

（頭がおかしい人？ ちよつと誰か……）

周りに誰かいないかと思った瞬間、男の人が「ひやは！」ってバカみたいな声をあげた。

（な、何？）

アタシは息を飲んだ。男が作業ズボンから何か取り出した！

（そ、それって……カッターじゃん！） どうしてこういう時に限って誰も居ないんだろ。

キモい男はブツブツ独り言を言ってる。

「殺す殺す殺す……」

(こゝ、声が……出ない)

まるでノドの奥に何か張り付いたみたいで声が出せない。助けを呼ばなきゃなんないのに！ ヤバイ、ヤバイ……あせっちゃダメなの……。

カチカチカチつとカッターの刃を出す音が不気味に響く。

(……守らなくちゃ)

アタシが盾になってでも……この子は守る！

男はカッターの刃をこつちに向けて一歩前に踏み出してきた。

震えが止まんない。てか、立ってるのがやっと。

(もうダメ！ 怖くて目を開けていらんないっ！)

来るっ！ って覚悟した瞬間、

『パンツ！』

この音は!?

はっとして目を開ける。

(……き、消えた?)

今の音。あの破裂音。てつきり空が……って思った。けど、目の前にいたはずの危ない男の人は、どこにも居ない。

「助かった？ でも、今のは？」

男の人が立ってたはずの場所。そこにその姿は無く、代わりに落ちたもの……アタシはそれを見つけて震え上がった。

「やっぱり……夢じゃなかった」

そこに落ちてた物。それはあの男が持っていたカッター・ナイフだった。

ほっとしたのと怖すぎたのとでアタシはもう立っていられなくなった。地面に膝をついて力が抜けた腕で空を抱き寄せる。

「怖かった……」

「こあい。ママ、こあいね」

「でも良かった。空が無事で」

「こあいの、ないな、したお。ないな、よ」

「!?!」

(そんな……それじゃ今のはやっぱり空が?)  
アタシが驚いて空の顔をじっと見ると空は大きなあくびをした。  
空はトロンとした目を見ると気を失ったみたいに崩れ落ちそうになる。

「そ、空?」

慌てて空を抱きかかえる。ぐったりしてるみたいだけど寝てるようにも見える。

(これって……力を使ったから?)

空の寝息を確認しながらアタシは立ち上がれないでいた。いまさらのように背筋がゾクツッてした。

『パチパチパチ……』

誰かの拍手? ぎょっとして振り返る。

「!?!」

アタシは固まった。

(こ、この人……)

真っ赤なシャツに黒いチョッキ。異様に背が高く頭が小さい。

(イタチ顔の男……ヤバイ。マジで頭が変になる!)

『……成長したな。いい具合だ』と、拍手の主は言った。

何のことだか分からないけどアタシはイタチ顔の男を睨んだ。

(この前の公園の時と同じだ。この人、まさか……空の能力に気付いてる?)

イタチ顔の男はニイと口元をゆがめて呟く。

『とはいえ、まだまだ甘いな。あの辺りまでが限界か』

イタチ男の目はアタシたちじゃなく、ずっと先の方に向いている。その視線の先をアタシも目で追った。けど、駐車場の向こうには大きな道があつて、さらにその先はマンションとか家とかが密集してる。

(なんなの? 何言ってるのか意味わかんない)

『では、しぎげんぷん』

イタチ男はそう言ってアタシたちに背を向けた。  
その後姿が見えなくなるまでアタシは必死に考えを整理した。  
(偶然、じゃないよね？ あの言葉……絶対なにか知ってる！ だ  
つたら何者？)  
ダメだ。コシが抜けちゃったよ。空は熟睡しちゃってるし。とて  
もひとりで帰れる状態じゃない。  
あまりにシヨックな出来事のせいでアタシはケン兄ちゃんに迎えに  
来てもらうことにした。

\* \* \*

どれぐらい待ったんだろ？

ケン兄ちゃんが来るまでに結構、時間がかかったような気がする。  
(スーパールの駐車場で放置されてるアタシたちが心配じゃないの？)  
イライラしてたアタシは早速、文句を言う。

「遅いよ！ なんですすぐ来てくれないのよ？」

「悪い。すぐに出ただけだよ。なんかこの先で事故があったみた  
いでさ」

「は？ 事故って何？」

「交通事故。何でも若い男が道の真ん中で寝てたらしい」  
「なにそれ？」

「足ひかれて重傷だって。警察が首ひねってたよ。いつの間に車道  
に寝転がったんだろって。誰もその瞬間を見てないらしいよ」

「なんでそんなに詳しいの？ まさかアタシたちのこと忘れて野次  
馬してたんじゃない……」

「い、いや。まあ、その。ごめんなさい」

その時、気がついた。それって、まさか……。

「ね、その事故って場所は？」

「へ？ ああ、この近くだよ。ここからだ……あっちかな」

そう言つてケン兄ちゃんが指差した方向。それは、あのイタチ男が見ていた方角だった。

「ね、ねえ。ケン兄ちゃん。まさか、そのひかれた男の人って……カーキ色の作業ズボンとかはいてないよね？」

「え？ 何で知つてんの？ 美央ちゃんも見たの？」

頭がクラクラつとした。ダメだ。ホントに気を失いそう。目の前が暗くなる……。

「ちよつと美央ちゃん！ しょうがねえなあ」

ケン兄ちゃんの声が遠くで聞こえる。と、次の瞬間、からだが浮く感覚。

（え？ 動いてる？）

何だろ？ この感触。微妙に揺れてるような……ちよつと不安定な感じ。

（おんぶされてる？）

頭が重い。けど、おんぶされてるって自覚はあった。

（ケン兄ちゃんの背中……意外に広いや）

ふだんなら絶対に恥ずかしい格好なのに……今はそんな余裕はない。

そしてアタシは目を閉じた。とっても疲れてたんだ。あり得ないような出来事のせいで……。

\* \* \*

眠つてたのか、気を失つてたのか、どっちか分かんないけど……頭が重い。

（あ！ 空は？）

ガバツと起き上がるとベッドの上だった。

「空！」

ふらつく身体を引きずるようにしてリビングに向かう。

そこに空の姿があることを確認してアタシはホッと息をついた。

「空……よかった」

ケン兄ちゃんと積み木遊びをしてた空がアタシに気付く。そしてスツクと立ち上がるとトコトコと駆け寄ってくる。

「ママ、おつきちたの？」

「うん。起きたよ。空もネンネしたんだよね？」

「ん。それもネンネした」

しゃがみこんで空を抱きしめる。良かった。元気に遊んでるみたいで…。

「大丈夫かい美央ちゃん？ まだ寝ててもいいのに」

「ううん。ありがとう。ケン兄ちゃんが運んでくれたんだよね」

「まあな。いやしかし本当に参ったよ。重くってさ」

（重いとか言うなよ……そこで）

「けどアタシと空をどうやって？」

「ああ、それな。たまたまハマド達がスーパーに買出しに来ててさ。あいつらまた食パンばっかまとめ買いしててさ」

「食パンはいつでもいいんだけど」

「悪い。で、アシムにベビーカー押してもらって、オレとハマドでかわりばんこに美央ちゃんをおんぶしたんだ」

「……え？ 交代で？」

「なんだ。ケン兄ちゃんだけじゃなかったんだ。」

「だってさ。ずっとおんぶじゃ重くって……」

「重いとか言うなっ！」

「まったく。空の前じゃなきゃケリ入れてるトコだよ！」

「けど、ケガなくて良かったよ。ホント」

「そだね……」

危ない人に凶器向けられるなんて生まれてはじめて。何でこんな目にあわなきゃなんないんだろ？

只でさえシヨックなのに、あのイタチ顔の男がよけいにアタシを不安にさせる。

(空の力……確実にアップしてるよね)

それはあまりいい傾向じゃない。空は自覚してないみたいだけど。  
「ママ、いっちょにあそぼ」

「ん。そだね。積み木？」

「ん。ちゅみき。おうちつくるの」

空の無邪気な笑顔を見てるとすこく癒される半面、妙な胸騒ぎがする。

(アタシが守ってあげなきゃ)

何もできなかったアタシ。でも……今度、空に何かあった時は必ずアタシが守るんだ！



## 第9話 母帰る

15日目。突然お母さんたちが帰国した。今朝、成田に着いてそのままここに直行してきたらしい。

お母さんは部屋に入ってくるなり息を弾ませる。

「もう、空ちゃんに会いたくて会いたくて!」

「よく言うわよ。私たちのことなんか忘れて楽しんできたくせに。こっちは大変だったんだからね」

「ごめんね美央。ちゃんとお土産あるから。で、空ちゃんは?」

「お昼寝してるよ」

「あら。残念。じゃあ待つことにするわ」

(先に言っという方がいいよね……)

お母さんが空に会うのは久しぶり。空はもう二歳半ぐらいに成長してるからお母さんビックリするだろうなあ……。

「あのね、お母さん」

「なあに? 美央」

「じつはね。冷静に聞いて欲しいんだけど……空が……っていうか、空は……」

アタシがモゴモゴしていると空が目をごすりながらダイニングに入ってきてしまった。

「マ〜マ」

(遅かった! ……やば)

予想通り。お母さんは空を見て固まった。

……気まずい空気。てか、フォローのしようがない。

お母さんはしばらく口を半開きにして顔を引きつらせた。金魚みたいに口をパクパクさせるけど言葉が出てこないらしい。で、ようやく声を絞り出す。

「そ、そ、空ちゃん? お、大きくなった……わねえ」

空はお母さんの顔を見て首をかしげる。

「だえ？ こえ、だえ？」

お母さんのリアクションも酷い。

「お、お、覚えてないの？ ……そ、そりゃあ、ま、む、無理だわね」

なんだか電波が悪いトコでの携帯の会話みたいだ。

お母さんは（どういうこと？）って風にアタシを見る。けど、そんな目で見られても困るし！

「ママ。こえ、だえ？ おともらち？」

「お友達じゃないの。一応、ママのママ」

アタシの説明に空が（わからない）って顔をする。

お母さんは気を取り直して空の顔を覗き込む。

「空ちゃん。ちょっと見ない間に大きくなったわね」

「ん〜」と、空はまだ様子見。

「そうね。私はママのママだから……空ちゃんは私のこと天音ちゃんって呼んでね」

（おいっ！ そこは『バーバ』でしょ！）

「ん〜」と、空ははずかしそうにアタシの足にしがみつく。人見知りしてるみたい。

「ね、お母さん。やっぱり2週間のブランクは大きいでしょ」

嫌味たつぷりにそう言ったつもりだけど、お母さんにはあんまり効いてない。

「そうね。でもじき慣れるわよ。小さい子の扱いなら心得てるつもりよ。なんだって経験者ですもん」

そのへんは気楽でいいなあって思う。だってお母さんは可愛がるだけでいいんだもん。一番、大変なのはアタシなんだから！

「しかし……短期間でこんなに大きくなっちゃうなんて」

お母さんはまだ信じられない様子でしげしげと空を観察する。そして残念そうに言った。

「やだわ。お土産にお洋服買ったのに！ これじゃ全然着られないわねえ」

(そっちの心配かいつ！)

アタシはずっこけそうになった。お母さんに限っていえば、空の秘密のことはあまり心配しなくてもいいのかも？

(でも、さすがに依頼主が『悪魔』だってことは説明しておかないとまずいかも……)

アタシがそう思った瞬間だった。

『その心配は無い』

聞き覚えのある声に思わずため息が出る。

(今までさんざん放置しておいて今さら……)

そう思っただけで振り返ると悪魔の依頼主がイスにふんぞり返って紅茶を飲んでる。

「あら。依頼主さん！」と、お母さんの顔が輝く。

『しばらくだな』

そう言っただけで悪魔の依頼主はニヤリと笑った。

アタシは文句を言う。

「しばらくもなにも、アタシたちにまかせっきりじゃない！ すっ

ごく大変だったんだからね！」

『知っている。いつも見ていると言ったはずだ』

「だったら！ もう……」

そう言いかけてアタシは昨日の出来事を思い出した。イタチ顔の男のことだ。

「そうだ！ 心配ないって言うけど空の能力のこと知ってるかもしれない人がいたよ？」

アタシがイタチ男の顔を思い浮かべると、依頼主はじつとアタシの顔を見た。そして首をひねる。

『さあな。アスタロトの所に似たような奴がいたような気がするが

……』

そっか。この人、悪魔だからアタシの頭に浮かんだイメージも見えちゃうんだ。

「超キモイ奴なんですけど！ 本当に見覚えはないの？」

『いちいち下級悪魔のことなど覚えていられるか』

あすたると？ 下級悪魔？ やっぱりワケわかんない。

そこでお母さんが口をはさむ。

「あ、あのう……話が全然みえないんですが？」

しょうがない。説明しなきゃ。

「あのね、お母さん。信じられないかもしれないけど、この人『悪魔』なの」

「はい？ 悪魔？ え？」

お母さんは目をパチクリ。で、しげしげと依頼主の顔をながめる。

依頼主は「フン」といった感じで指をパチンと鳴らした。すると

テーブルの上に突如、大きな花束が『ボン！』て具合に出現した。

『これで信じたか？』

悪魔の依頼主はニヤリと笑う。

「ちよつて待てー！ なんでお母さんの時は花束？」

アタシの時なんて頭にリンゴだよ？ なんなの？ この差は！

『レディには花束を。ガキにはリンゴを、だ』

依頼主の失礼な言葉にアタシがキレた。

「だ、だ、誰がガキなのっ！ 超ムカつく！」

「マンマ」

足元で空がアタシのスカートを引っ張る。

(そうだった。空のこと忘れてた……)

そこはぐつと怒りをこらえる。空の頭を撫でながら感情を押し殺して尋ねる。

「で、お母さんはいいとして、空の秘密がバレる心配はホントに無いの？」

それは前から気になってた。だって、お隣のハマドとアシムだって本当は気付いてるんじゃないかって思ってた。だって、会うたびに大きくなってるんだもん。

依頼主は余裕をかまして答える。

『一応、フオローはしている。この子の秘密がもれることはないは

ずだ』

どういう手を使ってるのか知らないけど……そりゃ悪魔だもんね。人の記憶をいじったりするのなんて楽勝なのかも。

「ママ。こえ、だえ？」

気がつくとき空がアタシの足に隠れるようにしておそるおそる依頼主の顔を見上げている。

「う……それは……」

うまく説明できない。この人が本当のお父さんだよって言うても空に理解できるかなあ。今のところケン兄ちゃんが『父親役』だし……。

依頼主はチラリと空の顔を見て表情を変えずに言う。

『構わん。いずれこの子にも分かるだろう』

まるで愛情がない！ っていうか空を見てもなんとも思わないの？

(こんなんじや空がかわいそう！)

そう思っと思って思わず「それでも父親なの？」って口走ってしまった。

『なんだ？ いきなり』

依頼主のその冷静さが許せない。アタシは思いつくまま厳しい質問を浴びせる。

「この子のお母さんは誰なの？ てか何で悪魔が子どもなんか作っちゃてるワケ？」

『そ、それは……だな』

はじめて依頼人主が動揺したように見えた。

「ね、なんで？」

『うむ。まあ、その何だ』と、依頼人が口ごもる。

アタシが「ね、何で？」としつこく聞くと依頼主はちょっと咳払いして答えた。

『私としたことが……その、魔が差したのだ』

「悪魔のくせに魔が差した？ 変な言い訳」

『な、お前！ 別に言い訳ではないぞ！』

「はいはい。で、この子が出来ちゃったのね？」

『うむ。まあ、そういうことだ』

そう言って恥ずかしそうにしてる悪魔の依頼主。

(意外に可愛いトコあるじゃん！)

すると依頼主は、またアタシが考えてることを読み取ったのかアタシを睨んだ。

でもアタシはそれを「ふうーん」と、スルーしてさらに責め立てる。

「で。この子のお母さんはどうして出てこないの？」

『あゝまあ、細かいことは気にするな』

「離婚？ 魔界にも別居とか離婚とかあるの？」

『そ、そんなものは無い！ そもそも結婚などという習慣は無い』

アタシは嫌だな。結婚がない世界なんてツマンナイ。

「ママねむいよお……」

足元で空が大きなあくびをする。まだ大人の会話は理解できないから退屈なんだと思う。

その隙に依頼主は視線を泳がせながら席を立とうとした。アタシの質問攻めに参ったのかもしれない。

「ちよつと！ 逃げないでよ！」

『ば、バカもの。誰が逃げるなど……私は忙しいだけだ』

明らかに挙動不審！ 悪魔の依頼主は早くこの場を立ち去ろうとしてる。

『で、では、残り半分の間、息子を頼んだぞ』

そう言い残して依頼主は珍しくぎこちない動作でイスから立ちあがる。そして廊下に出るかどうか迷うような素振りをみせて『ぱふっ』って音を残して消えた。

「き、消えた？」と、お母さんが驚きの声をあげる。

「いつもは玄関から帰るんだけどね。今日は慌ててたんじゃない」

「美央……あなた」

「え……な、何？」

「あなた。成長したわね！ 悪魔を退散させるなんて！」

「はい？」

それって褒めてるの？　なんかお母さん、分かっているようで分か  
つてないような…。

「ママがないないしたの？」

空が心配そうに聞くのでアタシは空を抱き上げて首をふった。

「ううん。お家に帰ったんだよ。『ぱふっ』って」

（けど……悪魔が姿を消すのに『ぱふっ』はないでしょ。『ぱふっ  
は！』）

あの悪魔の依頼主を『こらしめてやった』っていう充実感。でも、  
その一方で嫌なこと思い出しちゃった。『残り半分』あと半月で、  
この生活は終わってしまうってことを…。

\* \* \*

18日目。公園で遊ばせようと空を連れて行った時のこと。

空が、おもちゃを持って張り切って砂場に入ると、ひとりのお母  
さんが急に自分の子どもを引き上げてしまった。子どもの方はまだ  
遊びたがってたのに無理やり砂場から連れ出したように見えた。す  
ると砂場にいた残り3人の母親も同じようにそれを真似する。なん  
だか空が来たから皆それを避けてるみたいで凄く嫌な感じ。

（なんで？）

アタシが茫然としてると子どもを引き上げたお母さんたちがアタ  
シたちの方を見て何かヒソヒソ話をしてる。

（なんで……避けられてるの？）

全然ところあたりが無い。アタシはむっとしてお母さんたちに向  
かって聞いてみた。

「なんなんですか？　アタシたちが何かしました？」

つい強い口調になってしまった。けど、アタシらは何も悪くない。  
すると4人組の母親のうちの一人が口を開く。

「おたく、どちらさん？」

明らかに敵意むきだし。おまけに他の2人が「キモくない？」とか「ありえない？」とか言ってるのが耳に入ってきた。

「てか、おたく何人子どもいんの？ その歳で？」

意外な質問にアタシはぎよっとした。

「あなた、犬の事件の時も赤ちゃん連れてたよね？」

と、はじめに口を開いた母親が不審そうな顔つきでアタシを見る。

答えに詰まる。

(犬の事件って、あれが空のしわざだったことはバレてないはず…)

アタシが黙っていると金髪のお母さんがアタシを見下したような口ぶりで言う。

「その子、前にトモちゃんと遊んでた子のお兄ちゃん？」

(どういことだろ？ お兄ちゃん？ ……あっ！)

それで気付いた。ここ数日間空は他の子よりもずいぶん大きくなって。今の空は人間の子でいうと3歳ぐらい。確かにこの子たちよりはひとまわり大きい。だから兄弟が何人もいるって勘違いされたんだ…。

「ぶつちゃけ、名前も知らないような子と遊ばせたくないんだよね」  
ひとりの母親が吐き捨てた言葉に他の3人が頷く。

たぶん、この人たちはアタシや空みたいな部外者を警戒してるんだ。

(…：…そんな風に見られてたなんて。全然、気付いてなかった…：…)  
事情を説明したところで信じてもらえはるはずもない。

(悔しい。けど、こんな人たちの前でなんか泣きたくない！)

精一杯、相手を睨み返してアタシは空の手をとった。

「行く。空」

けど、空が動かない。

「空？」

空は立ったまま子どもたちの方を見る。その寂しそうな表情に



胸が締め付けられる。

(みんなと遊びたかったのね……)

心無い母親たちに砂場から引き離された子どもたちもじっと空の方を見てる。

冷たい視線にいたたまれなくなってアタシは空を抱きかかえた。

空の気持ちを考えたらもつと食い下がった方がいいのかもしれない。

(けど……これ以上ここにいたら)

それだけは避けなくちゃ。こんな所で空の力が炸裂したら、それこそ大変なことになっちゃう！

逃げるのが嫌だったのでアタシはわざと大またでスタスタ歩いて公園をあとにした。

公園を出た所で涙があふれてきた。

(こんなのって！　こんなの……)

悔しくて泣けてくる。

「ママ、ありゆく」

空が自分で歩くと言い出したので空を下ろしてやる。しゃがんで

空の顔をのぞきこむ。

(なんであんな目にあわなきゃならないの?)

ちよつと他の子より成長が早いだけなのに……あんまりだよ！

「ママ、ないちゃ、らめだよ」

空が心配そうに言った。本当は自分も傷ついてるはずなのに……。

空が受けた理不尽な差別。こんな小さな子どもには理解できないだろう。

アタシは空のほっぺに両手を添えてちよこんとおでこをぶつけた。

(こんなことで人間を嫌いにならないでね……)

心からそう願わずにはいられなかった……。

\* \* \*

ウチに戻ってからケン兄ちゃんに相談した。

話を聞いたケン兄ちゃんは渋い顔をしてうなる。

「空はすぐ大きくなっちまうからな。その点、同年代の友達を作るのは難しいのかもな」

「そんな……友だちができないなんてかわいそすぎるよ」

「だな。子どもの頃の友達は大事だもんな」

「悪いのは大人だよ。だって子どもたちは空と遊びたがってたもん」  
「うーん。けど、世の中ってそういうもんなのかもよ」

そこでケン兄ちゃんは遠い目をした。

「そんなのってない！」

アタシは声を震わせる。

「けどな。ちよつと自分たちと違っただけで簡単に仲間はずれにする人間が多いのは事実だ」

それは分かっている。どこにいても『いじめ』があることは知っている。けど、親が子どもの付き合う相手を制限するなんて絶対おかしいよ！

ケン兄ちゃんはアタシの肩をぽんぽんと叩いて呟いた。

「子どもを天使のように育てるには厳しい世の中なのかもな……」

その夜、ひとり考えた。

しょせん人間はひとりでは生きていけない。生きてくつてことは人と繋がっていることなんだ。だから生きている時間のほとんどは誰かと関わっていないければならない。なのに、この世界には悪意が満ちあふれている。アタシはニュースとか見ない方だけど、それはうすうす感じてる。そんな中で純粋な人だけに囲まれて生きてくことなんてできっこない。完璧な人間なんて居ないんだ。アタシやケン兄ちゃんを含めて……。

（もしかしたらあの依頼主はそれが分かかってて空をアタシたちに育てさせてるのかもしれない）

ふと、そんな疑問が頭をよぎった。

\* \* \*

19日目。もうあの公園には行きたくない。

空には悪いけど同じところには2回行かないようにしようって思う。

(どこか空と同じくらいの年齢の子がいる遊び場ってないかな)

そう思って午前中は駅の反対側まで遠出して別な公園に行った。

真夏なので外で遊んでる子どもは少なかったけど、やっぱりそこは子ども同士、いつの間にか仲良く遊んでいる。

(でも、せっかく仲良くなった子も……あと何日いつしよに遊べるんだろ)

今はいいけど数日後には空が大きくなりすぎて、いつしよに遊べなくなってしまうに違いない。そう思うとなんだか切なくなってきた。

ファミレスで食事をして午後からはスーパーの子ども広場で遊ばせる。100円入れる乗り物にのせたり、子ども向けDVDを見せたり、空は楽しそう。けど、アタシはモヤモヤとした気分をどうにもできないで落ち込んでいた。

\* \* \*

夕方、マンションの前まで帰ってきた時にハマドとアシムに会った。ちょうどこれから出かけるところらしい。

ハマドが陽気に話しかけてくる。

「ヤッファー！ 空ちゃん、天気デスカ？」

ハマドの間違いはネタなのか天然なのか分からない。おそらくヤッファーはヤッホーの、天気は元氣の間違いなんだろうけど今は突っ

込む気にもなれない。

そんなアタシの代わりに空が答える。

「ぼく、げんきよ。パマロ」

(パマロ？ それってハマドのこと？)

アシムがハマドを指差して笑う。

「アツハー、パマロダツテ！ 名前、間違エラレテルヨ」

アシムにからかわれたハマドが真剣な顔で言う。

「何言ツテンノ。ボクノ名前、『パマロ』ヨ」

ハマドが大真面目にそんなこと言うから吹いちゃった。たぶんハマドは前に自分の名前を空に呼んでもらえなかったことをまだ根に持ってるんだと思う。

「もう。嬉しかったのはわかるけどアンタが名前変えてどうすんのか！」

「美央サンマデ、シツツレイ。ワタシ、昔カラ『パマロ』ヨ。ダカラ空チャン、合ッテル！」

「ただけ悔しかったんだか！」

(アシムばかり名前覚えられてたから対抗してるんだ)

そんな風に笑ってても、どこか不安な気持ちは晴れない。そこでアタシはハマドたちに向かって思っていたことを口にしてしまった。

「ね。ハマドもアシムも変だと思わない？ だって、この子、他の子より成長が早いでしょ」

その質問に2人が、まずいなって表情で顔を見合わせる。

自分でも何でいきなりこんなことを言い出したのかが分からない。空の前なのに……。

もしもって時は依頼主が何とかしてくれるだろうから秘密がもれることはないと思う。けど、正直、この2人が空のことをどういう風に思ってるのかが知りたかった。

アシムはアタシの顔を見て「美央サン……」と、困った顔をした。ハマドも言いにくそうに言葉をつなぐ。

「ソ、ソレハ、確カニ……」

( やっぱり！ 2人とも表向きは空のこと「可愛い」「可愛い」って言ってるくせに心の中では空のこと…… )

どうしようもない悲しみがわきあがってくる。

その時、ぽつりとアシムが呟いた。

「多分、コノ子八神二愛サレテルンダヨ……」

「え？」

アタシは思わぬ言葉にはっとした。

ハマドが空の頭に手を置いてゆっくりとなでる。

「ソウダネ。空チャンハ、アツラーノ神二愛サレテルンダネ」

( そういう考え方もあるんだ！ )

なんて前向きな考え方なんだろ。なのにアタシは……悪い方ばかり考えてた。

ハマドとアシムの表情を見るとじわじわと喜びがわいてくる。

「ありがとう……」

思わずそんな言葉がもれていた。それは素直な今の気持ち。

( でも、神様じゃなくてホントは悪魔の子なんだけどね )

その言葉は心の中にしまっておいた。

「ありがとう。ハマドもアシムもいい人なんだね」

おかしな兄弟だけなんだか2人に救われたような気がした。

## 第10話 秘密のおまじない

空のおしゃべりはだいぶ上手になった。

それはそれでとっても楽しいんだけど、その分苦労も増えた。なぜかっていうと子どもは疑問に思ったことを何でも質問してくるから。親代わりのアタシとしては、いい加減な返事ができないので困る。

「ね。ママ。お空はどうしてあおいの？」

「ん〜 地球が青いからかなあ？」

「ちきゆうってなあに？」

「ち、地球？ うーん。なんていうか……『玉』だね」

「たま？ たまってなあに？」

「ボールのことよ。すつごく大きなボール。その上に空やママが住んでるの」

それを聞いて空は部屋の隅に転がっていたビニール製のボールの所までトコトコ歩いていく。で、お気に入り赤い車をその上に乗せようとす。当然、車はつるつとすべって落っこちる。空は何回かそれを試してからあわてた様子でアタシに報告しに来る。

「たいへん。おつこちちゃうよ！ どうしよう」

マジで困った顔をする空のリアクションに萌える。

「だいじょうぶ。地球は大きいから落ちないんだよ」

「おおきいとおちないの？」

「そだね。それに引力があるからね」

「いんによく？ いんによくってなあに？」

（しまった……墓穴掘っちゃた）

後悔しても遅い。何かを説明するたびにそこで使った言葉がまた新しい質問のネタにされちゃう。だからキリがない。

「ね、ママ。いんによくってなあに？」

「それはね……こつやって……」

アタシは空をぎゅっと抱きしめて頼ずりした。で、苦しい説明。

「引力っていうのは、こうやってくつつく力なの！」

「ママ、くしゅぐつたいよお」

アタシの腕の中で空が身をよじってケラケラ笑う。

(セーフ。うまくごまかせた……)

こんな感じで空の質問責めにはホント苦労する。アタシ自身が色んなことを知らなさすぎるのもあるんだけど。それはちょっと反省けど、あとでこっそりネットで調べたりして親になってからの方がよっぽど勉強してるかもしれない。

ある時は『合言葉』って何か聞かれてしまった。

(意味は分かるけど……使わないよね？ ふつう)

「ねえママ。あいことばってなに？」

「そうだね……けど難しいなあ。ママも使ったことないし」

どこで聞いてきたんだか……。

「ね、ママ？ あいことば。あいことばは？」

空の催促に苦し紛れの回答を考えた。

「合言葉っていうのはね。2人だけに通じる合図のことなんだけど。たとえば……そうねえ」

アタシは思いつきで手のひらでハートの形を作った。で、空にも真似させる。

「空もやってみて。ほら、まず右と左の手のひらを向かい合わせにして……親指をピンと斜め下に伸ばしてチョコンとくつつけるの。そうそう。で、残った指4本をいっしょにおじぎさせて……軽く曲げてみて。爪と爪を合わせる感じで。ほらハートマークができたでしょ」

「ほんとだ。ハートだ」

空のちっちゃな手で作ったハートは超可愛い。せつかくだからこれを使って何かできないかなって考えた。

「ね。いいこと考えたよ。あのね。空とママしか知らない特別な」

おまじない』を作るの。他の人には内緒。空とママだけの秘密」

「そらとママだけのひみちゅ？」

「そう。ひ・み・つ」

「そらとママだけ？」

空はとつても嬉しそう。

そこでアタシが考えたおまじない。向かい合ってからまず胸のあたりの高さに手のひらでハートを作る。次にお互い右手だけ前に「どうぞ」って感じに差し出して合体。ひとつのハートにする。最後に残った左手で自分の胸をポンポンとふたつノックする。

「覚えた？ もう1回やるよ」

ゆっくりと一連の流れをおさらいする。何回も練習して何とかスムーズにできるようにする。

「ね、空。これを2人だけの『おまじない』にしよ」

「どういっいみなの？」

「ふふ。離れててもハートはひとつ。いつも一緒だよって意味」  
それにはアタシの願いが込められていた。このアルバイトが終わった後でも、空がアタシのこと思い出してくれますようにって。

離れててもハートはひとつ…。

\* \* \*

親が見せたいものと子どもが見たいものは違う！

これはTV番組の話。アタシはかわいい動物たちが出てくるような番組を見せたいって思う。なのに空はこないだ見たなんとかレンジャーっていうヒーローものがすっかり気に入ってしまったみたい。男の子だからしょうがないのかもしれないけど、教育上、戦ったりするのは避けたいのが本音。

でもケン兄ちゃんは男だから空の味方をする。

「いいじゃんか。必ず正義が勝つんだから」



「でも……戦うのはちよつとどうかな。空の場合、そっちの能力ばつぱか強力になつちやたりしない？」

「うーん。それはあるかもな。しかし、正義の為に戦うという思想は必要だと思うよ。」

「思想つて……なんか違うような気が」

「いや。その方が人類の味方になるんじゃないか？」

それつてちよつと単純すぎるような気がする。

アタシたちがそんなことを相談してるなんて知らずに空は夢中でヒーローの真似をしてる。「じゃおレツド！」つて決めのポーズをとったり、「ぱおぱおビーム！」とか技の名前(?)を出して攻撃したりしてくる。普通の子ならそこで「うわっ！」つてやられたフリをすればいいんだろうけど、空の場合はそのうち本当にビームと出しちゃいそうで怖い。

(その時はその時でケン兄ちゃんに代わってもらおう！ うん)

\* \* \*

空をお風呂に入れるのはアタシとケン兄ちゃん交代つてことにしてる。今日はケン兄ちゃんの番でアタシは着替えとバスタオルを持って待機中。空はお風呂で遊ぶのが大好き。にしても今日は長い(何やつてんだろ?)

待ちくたびれてアタシが脱衣所に向かうと浴室で2人がすごく楽しそうにはしゃいでるのが耳に入った。

「ね。まだ出ないの？」

脱衣所から声をかけても反応なし。すりガラスの向こうで空の笑い声が響く。

(何がそんなに楽しいんだか)つて思つてたら浴室の中でケン兄ちゃんがかぶる声。

『行楽園遊園地でボクと握手！』

『あくしゅ！あくしゅ！ きゃはは』つて空も大笑いしてる。

アタシはちよつとジェラシー。で、気になつて聞いてみる。

「ねえ。何でそんなに大笑いしてるの？」

すると中からケン兄ちゃんの声。

『空とチンチンで握手してるんだ』

「は？ って……ちよつ、ちよつと！」

思わずガバつて浴室の扉を開けてしまう。湯気で良く見えないけど……。

(ゲツ！)

空とケン兄ちゃんが……股間と股間をくっつけてる…。

「ぎゃあー！ やめてー！ 空のオチンチンが腐るうー！」

信じらんない。男つてバカだ。ホントにホントにバカだ！ てか、いい歳して子どもになんてこと教えてんのよ！

\* \* \*

ごはんを食べてる時のこと。

はじめてみる納豆ご飯の前で空がかたまつてるとケン兄ちゃんがしきりにそれを勧める。

「空。騙されたと思って食ってみ？ マジで旨いよ」

それでも空は変な顔をして納豆とにらめっこしてる。

アタシも納豆はキライではないけど積極的には食べない。

「無理しなくていいわよ。ねえ空」

「いいや。絶対、ここで初体験しておくべきだ！ はつきり言つて納豆食わない奴は人生の半分を無駄に過ごしてるね！」

(それつて暇を持て余している人が言うセリフじゃないけどね……) そこまで勧められてもどうしても手が出ないらしい。空は困つたような顔をして訴える。

「だって……ケンさんの足とおんなじ『におい』がしゅる……」  
そのセリフに吹いた。

(ナイス、ツッコミ)

そうそう。無理に嫌いなものを食べなくてもいいんだよ。本にも書いてあった。子どもの味覚は大人よかずと鋭いから辛みや苦みが何倍にも感じられてしまうんだって。だから、好き嫌いを無理に直させるより今はおいしいものを食べさせるのが一番！  
(ま、アタシの料理はまだただけど……)

\* \* \*

空と過ごす毎日は本当に楽しい。

赤ちゃんの時は大変なことばかりで正直、子育てなんてやるもんじゃないなって思ってた。けど、今はそれが嘘みたいに感じられる。『手がかかる子ほど可愛い』なんて言葉があるらしいけど、最初の苦労があったから今がとつても充実してるんだらうって思う。

ただ、アタシたちに残された時間は少ない。依頼人との約束の日まではあと十日あまり。なので、限られた時間の中で空に色んなことを経験させてあげようって思う。

それが今のアタシにできる精一杯の愛情表現なんだ…。

朝から晩までめいっぱい空と過ごしているおかげで持田君のことはすっかり忘れてた。てか、自分でも意外だった。別にきちんと『別れた』わけじゃないんだけど電話とかメールとかが無くなってももうどうでも良くなってる。やっぱりドラッグストアで目撃した時の予感が当たってたんだなあってぐらいにしか感じない。だからキヨウコから電話があるまでほとんど忘れてた。

『ね。美央。分かったよ！』

「ん？ 何が？」

アタシがそんな調子で返事をしちゃったんで逆にキヨウコが拍子抜けする。

『何がって持田君のことだよ』

「ああ……そっか。そうだね」

『こないだの花火大会。あの時の相手はサッカー部のマネージャーだね』

「ふうん。そうなんだ」

わざととぼける。ドラッグストアでのことは誰にも話してない。

『だけどね。このマネージャーがくせもなんだわ』

「そうなの？」

『堀川って3年生なんだけどね。同じ学年のキャプテンとくっついたり別れたりを繰り返してるらしいんだ』

（え……てことは持田君が本命じゃないの？）

キヨウコの新情報は続く。

『なんだかさ。お前らは磁石か！　ってぐらいにいたり離れたりしてるんだって。で、その合間に下級生の男の子にちよっかい出してるみたい』

「そういう人なんだ……」

不思議とハラはたたない。むしろ同情しちゃう。持田君は遊ばれてること分かってるのかな……。

『気をつけなよ美央。持田君にもちよっかい出してくると思うよ』

（そっか。キヨウコは花火大会のこと言ってるんだ。でもね……もうアタシと持田君は……）

結局、キヨウコにはホントのこと言えなかった。どうせ言うなら『はじめ』をつけてからにしようって思った。

（よし……）

キヨウコとの電話が終わってからすぐにアタシは持田君に電話をかけた。こういうのって勢いが大事。アタシから電話するのは初めてだからちよっかと緊張する。けど気持ちは固まってる。

5コール目で持田君が出た。

『美央？　どした？　元気してたか？』

「うん。元気だよ」

『そ、そっか。で、何？』

「今、平気？」

『お、おう。大丈夫』

その様子だと今誰かと一緒にいるのかもしれない。けど、そんな関係ない。アタシは言うべきことを言うだけだ。

「あのね。あれから色々考えたんだけど……」

『ちよ、ちよっと何だよ。いきなり。それよかさ。来週の土日って空いてる？』

(相変わらず強引だな。前はそういうところ好きだったんだけど……)

「土日がどうかしたの？」

『いやさ。軽井沢行かね？ ちょうど部屋が取れたんだ』

「え？ どういうこと？」

『実はさ。美央と泊まりで旅行いきたいかなあーなんて考えててさ。前から予約してたんだ』

嘘……そんなはずない。

(何でそういう嘘をつくかな？)

ホントは堀川先輩を誘うつもりだったんでしょ。女子の情報網なめてない？

「無理。っていか行く気ない」

アタシがきつぱり断ったので持田君は『え？』って絶句した。

「悪いけど他の子を誘って。アタシはもう付き合えないから」

『な、それってどういう……』

「短い間だったけど。楽しかったよ。ありがとね」

『ちよ、ちよつ美央？ なんだそれ？ 別れたいってことかよ！』

「うん。ごめん」

『オレは認めねえぞ！ てかお前、まさか他に好きな男……』

「そういうことじゃないの。ごめん。もう決めたことだから」

『ざけんなよ！ そんなの……』

「さよなら」

そう言っただけで電話を切った途端、急に胸がドキドキしてきた。

(よく言っただよなあ……アタシ)

もし、持田君が堀川先輩のことをきちんと話してくれてたら結果は違ってたかもしれない。けど、それを隠してまるで何事もなかったみたいにアタシを誘う持田君の神経が信じられない。そんな状態じゃ付き合うなんて無理。それが今の素直な気持ち。

（なんだ。やればできるじゃん！）

自分から別れを切り出すなんて今までのアタシだったら考えられない。

きっと、空が勇気をくれたんだと思う。空と一緒に過ごすことでアタシもちよとずつ成長してるんだなって思った…。

空を真ん中にして歩いてると周りの人からはどんな風に見えるんだろ？

（きっと幸せそうな家族に見えるんだろうなあ）

それって面白い。ホントの家族じゃないのに。でも、このごろ自然とそういう形でお出かけしてる。アタシとケン兄ちゃんはただの『いとこ同士』だけど、別に夫婦に見られたところで恥ずかしいとは思わなくなった。

空は、右手はアタシ、左手はケン兄ちゃんと両方の手を繋ぐのが嬉しいみたい。で、ぶら下がるように足をブラ〜ンとさせるのがお気に入り。だから3人で歩いてると必ずおねだりしてくる。

「ね。ブランブランちていい？」

今日も空はアタシたちに挟まれてブランコみたいに時々足を浮かせる。

「危ないよ」って言っても空は気にしない。

「ブランブラン〜」

歩きながらそれをやられると吊り上げなくちゃなんないから結構力使うんだよね。それでなくても空と暮らすようになってから腕に筋肉がついちゃったのに！

今日は新しい本を買ったことでショッピングセンターでお買い

物。暑いからお店の中で涼もうっていうのもある。

「ん？ どうしたの？」

3人並んで歩いていたら時だった。急に空が足を止める。

「とまるの！」って空が言うからアタシたちも立ち止まる。

「どうしたの？」ってアタシが聞いても空はブンブン首をふるだけ。ケン兄ちゃんも心配してたずねる。

「どした。ハラでも痛いのか？」

空は違うという風に首をふってしゃがみ込んだ。

と、その時、上の方で『バーン！』という大きな音。

それと同時に前方の視界に黒が入った。

瞬間、『ガシャーーン！』って凄い音。

バーンからガシャーーンまでほんの数秒。何が起こったか理解できない。

それは数メートル先で起こっていた。

(……………く、車？)

よく見ると車が垂直に立っていた。しかも後ろの部分がグシャグシャ。

誰かが「落ちてきた」というのを聞いて上を見る。建物の壁に不自然な穴。

ケン兄ちゃんがそれを見上げて呟いた。

「立体駐車場……………あそこから落ちてきたのか」

それでようやく事態が飲み込めた。

すぐに周りの人たちが集まってきた大騒ぎになった。

(乗ってる人は大丈夫なのかな？)

男の人が数人、車を取り囲んで中に人が居ないか探してる。

そのうちの一人が怒鳴った。

「誰も乗ってねえぞ！」

どういうこと？ ひどりでに車が落ちてきた？

「危なかったな」と、ケン兄ちゃんが呟いた。

「え？」

「あのまま歩いてたら……直撃してたかもしれない」  
ケン兄ちゃんの言葉にはつとずる。

（たしかに……あのとき空が止まらなければ……）  
アタシたちが下敷きになってたかもしれない。想像して鳥肌がたつた。

「ね……空？」

アタシはしゃがんで空に耳打ちする。

「空には分かったの？」

「ん……」

空は小さくうなずいた。

（やつぱり。空は危険を察知してたんだ）

騒然とする中でアタシは誰かの視線を感じた。この感じ。前にもどこかで……。

「やつぱり！」

振り返ると赤い服の男がこっちを見てた。赤シャツに黒のチヨッキ。背の高いイタチ顔の大男……。間違いない！

「ね、ケン兄ちゃん。あれ。あそこ」

アタシが指差した方向にケン兄ちゃんが顔を向けると、イタチ男はすつとその場を立ち去ろうとした。

「待って！」

アタシは思わず後を追う。

「ちよつと！ 美央ちゃんどこへ？」

「ごめん。空をお願い！」

アタシは急いでイタチ男を追う。建物の角を曲がって、ちよつと行ったところに立体駐車場の入り口があった。その中に入っていく赤い人影。

必死で追いかける。

（あの人、絶対なにか知ってる！）

薄暗い駐車場の中をアタシは走った。スロープを幾つも駆け上がって上へ上へ。上の階へ行くほど車の数は減ってくる。天井が低い。



同じような光景が続く。人気は無い。息があがってきた。

(見失った?)

そう思った瞬間、背後から声をかけられた。

『何か私に用かな?』

(いつの間に後ろに?)

驚いて振り返るとイタチ男が腕組みして立っていた。アタシはせいぜいしながら走ってきたっていうのに、この人はまったく余裕…。

「あ、あなた何者?」

アタシの質問にイタチ男はバカにしたような笑みを浮かべる。

『無意味な質問だ』

「……あんだでしょ。さっきの事故も」

ひとつかふたつ上のフロアが騒がしい。たぶん、そこが現場なんだ…。

『何を根拠に。まあ、いい。ノーコメントとしておこう』

「何よそれ……てか、アンタ悪魔でしょ!」

アタシの追求にイタチ男は微かに表情を変える。

『ほお。なるほど。……しかし、誤解はしないでもらいたい』

「誤解って何よ。知ってるんだからね。あんだ、アスファルトとかいうところの下級悪魔なんですよ!」

『アスファルト? はは『アスタロト』のことが』

「何で空につきまとうのよ?」

『ふふ。それもノーコメントだ。私は見守っているだけだが?』

「……なんか怪しい」

『そうか。本当に見守っているだけなのだがな。今のところは……』  
「な、な、何よ! 空に何かしたらアタシが許さないんだからねっ  
!」

『自由にごうぞ。では、ごきげんよう』

「ちよっと! 待ちなさいよ!」

イタチ男はアタシの言葉をシカトしてくるりと背を向けた。そし

てカッーン、カッーンと靴底を鳴らして歩いていく。その余裕しゃくしゃくなところがムカついてアタシは叫んだ。

「下級悪魔になんか負けないんだからね！」

するとイタチ男は立ち止まって振り返った。

『ひとつ言っておこう。私が下級悪魔というのは、半分は正解だが……半分は間違いだ』

意味が分からない。アタシが首をひねっているとイタチ男がニヤリと笑った。

（え？ な、何？ 気のせい？）

イタチ男の周りがやけにまぶしい。薄暗い駐車場に光が差した、というよりイタチの周囲に光の粒子が集まってきているように見えた。まるでイタチ男の身体が発光してるようだ。

（な、な、何なの？ これ？）

そしてアタシは絶句した。見てはならないものを見てしまったような後悔。アタシは目を疑った。

（これはきつと何かの間違いに違いない！）

あり得ない。そこにあるはずが無いもの……。

でもアタシは見てしまった。イタチ男の頭上に輝く光の輪を……。

## 第11話 発作

今日は23日目。

空の成長は……カレンダーでは4歳になってる。

(確かに大きくなったなあ)

ここ数日、特にそう感じる。空の身長がテーブルの高さを越えるのは時間の問題だと思ってた。けど今朝見てホントに頭がびよこんで出てるのには驚いた。

(やっぱり毎日大きくなってんだな)

よく考えればわずか3週間で新生児が4歳児になっちゃうんだから当たり前なのかも。でも、いつぺんに大きくなっちゃったら大変だけど毎日ちよつとずつなら妙に納得してしまうんだよね。不思議なんだけど。それってずっと一緒にいるからなのかな？ たとえば(3日前はどんな感じだったっけ?)って思い出そうとしても思い出せない。赤ちゃんの頃の空。ハイハイを覚えた空。よちよち歩きだった空……。それを見てたのはつい昨日のことのように思える。

そんなことを考えながら『おにぎり』を握っていると空がさっそく邪魔しに来た。

「ぼくもやる〜」

「どうかな〜 空のお手手はちっちゃいから難しいよ」

「できるもん」

ほっぺを膨らませる空もかわいい。

「じゃイス持ってきて。ママといっしょに作る」

「わ〜い」

イスに乗った空と並んでおにぎりを作る。

「むずかし〜よお」

すぐに空がねをあげる。

「空のはおだんごみたいだね。けど一口で食べられそう」

「ママ、じょつず〜」

「そうかなあ？」

アタシのだってあまりほめられたもんじゃない。てか、どうして三角にならないの？」

「どうやったらコンビニのおにぎりみたいな形になるんだろ？」

アタシが苦戦しているとケン兄ちゃんが一言。

「だってアレは機械だから」

「え？ そうなの？」

「そうだよ。型があるんだ。そこにご飯と具入れて、ぱっこんぱっこん大量生産するんだ」

「それって全然にぎってないじゃん！」

「まあ、あれはあれでいいんじゃないか。手作りには敵わないけどな」

ケン兄ちゃんがアタシたちの作ったおにぎりをのぞき込みながらそう言う。

「ケン兄ちゃん、わかってるじゃん」

ちよつと得意になってアタシも胸をはる。けどその後が良くない。

ケン兄ちゃんは一言多い。

「なんか具がはみ出て痛々しいんだけど」

(痛々しいってどういうこと?)

「だったら食うなー！」

「痛てっ！」

ケン兄ちゃんの悲鳴に空が目を丸くする。

「ケンたん、どうしたの？」

「ふ、踏まれた。美央ちゃんに……いでっ！」

アタシの2回目の攻撃にケン兄ちゃんが顔をゆがめる。

見えないカカト落とし成功！ コツはカカトに体重を乗せること。踏む場所はできるだけ先っぽ。これだけで結構、威力あるんだよね。手伝いもしないで文句ばっか言ってる人は罰として荷物持ち。で、今日はお弁当持ってみんなで動物園だ！

動物園は思ってたより空いてる。

(夏休みだからもつと親子でいっぱいかなって思ってたけど、夏はみんなプールなのかな?)

でも、その方がゆっくり見られていいかも。どこからでも好きなように見れそう。

空は、はじめてナマで見る動物たちにテンションが上がリ気味。やっぱ本やDVDで見るのとは全然ちがうみたい。

まずはキリンを見上げながら空がお口をあめぐり。

「これじゃ、ぼくんちにはいれないね」

「いやいや……家には連れて来ないから」

次に象を見て空がしぶい顔。

「ゾウさん。みんなおじいちゃんなの？」

「え？ 何で？」

「だって……シワシワだもん」

空のリアクションは面白い。

ペンギンの行進には「よそみしてあるいたら、あぶないよ」「って本気で注意する。

動かないカバをながめて「でんちがきれたの?」「って心配する。

白熊に向かつては「きたない! きたない!」「って文句を言う。

どうやら真っ白じゃないのが許せないらしい。

次々に色々な動物を見て廻るんだけど、空はひとつひとつに反応してくれる。

(きつと空には生き物が新鮮なんだなあ)

いきいきしてる空を見てると何だか自分も嬉しくなってくる。空の笑顔はアタシの喜び。

「ね、ママ」

「どうしたの?」

「どつぶつさんは、みんなおはなし、しないね」

「ああ……そうね。絵本とはちがうからね」

「なんで？ どうしてちがうの？」

するとケン兄ちゃんがバカ正直に解説する。

「いわゆる擬人法だね」

「ぎじんぽーってなあに？」

「それはだな。例えば、登場人物が人間だと生々しいテーマをだな

……」

「マナマナしいってなあに？」

おもわず吹いた。

（マナマナしいだって！）

この調子じゃいつまでたっても空の質問攻撃は終わらないんだろ  
うな…。

最後はトラ。壁に囲まれた小さなジャングルがあってアタシたちは壁に開いた穴からガラス越しにトラをのぞく。木とか草とかがジヤマで、ちよっと分かりづらい。

「ママ。これ、トラさん？」

空の「トラ」のイントネーションが間違っているのでケン兄ちゃんが突っ込む。

「寅さんって……フーテンの寅さんは映画だよ」

空は首をかしげる。

「ふうせんはプーたん、じゃないの？」

今度は熊のプーさんを知らないケン兄ちゃんが首をひねる。

「風船？ ブータン？」

「このトラさん、ぜんぜんピョンピョンしないね」

「トラが……ピョンピョン跳ねる、だと？」

2人の会話が全然かみあってない。

（空ってば……それは絵本の話。そっちはあさって連れて行ってあげるから）

そんな風にしばらくトラを観察していると一匹のトラがちょうどアタシたちの窓の前に座った。トラはこっちをじっと見てるような気がした。

(空は怖くないのかな?)

そう思っただけで空の横顔を見ると空も同じようにトラを見つめてる。

(あれ? にらみ合ってるわけじゃないよね?)

空があまりに真剣な顔をしているので不思議に思っただけで聞いてみた。

「どうしたの? あのトラ、何か変だとか?」

すると空がぽつりと言った。

「おはなししてたの」

「へ? マジで?」

いやいや。空なら……それもありえる。それにしても空の悲しそうな顔。

「何をお話してたの?」

「おそとにでたくないのってきいたの」

「そしたら?」

「もう、あきらめてるって……」

「えっ?」と、思っただけでアタシは目の前のトラの方を見た。そう言われてみるとなんとなく他のに比べてくたびれてるように見える。

たぶん、空はこのトラを見て「この動物たちはお外に出たくないのかなあ?」って素直に感じたんだ。それは大人にはない感性かもしれない。考えてみれば、ここにいる動物たちは安定した生活を得ている代わりに自由を奪われてる。それはここで生まれた動物の宿命。つまり生まれた場所によって一生が決まってしまう。けどそれは人間も同じ。子供は親を選べない……。

(空は……どうなんだろ?)

あの冷たい悪魔の依頼主の子供に生まれて本当のお母さんじゃなくアタシに預けられた空。

(空は幸せなのかな?)

そう思うとなんだか空が不憫に思えてきて……泣きそうになった。

\* \* \*

今日で24日目。これまで空は色んな能力をみせてきた。66・6倍の成長力、傷をなめて治す力、怒った時のサイコなんとか、危険を予知する能力、そして動物との会話。こうして全部あげてみると今さらながら驚く。こんな小さな子供なのに、すでにこれだけの能力を持つてる。さすが悪魔の子というか…。

でも、アタシは空のこと信じてる。それに空もアタシたちを慕ってくれてる。だから大きくなって『悪い悪魔』にはならないと思う。

(イタチ男は気になるけど……)

そう。それが唯一の心配ごと。おとといのことはなるべく思い出さないようにはしてた。だけど、あの駐車場で見た光景が忘れられない。

なんでイタチ男の頭の上に『天使の輪』が見えたんだろう？

(あんまり考えたくないけど……天使って悪魔の反対だよねえ)

もしかしたらイタチ男は空がどっちに育つのかを見守ってるのかもしれない。悪魔になるのか天使になるのかを…。

\* \* \*

空と一緒に住めるのは残り一週間だ。アタシは張り切っていた。

(空といっぱい思い出作りをしなくちゃ！)

昨日の動物園は大満足だったけど、今日の水族館は空にはイマイチだったみたい。でも、明日はデイズニー、あさってから沖縄旅行だからイベント・ラッシュで挽回できるはず。

アタシは夕飯の後、旅行の準備をする。ケン兄ちゃんは相変わらずなまけもので、のん気に空とテレビなんか見てる。それを横目に



アタシはせつせとバッグに荷物をつめる。

（もう。明日はほとんど準備できないんだから今のうちにやっとないと……）

するとケン兄ちゃんがテレビに向かって独り言。

「何だよ。結局、石油の利権じゃねえか！」

「りけんってなあに？」

すかさず空は質問をする。どうやらニュースを見てるらしい。画面に目を移すと『LIVE中継』でどこかの国の映像が映ってる。レポーターの音声が続切れがちに流れる。

『たった今……政府・の治安部隊・国境……越えて……』

白っぽい画面はどこかの山岳地帯？ ずっと遠くの国みただけど。

『谷を隔てた、あちらの山道を見てください！ 戦車隊・を先頭に

長・い列が……』

珍しくケン兄ちゃんが怒ってる。

「何が戦車だ。あんなもんがあるから紛争が無くならないんだ！」

「せんしゃってなあに？」

「大砲を積んだ車」

「タイポってなあに？」

「うーん。なんて言うか……ドカーンって相手を吹っ飛ばしたりする武器」

「それって、わるいひとをやっつけるの？」

「それが必ずしも悪者相手とは限らないんだ。まあ、どっちにしてもロクなもんじゃないな。武器があるから争いが起きるんだ」

「じゃ、ないなしたほうがいいね」

「だな。無いにこしたことは……」

そう言いかけてケン兄ちゃんがはっとした。

「まさか……お、おい！ 空！」

けど手遅れだった。アタシもあせった。

「ね。空。空ってば！」

空をゆするけど反応なし。ていうか空の目はテレビの画面に釘付け。表情もやばい感じ。

「ちよつとケン兄ちゃん！ なんとかしてよ！」

「そ、そんなこと言われたって……」

その時、テレビの音に大きな雑音が混じった。

（なんだろ？ 画像が……）

映像が激しく揺れてレポーターの人が騒いでる。『地震！ 大きな……』とか叫んでる。

「おいおい。どうなってるんだ？」と、ケン兄ちゃんが画面に気を取られた瞬間、空の身体がビクッと跳ね上がった！

「うわあああ」って空が叫ぶ。

必死で押えるけど凄い力！

「空っ！」

アタシは空を強く抱きしめる。ただ嵐が過ぎ去るのを待った。

『ああ！ 見てください。山が、山が……』  
声のする方を恐る恐る見る。

（テレビの映像……地震とか言ってたけど）

画面の向こうはまだ混乱してるみたいだ。何が起こってるのか分からずケン兄ちゃんの顔を見る。ケン兄ちゃんは啞然としている。

「マジかよ……有り得ねえ」

アタシはぐったりした空を抱きかかえながら何がなんだか分からない。

『全滅です！ や、や、山が崩れて……戦車隊が谷底に……』

レポーターの興奮した説明にケン兄ちゃんと顔を見合わせる。

（まさか……空が？）

ケン兄ちゃんも同じことを思ったみたいでうなだれる。

「空がないな」って言ったからなのか……」

空はアタシの腕の中でスヤスヤ眠ってる。これってやっぱり……。

「これって何かを破壊する力？」

「ああ。恐らく。前にもあったよな」

「嘘でしょ……だってあんな離れたところ……」

「いや。花火大会のときがそうだった」

「花火大会？ あのゲリラ雨？」

「距離は関係ないのかもしれない。空が強く念じたこと……それが現実になってる」

「そ、そんな……いくら空でもそこまでは」

「豪雨に地震……サイコキネシスとは別に天災を誘発する力があるのかもな」

そんなはずない！ だってこんな小さな子が…。

「そんなことないよ！ 偶然かもしれないじゃない！」

「……普通ならな。けど、この子はそうじゃない」

「なによっ！ 悪魔の子だからって言うの？」

「空の仕業かどうかは分かんね。けど……可能性は高い」

反論しようと思っただけ口を開きかけた時、空が「ん……」と寝言。

（そうだ。ここでケンカしちゃうまずいよね……）  
思い直してぐっと思慢する。

「これ以上、空に悪影響を与えちゃうまずいよ」

「そうだな。この子はオレ達の悪意に反応しちまうんだったよな」

（ケン兄ちゃんのせいじゃないの？）って思ったけど、それ以上言うと言い争いになっちゃういそうなので止めといた……。

\* \* \*

夜中にふと目が覚めた。

（誰かのうなり声？）

寝ぼけながら手さぐりで空の身体を触る。

（空がうなされてるんならこっちに……）

抱き寄せようとした時、手のひらに熱を感じた。

（熱い？）

はっとして完全に目が覚めた。あわてて空のおでこに手をあてる。  
「何これ！ 超熱いんだけど！」

すごい熱。てかあり得ない熱さだよ！  
あまりの高熱にパニックになりそう。

（どうしよ、どうしよ、どうやって冷やそう）

頭では考えてるつもりなんだけど、実際に何したらいいんだろ？  
なんだか分かんなくなっちゃってケン兄ちゃんを呼びに行く。フ  
スマを開けて呼んでみるけど返事がない。

「ちょ、ちょっ、ケン兄ちゃんてば！」

何で起きないのよ！ 空が大変だつてのに！

「う〜ん。やつぱ答えはD……ファイナル・ばあさん」

（は？ 寝言？ てか、ふざけんなー！）

つい本気で蹴飛ばした。

「や、やつぱBでファイナル・アンサー」

「なに寝ぼけてんのよう！ ちゃんと起きてよ！」

「……あれ？ クイズは？」

「だから！ 空が大変なの！ とにかく来てよっ！」

無理やりケン兄ちゃんの手を引っ張って寝室につれていく。

「なんとかして！ 空が、空が死んじゃう！」

「死ぬつてどういう……熱っ！ なんだよこれ？」

「なんとかしてよ。空が、空が死んじゃう！」

なんでか分かんないけどアタシは同じことを繰り返した。

「落ち着けて。まずは冷やさないと……いや。救急車呼んだ方が

……」

「やだよ！ 空が死んじゃうなんてやだやだ！」

「だから落ち着けて！」

ケン兄ちゃんに怒鳴られてアタシはその場に座り込んでしまった。  
ホントに力が……抜けちゃって、身体がいうことかかない……。絶望  
感でめまいがする。目は開いてるんだけど身体が眠ってるみたい。  
ケン兄ちゃんが動き回ってるのは分かる。空の唸り声も。でも目の

前の出来事がぜんぶ夢みたいで、どうすることもできない。

(空……空……死なないで……お願い)

\* \* \*

気がつくとも知らない場所だった。しばらく周りの様子を伺って病院だって分かった。でも、どうやってここまで来たのか本気で覚えてない。

生まれてはじめて救急車に乗った。

(ていうか乗せられた？もしかしたらアタシも倒れちゃったのかな？)

アタシが正気に戻ったのは病院の待合室だった。

(空は？空はだいじょうぶなの？)

夜の待合室は静かすぎて怖い。明かりは非常口のランプとわずかなライトだけ。

(空はどこ？ケン兄ちゃんは？)

アタシがおろおろしていると誰かの足音。どこだろってキョロキョロする。

「気がついたかい？」

ケン兄ちゃんの落ち着いた感じの声にほっとする。

「うん。ね、空は？空はだいじょうぶなの？」

「今眠ってる。『ひきつけ』をおこしたみたいだ」

「……空」

「大丈夫だって。そんな顔すんなよ」

「だって……あんなすごい熱」

「熱はだいじょうぶだったよ。医者も首をひねってたよ。原因も分からないけど回復力も異様に早いつてさ」

「そう。良かった」

「見に行くか？病室、たまたま空いてたんだ」

「うん」

ケン兄ちゃんに連れられてアタシは空が眠ってる病室に向かった。

夜中ということもあつて病室の明かりは消えてる。空を起こさないように静かに部屋に入る。

(空！)

ベッドの上で眠る空を見て息が詰まった。思わずケン兄ちゃんを見る。

「なんで呼吸器？ 大丈夫って言ったじゃん」

「念のためだよ。医者は必要ないかもって言ったんだけどさ。原因不明だからね」

空みたいに小さな子が呼吸器をして眠っている姿は痛々しくて見てらんない…。

「アタシ、空を守るって決めたのに……何もできなかった」  
自分が情けなくて涙が出た。

「仕方がないよ。あの状況じゃ誰だつて気が動転するって」

ケン兄ちゃんはそう言つてアタシの頭をなでてくれた。髪の毛をクシャクシャつて感じの触り方だけどその優しさは伝わってくる。

(もしケン兄ちゃんがいなかったら……)

いつもは頼りない人だけど今回ばかりは救われたような気がする。アタシは空の枕元に立つて小さな手をそつとすくつた。強く握つてしまうと空が目覚ましちゃうかもしれない。しばらくその状態で空を見守つてると、突然、空がぱちりと目を開けた。

(起こしちゃった?)

空と目があった。空はすぐに自分の口元の違和感に気付いたみたい。アタシが握つてない方の手で呼吸器をどけようとする。

「だめよ」と、アタシは首を横に振つて空に伝える。

空はちよつとだけ眉を寄せると何か訴えるような目をした。

「なあに？」

アタシが軽く首を傾げると空はしきりに手を動かそうとする。アタシは空の手を離して今度は頭をなでてあげた。

「もう少しガマンしてね。ずっとついててあげるから……」  
空の呼吸器が微かに白く曇る。

（何か言いたいのかな？）

そう思って空の顔を見た時だった。空は横になったまま、ゆっくりと自分の両手を胸の前にもってきた。そして、手のひらでハートの形を作る。

（なに？）って見てると、空はその小さなハートのうち右手の分をアタシに向かって、左手部分を自分の胸の方へ分けた。で、左手で胸をトン・トン……。

（これって……秘密のおまじない？）

そうだ。今の仕草。空とアタシだけの合言葉……。

「空……覚えてくれてたんだ」

アタシはあふれる涙を放置してすぐに秘密のおまじないを返した。空はそれを見て笑ったような表情を浮かべる。

「え？ それって何の合図？」

ケン兄ちゃんが戸惑ってる。けど、これは空とアタシだけの秘密。誰にも教えない。2人だけの合言葉。

こころはひとつ

涙さえ飲み込んでしまうような夜の底で、空とアタシの心はひとつになった……。

## 第12話 海の青、空の青

おとこの夜の夜に空がひきつけを起こした時は『旅行は無理かな』  
って諦めかけてた。けど思い切つて来てよかった。

はじめて降り立った沖繩は風が気持ちよくなって全然イヤな暑さじやない。

(夏の沖繩ってサウナの中みたいなイメージがあつたけど、全然そんなことないんだ)

車でホテルに移動するまでに見た光景は日本んだけど日本じゃないみたいな雰囲気。うまく言えないけど……鮮やかな青、いきいきとした植物の緑がいっぱい、なんだかワクワクしてくる。

アタシたちが泊まるホテルは那覇空港からは車で40分ぐらい走つた海岸にあるリゾートホテル。空はプールも海も未体験。だから両方いっぺんに楽しめるように敷地内に専用ビーチがあるホテルを選んだ。旅行会社の人に言われたけど一週間前の申し込みでお盆休みのこの時期にホテルが取れるなんてホントにラッキーだった。

\* \* \*

チエックインしてさっそく泳ぐ準備。

「ね、海とプール。空はどっちから先に行きたい？」

「……どっちでも……いい」

「あれ？ テンション低くない？ 水遊びは楽しいよ」

「でも……ちよつとこあい」

「だいじょうぶだよ。ママがついててあげるから」

「あい……」

空はあんまり乗り気じゃないみたい。だけど慣れれば絶対ハマると思う。水遊びがキライな子供なんていないはずだもん。

「さ、じゃ先に水着に着替えちゃおうか」



「あい」と、空はパンツを脱ぐ。

「はい。じゃあこっちの足……で、反対側」

「なんか……はずかしいよう」

最近、空はお自分でお着替えをしようとする。一生懸命ボタンをはめようとしてるトコなんか見ると萌えちゃう。けどつい手を出しちゃうんだよね。まだ赤ちゃんの時のイメージが強いからなのかな？

「はい。準備OK。じゃあアタシも着替えてくるね」

そうだ。その前に浮き輪とイルカさんに空気入れないと。

「ね、ケン兄ちゃん。空気入れよろしくね」

「うえ、めんどくせ……」

「まだ着替えてないの？ 時間がもつたいないんだから早くしてよね」

「え？ 俺も入るの？」

「あつたりまえでしょ！」

「でも海パン持ってきてねえぞ」

「買ってきなさい！ 1階のショップで売ってるから！」

「マジかよ……」

せっかく沖縄まで来たのに泳がないなんて何考えてんだろ？ まったくケン兄ちゃんは…。

\* \* \*

まずはお子ちゃま用の浅いプールにチャレンジ。

「空、おいで！ 浅いから平気だよ」

「ん……でも」

空はキョロキョロしながら落ち着かないようす。ちゃんと足先で水面をつついて困ったような顔をする。

（やっぱ、はじめてだから水がこわいのかなあ）

「だいじょうぶよ。大きなお風呂だつて思えばいいの」

空は、まわりの子供たちがはしゃいでいるのを見てようやく足首をぼちゃんと水に差し込んだ。で、ちよつとかき回してから……ぐつと足を入れた。そして「あ！」と、何かに気付いたようす。たぶん、足が着くことがわかつて安心したんだと思う。

空はいっきに両足を水に沈めた。

「ママー、できたよ」

両手を広げて誇らしげに笑う空。

「えらい、えらい。どう？ 怖くないでしょ？」

「うん。おもしろい」

そう言つて空は水の中で足踏み。水の深さは空のふとももぐくらいまで。しゃがむと胸まで水に浸かる。

「ママ、きもちいいよお！」

「ほらね」

こつこつと徐々に水に慣れてけば、そのうち海にも入れるようになると思う。

「空にお水かけちゃおっかなあ。それっ！」

アタシが水をすくつて空にかけると空は「きゃあー」つて大げさな声をあげた。

「やったなあ」つて空はすぐに反撃。アタシは手加減して空の身体にチヨ口つとしか水をかけてないのに空はアタシの顔にむかつて容赦ない。

「負けないよ」つてアタシもその気になつてきた。

それから楽しく水遊び。水を掛け合ったり、追いかけてこしたり、ビーチボールをぶつけてこしたり、とにかく夢中で遊んだ。

1時間ぐらい遊んでて気付く。

(なんか肩がひりひりするなあ)

そうだ。日焼けのことなんか全然考えてなかった。

「やっぱ！ 日焼けクリーム塗つとけばよかった！」

雲が出てる間はいい。でも日差しが直だとやっぱり強烈！

「ちょっと、休憩しよつか」  
「ええ〜 もつとあそぶ〜」  
「ああ……じゃ中でアイス食べない？」  
「アイシユ？ うん。たべるう！」  
「ソフトクリーム買ったげる」  
アタシと空は1階のショップでお買い物するためにいったんホテル内に戻った。

\* \* \*

ソフトクリームをなめながらプールサイドでのんびり。日陰にいと海からの風が気持ちいい。ここの良い所はプールとビーチが隣り合わせになってること。プールに飽きたらそのまま砂浜へ。海まで0分。どっちもホテルの敷地内つてのがすごい！  
「ね、ママ。たんけんしていい？」  
先に食べ終わった空がまたプールに入りたいという。  
「ひとりじゃ危ないからダメ」  
「ケンたんといっしょならいい？」  
「そうね。それならいいわ」  
アタシたちの視線にケン兄ちゃんが顔をしかめる。  
「いや、でも俺、肌弱いし……」  
「空が遊びたいって言うてるんだから行きなさいよ」  
「うえ……美央ちゃんますます母ちゃんっぽくなってきたなあ」  
「な！ うるさいわね！」  
そう言われてみると確かにそれはあるかも。でも、それはしょうがないって思う。だって空が生活の中心になってるんだもん。アタシはお母さん役でケン兄ちゃんはそのサポート役なんだから。  
「しょうがねえ。じゃあ、浮き輪持って深い方いってみるか？」  
日焼けとはほど遠いケン兄ちゃんの身体は妙に白っぽい。悪いけどこの風景に全然あつてない。

「2人とも気をつけてね」

アタシは2人を送り出してからデッキチェアの上でゆっくりクリームを塗る。

(なんかぜいたくだなあ)

生まれてはじめてのリゾート。こういうところに彼氏と来たらどんな気分なんだろ？ 今は家族旅行みたいな感じだけど…。

改めてまわりを眺める。かわいらしい三日月型のビーチ。海は淡い青と深い青が互いに競うようにキラキラ輝いてる。涼しげな緑の散歩道。見上げればまばゆい青空。

ここでは時間がゆるやかに流れてる…。

アタシがのんびりしていると空とケン兄ちゃんがアタシを呼びにきた。

「ママ」すごいプールがあるよ!」

「いやいやマジで凄えんだぜ!」

空がアタシの手を引っ張るので仕方なくついていく。子供用プールの隣が大人用。で、さらにその隣に小さく囲まれた箇所がある。

広さは畳六畳分ぐらい。これのどこが凄いのか良くわからない。

「見ろよ! このプール。10mだってよ!」

「え? 10? 何が?」

「深さが10mもあるんだぜ。底が見えねえんだ」

「マジ? へえ……」

おそろおそろ覗き込む。

(ホントだ。青が濃い……)

「どんだけ深いの作ってんだよ。てか、意味わかんねえ」

「そうね。こんなの誰が使うんだろ?」

「スキューバの練習とかかもな」

「そうかもね」

ここはホントに何でもある。スキューバダイビングをはじめマリンスポーツは一通りできるシルカのショーだって観れる。レストランも6つあるし娯楽施設やキッズルームも充実してる。

(2泊といわず一週間ぐらい居たいな……)

「これぞパラダイス」

なんて言っちゃってみたりして。

\* \* \*

2日目は朝から海に挑戦。空はきのこのプールの時みたいに最初はちょっとビビリ気味。でも、波打ち際で遊んでるうちにだんだん慣れてきて腰の高さぐらいまでなら海に入れるようになった。浮き輪をして水に浮くのも上手になった。

「ママ。うみもたのしいね」

「だね。プールとどっちが楽しい？」

「どっちも！」

「そう。じゃバタ足いってみよっか」

空の浮き輪を引つ張りながら歩く。アタシ自身、海なんて何年ぶり。貝とか石とか踏むと結構、足の裏が痛い。それに不規則な波。プールに慣れてるだけにその辺はちょっと違う感覚。

「ママ、しょっぱい！」

波をかぶった空が驚いて言う。

「そっか、知らなかったんだね。海には塩がいっぱい入ってるんだよ」

「ええ、やだなあ。だれがいれたの？」

「いや。誰が入れたとかじゃなくて……」

「いじわるだね？ おしお、もったいないねー」

空は海水のしょっぱさに顔をしかめる。

(もったいないって……子供の発想っておもしろいなあ)

砂でお城を作ったり、貝がらを集めたり、身体を砂で埋めたり、海には海の楽しさがある。あまり日差しが強い時は日陰に避難しながらアタシたちはお昼すぎまで夢中で遊んだ。

バイキングでおなかいっぱいになった後はグラスボートで魚たちの遊泳を観察。空のお昼寝タイムを挟んでイルカと触れ合い体験。夕方までたっぷりと沖縄の夏を楽しむ。

(なんだかひと夏分遊んだ気がする！)

おおげさじゃない。ホントにそんな風に思ってた。つい先ほどまでは…。

異変に気付いたのはついさっき。

部屋に戻ろうと空の手を引いてエレベーターに向かった時だった。

(え?)

今、ロビーの前を赤が横切った……ような気がする。落ち着いた雰囲気到场違いな赤。何となく違和感があって無意識にそれを目で追った。そして……アタシは息を飲んだ。

(なんで……こんな所にイタチ男が?)

イタチ男はこっちに気付いていないみたい。けど、間違いない。あの小さな頭。黒いチョッキ。

アタシは思わず空の手を強く引っ張った。

「いたいよママ」

「ごめん。ちよつと急ぐよ」

イタチ男に気付かれる前にエレベーターに乗り込む。

(偶然? それともまさか……追ってきた? わざわざ沖縄まで?)  
ぞつとした。キモい……。

(イタチ男が現れたってことは、また何かトラブルがあるような予感……)

せつかくの楽しい旅行が台無しになってしまわなければいいけど……。

イタチ男のことは一応、ケン兄ちゃんにも報告した。

「……だから気をつけないと」

「マ、マジかよ?」

「うん。たぶん、アイツは厄病神だと思う」

「そ、そうだな。今までの経緯からすると……」

「なんかありそうで怖い……」

「クソ! 気分悪いな」

正直、不安でしょうがない。でも、悪いように考えればキリがない。ここは無理にでも良い方に考えなくっちゃ。

(明日の夕方には帰るんだから、それまで何もなければいいよね)  
夜は外に出ることもないしホテルの中に入れば危険は無いと思う。  
でも……それは甘かった。悪夢は、思わぬ形で、突然、襲ってきた。

\* \* \*

(なんなの? これは……)

はじめ夢だと思った。けど記憶が途切れる前の出来事はたぶん現実。最上階の展望レストランでバイキングを楽しんでいた時、いきなり停電した。で、大きな爆発音。地震みたくグラグラって大きく揺れて、イスごとひっくり返って……気を失ってたらしい。

(空は? 空!)

真っ暗な中で空の姿を探す。すぐ近くで微かなうめき声。

「空?」

手を伸ばして声のする方を探るとやわらかい温もりにあたった。

「ん……マーマ?」

「空! だいじょうぶ? ケガはない? 痛いところとかは?」

「……ううん」

空をぎゅっと抱きしめる。

(良かった……)

少しずつ闇に目が慣れてきた。宿泊客で賑わってたはずのレストラン。今は爆発でメチャメチャな状態だ。テーブルやイスがぐちゃ

ぐちゃになつてゐたい…。

(ケン兄ちゃんはどこいったんだろ？ てか他の人まで……)

あれからそんなに時間が経つてゐるような気はしない。けど、周りの人はみんな避難しちゃったみたいだ。

(なんでアタシたちだけ取り残されてるワケ？ なんで？ どうして？)

まるで荒れ果てた倉庫に監禁されたみたいだ。

「あれ？ 何だろこの匂い」

(焦げ臭い。どっか燃えてる……)

何とか起き上がる。周りを見回して足がすくんだ。

「か、火事だ……」

空はまだぐったりしてる。

「に、逃げなきゃ！」

なんとか自分を奮い立たせる。今度こそ空を守らなきゃ！ 入り

口は確かあつちの方。でも……その入り口付近が炎の出所みたい。

(どこに逃げればいいの？ とにかく空を連れていかなきゃ！)

アタシはちよつと乱暴だけど空のほっぺをペシペシ叩く。

「空！ ね、立てる？」

「ん……ねむいよお」

「早く逃げなくちゃ！ 歩ける？」

「……にげるの？」

「火事なんだよ！ ほら立って。いい？ ママの手を離しちゃダメよ！」

「あい」と、空がうなずく。

(ここが炎に囲まれる前に他の出口を探さなくちゃ！)

必死で周囲の様子を探る。暗い室内の端っこの方で炎が天井を照らしてる。

(とにかく炎の勢いが弱そうな方へ……)

そう思って空と2人で走り出そうとした瞬間、目の前に誰かが立ちただかった。



『おやおや。どこへ行くつもりで？』

(！)

驚きで声も出ない。

『さて。この状況でどうするかね？』

突然あらわれたイタチ男は腕組みしてこっちを見下ろしてる。

「ちょ、ちよっと！ どいてくれない？」

そう言うのが精一杯。ノドがカラカラで大きい声が出せない。

『悪いが、君に用は無い』

そう言っただけイタチ男はパチンと指を鳴らした。と、同時にアタシの身体がブワッと浮いた？

(え？ いやっ！)

身体が投げ出される感覚！

「痛っ！」

(……背中打った)

頭も少しぶつけた。投げ飛ばされちゃったの？

(何が何だか……)

目を開けてびっくり。イタチ男はちよっと離れたトコでこっちに背を向けてる。で、その向こうに空。位置関係がよくわかんない。

(な……アタシだけここまで飛ばされた？)

わからない。イタチ男は何をしたの？

『そこでおとなしく見ている』

アタシに背を向けたままイタチ男がそう言ったように聞こえた。

(な、何するつもり？)

イヤな予感が出てアタシは空の方へ行こうと……あれ？

(か、身体が！ 動かな……)

「空っ！ 逃げて！」

なんとか声は出せる。

「マーマー！」

空の声。でも、空は動けないようす。

『どうした？ お前の大切なママがあんな目にあってるんだぞ？』

「ママー」

空のか細い声。不安がってる。今すぐそっちに行きたいんだけど……身体が！

『おじさんが憎いか？ さあ。やってみろ』

(何言ってるの？ 空に何させたいワケ？)

「ママー」

空はついに泣き出した。

(空を泣かせるなんて……許せない！)

アタシはどなった。

「ちよつと！ 意味わかんないんですけど！ てか、何なのアンタは？」

『……フン。そんなことはどうでも……』

「よくないっ！ てかアンタは悪魔なの？ それとも……天使なの？」

前に車が落っこちてきた時、駐車場で見たイタチ男の頭には『天使の輪』があった。なのでもしかしたら天使だから空を狙ってるのかもしれないって思った。

『どちらでもない。今はな』

「今は？ どういう意味……」

『簡単に言うと私はつい最近、天界を追放されてしまった身分なのだ』

「追放？」

『そうだ。いわゆる『墮天使』というやつだ』

「ダテンシ……けど、それが何で？」

『なぜこの子を狙うのかってことかね？ クク、簡単なことだ。ポイント稼ぎだよ』

だんだんイヤな予感が本当になってきた。鳥肌がたちそう。

『ベルゼブブの息子を狩ればポイントは高いだろうからな』

「ベルゼブブ？ 何それ……」

『なんだ。そんな事も知らずにこの子を育てていたのか？』

「だから！ ベルゼブブって誰？」

『魔界の四大実力者の一人だ』

「ま、魔界？ 四大実力者？ ま、マジで？」

あの依頼主……そんな凄い悪魔だったの？

『ベルゼブブほどの実力者を狩るのは無理でもその子供ならなんとかなる』

「だから空を？ ひきょう者！」

『いくら悪魔の子でも悪の心がないうちに狩るわけにはいかない。だから私はこの子が悪魔になるのを待っていた』

「そ、それでストーリーカーしてたのね」

『この子が魔界に帰ってしまったらもう手は出せんからな。なんとか間に合って良かった』

「良くないわよっバカッ！」

『これで私は天界に帰れる。では、さっさと済ませるか』  
済ませるって何を？ 狩るってどういうこと？

「さつきから『狩る』『狩る』とか言っちゃってるけど、そんなに狩りたきゃ羊の毛でも刈ってなさいよバカー！」

『笑えない冗談だな』

そう言っただけイタチ男は何かを空に向けてるような仕草をみせた。ここからは分からないけど何か持ってる……。

『この弓矢でお前の悪意を貫く』  
信じられない！

(ゆ……弓矢？ うそっ！)

あんなに言葉は出てきたのに身体はちっとも言うことを聞かない。  
(いったい何なの？ 金縛り？)

『さあ。怒れ。さもないとお前のママをもっといじめろぞ』  
イタチ男は空を挑発する。

「ママ……」

泣いていた空が顔をあげる。そして「ううう……」って唸りだした。

「空、ダメ！ 挑発に乗っちゃ……」  
そんなアタシの声は空に届かない。空は身体を震わせてる。そして「うわー！」と、絶叫する。

バン！ バン！ バン！

窓ガラスが連続で爆発！ 風が……風が外に向かって流れてく。

『そうだ。それでいい』

そう言っつてイタチ男が腕を伸ばす。

『それでは……死ね』

(や……め……て)

イタチ男の手がピカッと光った。

それと同時に光の筋が、空の胸を……貫いた……ように見えた。

(そ、そ、そんな……)

空が胸を押えてしやがみこむ。

「いやあー！ そらあー！」

### 第13話 決断

そんな……そんなことって……あるワケないよね？

空が……アタシの空が……死んじゃう？

やだ！ やだ！ 絶対にやだ！

「空あー！」

なんで？ なんで空が？

「空あ……空……」

泣きながら何度も空の名前を呼んだ。

身体の底からどうしようもない感情があふれてくる。

空……空……お願いだから……死なないで……。

(……あ！)

ふと身体の自由がきくことに気付く。

「空……空……」

もつれる足。

「空……空……」

ふらつきながら空の所へ。

「空！ 空！」

ようやくたどり着いた。

(ごめんね……守ってあげられないで……)

ぐったりした空の身体を起こして抱きしめる。

「空……ごめんね」

「……いたいよママ」

「！？」

驚いて空の顔を見る。

「空？」

「なあに？」

慌てて空のTシャツをめくりあげる。

(胸のト……傷とか……無い！)

「良かった！ なんともないのね？」

「ちよつとチクってした」

「胸の所まだ痛い？」

「もういたくない」

『……なんだと』

声のした方向。アタシはイタチ男を睨みつけた。

『バカな……悪意が足りない、だと？』

イタチ男はいまいましそうに舌打ちするとしばらくアタシたちのことを凝視した。で、急にこっちに来たって思った瞬間、アタシは空から引き離された。

あつという間だった。イタチ男はアタシをグイグイ後ろに引っ張る。

（苦しい！）

空が不安そうな目で「ママ！」ってこっちを見る。

『足りないのだな？ 怒りが足りないのならもつとこいつを！』  
背後でわめくイタチ男。

（ひ、引きずられる……）

「ママ！ ママ！」

空がこっちに来ようとす。ダメって言いたくても声が出せない。

『お前の大事な者を傷つけてやる！』

イタチ男は片腕をアタシの首にかけて引っ張り、もう一方の手でガラス片をアタシの顔に近づけた。

「やめて！ やめて！」と、空がパニックになる。

（まずい。このままじゃ空が……）

アタシは……。

「えいつ！」

思いつきりカカトでイタチ男の足を踏んでやった！

『グッ！』

（今だ！）

イタチ男がひるんだ隙にアタシは首に巻きついた腕から逃れた。

「空！ 今よ！ 『ないな』 しちゃって！」

ぽかんとした空が一瞬、間をおいて「あい」と、うなずく。  
『な、し、しま……』

あせるイタチ男がアタシの腕をつかもうと手を伸ばしてくる。  
それと同時に空が叫んだ。

「ないなっ！」

『くおっ』 っという言葉を残して……イタチ男は消えた。

その瞬間、イタチ男の姿が歪んで見えたけど……。

「飛ばしたの？」

「あい。ないなした」

「どこに？」

「知らない」

空はケロツとした顔で首をふる。

「良かった！」

アタシは空を強く抱きしめた。

(良かった。空が無事で。ホント良かった……)

今度はうれし涙で顔がぐじゃぐじゃになった。もうダメかと思っ  
たよ。

「いたいよママ」

空に言われるまでアタシは夢中で空を抱きしめた。ずっとこのま  
までいいって思った。でも……。

「そうだ！」

忘れてた。いつの間にか炎の勢いが凄いことになってる！

(そうだった。ここから逃げないと……)

さっきは入り口付近だけだった炎があちこちに広がって部屋の中  
を赤々と照らしている。

立ち上がる炎。熱い風がこっちに向かってくる。おなかに響くよ  
うな音。こんな大きな炎を間近で見たのは生まれて初めて。

(すごい圧力……)

もう部屋の半分以上が燃えてる。アタシと空は次第に窓際に追い

込まれてしまった。

(ここつて13階だよね……)

割れたガラスを避けながら外の様子を伺う。展望レストランは景色が良く見えるようにガラス張りになってる。そのガラスが割れてビュウビュウ風が渦巻いてる。下をのぞいて気が遠くなりそうになった。

(高い！)

敷地内のプールが小さく見える。その周りに赤いランプの車が数台。サイレンの音が微かに聞こえてくる。

(誰か助けて……)

はしご車は？ 無理だろうな。こんな高さじゃ…。

ふと見上げると、ヘリコプターの音！

(アタシたちの存在に気付いてもらわないと！)

アタシは必死で手を振った。するとしばらくしてヘリの横の扉が開いて誰かがこつちを見ながら手を振ってくれた。

「良かった！ アタシたちに気付いてくれたみたい」

でも、そこからが長い。風に煽られてヘリが近づけないみたい。

(どうしよ。すぐ後ろまで火が来てるよ！)

ヘリから垂らされたナワバシゴが短すぎてここまで届かない。ナワバシゴにぶら下がってるレスキューの人が何か叫んでる。ナワバシゴがどんどん長くなる。そして勢いをつけたおじさんがターザンみたいに飛んでくる。アタシたちの居る場所に着地したおじさんは「もう大丈夫だ！」と、言ってくれた。

「助かった……」

少しほっとした。

「残っているのは君達だけ？」

「はい」

「よし。わかった」

おじさんは『おしめ』みたいな救助器具を空にはかせながらヘルメットについたマイクで誰かと会話してる。



「一気に2人を引き上げる。時間が無いんだ！」

その間にアタシも真似して器具を着ける。それが終わっておじさんが眠りかけた空をしっかりと抱く。そしておじさんはアタシに自分の腰にしがみつこう指示した。

言われたままにアタシはおじさんの腰に必死でしがみつく。

(命綱がついてるから大丈夫よね……)

「いいぞ！ 上げてくれ！」

その数秒後、ナワバシゴに吊り下げられるような格好でアタシたち3人の身体が浮いた。

間一髪、炎から逃れるように建物を離れる。

(間に合った) と思ったのも束の間、突風にあおられて体勢が崩れる。

「下は見るな！ このまま……」

おじさんの怒号が上の方から振ってくる。風がすごくて続きが聞こえない。

また強い風がきた。

「キャッ！」

ブランコみたいに身体ごとブワッと持って行かれて、その反動で建物に打ち付けられてしまう。

(うそ？ 引つかかってる?)

見上げるとナワバシゴが建物のでっぱりに当たってる。

(ハシゴが切れかかっている！ たぶん壁面で擦ったからだ)

しばらくしてナワバシゴの一部がプツンと切れた。

ガクン！ と、揺さぶられてアタシたちはクルクル廻る。

おじさんが叫ぶ。

「早く！ 早く引き上げてくれ！」

ヘリの上から誰かがアタシ達を引き上げようとする。けど、バランスが悪いのかナワバシゴが切れかかっているからか、上手くいきな  
いみたい。

(映画みたいにはいかないもんなんだ……)

そついやテレビで見たことある。ヘリコプターで人を吊り上げるところを。確かレスキューの人が抱き抱えて……そうだ！

（あれって一人ずつしか助けられないんじゃないじゃ？ だったら、これってかなり無理してる？）

アタシが一緒だから重量オーバー？

（このままじゃみんな……）

その時、アタシの救命器具についてる命綱が目に入った。

（このフックの部分……）

この子だけなら助かるかもしれない。

こんな時、お母さんならどうする？

…… たぶん、迷わないよね？

アタシは命綱のフックを外した。そして深呼吸……。

（今度こそ空を守ってあげられる）

アタシはすつと腕の力を抜いた。

足元にぼつかり空いた闇。

突如現れた強い力で下へ引っ張られる。

おじさんが何か叫んでるけどすぐに遠くなる。

（アタシ……落ちてる）

…… お母さん。アタシ、間違ってるじゃないよね？

ゴメンね…… お母さん。

気がつくとも目の前にまぶしい白。まぶしくて瞼を動かす。身体の感覚は……ある。

（ここは……どこ？ アタシ生きてる？）

はっとして目を開ける。

（白いのは……天井？）

がばつと起き上がる。

「美央ちゃん！」

「ケン兄ちゃん？」

「良かった！ いやマジで良かったよ」

「アタシ……なんで生きてるの？」

窓から差し込む日光で日が変わってることに気付く。

「奇跡的に助かったんだよ！ 10mプールのおかげだ」

そう言うケン兄ちゃんは頭に包帯を巻いている。

「10mプール？」

「ほら、深さ10mのプールがあっただろ？ 美央ちゃんはその間に落ちたんだ」

「……そんな……嘘みたい」

「奇跡だよ。いやあ奇跡つてあるんだなあ」

「ね！ 空は？ 空は無事なの？」

「勿論」

そう言っつてケン兄ちゃんは隣のベッドを指差した。

「空……よかった。無事だったのね」

空はぐっすり眠っているようだ。とくにケガをしてる様子もない。てことはあの後、無事に救出されたんだ。

ケン兄ちゃんが空の寝顔をながめながら言う。

「空のおかげかもな」

「え？ 何が？」

「いやさ。もしかしたら空が美央ちゃんをあのプールに落ちるようにしたのかもしれない」

「そんな。だつてあの時、空は眠つてて……」

「けどさ。そうとしか考えられなくね？ だつてあの高さから落ちて無傷なんだぜ」

「だね。確かにそうかも」

眠ってる空の顔を見ると何だかそんな気がしてきた。すると……。

『ふん。のん気なもんだな』つて聞き覚えのある声。

「あ！」と、アタシとケン兄ちゃんが同時に声をあげる。

『まったく世話がやける連中だ』

振り向くと悪魔の依頼主が立っていた。いつものように何の前触

れも無い。ただし、今日の依頼主は…。

「なんでアロハ・シャツ？」

その突っ込みもケン兄ちゃんとかぶった。

『……いつもの格好では目立ってしまっからな』

似合わない。それじゃまるつきり『マファイア』だよ。

『な、お前はまたそういう無礼なことを！ まったく。感謝もせず  
にそれか？』

悪魔の依頼主は人の心を読んで勝手に怒ってる。

「ひよつとして……あなたが助けてくれたの？」

『やむなく。まあ、契約を守らせるためだ』

「……そう。だったらもつと早く助けてくれればよかったのに！」

『そう言うな。私も忙しいんだ』

「でもイタチ男のことは知ってたの？」

『大体はな。だが、所詮あの程度にすぎん』

「あなたにとってはそうかもしれないけど。ホント死ぬかと思った  
んだから」

アタシが文句を言っても依頼主は知らん顔。息子が狙われたって  
いうのに全然、平気なんかなあ…。

「あ、そうだ。ところでイタチ男っていうか墮天使が言ってたんだ  
けど、魔界の四大実力者ってなに？」

『たわけ。辞書をひけ辞書を』

「分からないから聞いてるんですけど！ てか、名前『ベルデブ』  
って言うんでしょ？」

『デブではない！ ベルゼブブだバカ者！』

それを聞いて突然ケン兄ちゃんが「ひえっ！」っとバカみたいな  
声を出して後ずさり。

「どうしたの急に？」

「み、み、み、美央ちゃんてば、こ、このお方が、だ、だれか……」  
ケン兄ちゃんは何かビビりまくってる。

「いいかい。ベルゼブブ様といえば魔界ではルシファーに次ぐ実力

のお方なんだよ！ し、失礼すぎるだろ！」

「ふうん。そんなに偉いの？」

「え、偉いってもんじゃないって！ 魔界の大統領みたいなものだよ」

『大統領だと？ その表現は却下する。そんなザコと一緒にするな』

「し、失礼しました！ でもホントに有名なんだって。別名『蠅の大王』とも……」

『ほう。よく知っているな。無職にしては』

「だから無職は余計ですつてば……」

ケン兄ちゃんはがっくり。悪魔の親子に無職って認定されちゃってるワケね。

「あれ？ ハエっていえば……」

そういえば思い当たる節がある。なんかマンションの部屋でやたらとハエが出てたような……。

「ああ！ ひよつとしてあの部屋にハエが多かったのはそのせいなの？」

『そうだ。いつも見ていると言っただろう』

「そうだったんだ。アタシ、殺虫剤で2・3匹シューってやっちゃったよ」

「み、美央ちゃんてば何て事を！」

ケン兄ちゃんは卒倒しそうな勢いで天を仰いだ。

『まあ良い。私はこう見えても細かい事は気にしないのだ』

そう言っつて胸を張る依頼主。でもアタシの顔を見て勝手に反応する。

『お、お前！ 今、嘘ばかりとか考えただろう！ 私は本当に心が……』

（心が広いワリにはやっぱ細かいじゃん）

けど、こうやっていられるのも生きてるからこそなんだよね。酷い目にあっただけど空は無事だったしアタシもケガはしてない。アタシもようやく元気が出てきたし、やっぱ沖繩に来てよかったって思

う。

『ところで忘れていないだろうな？ 契約はあさってまでだぞ。』  
悪魔の依頼主がふとそんな事を言い出した。

「わかってる……さびしいけど、また会えるんだよね？」

一緒に暮らせなくなるのは本当に悲しい。できればもつと空と一緒ににいたい。でも、ずっと一緒にいてワケにはいかないんだよね。

『勘違いするな』

「……え？」

『我々とお前たちでは文字通り住む世界が違うのだ。私もこの子も、もう二度とお前たちに会うことは無かるう』

「うそ……そんな……そんなの」

目の前が真っ暗になった。大げさじゃなくホントにめまいがした。

(空と会えなくなる？ そんなことって！)

せめて何ヶ月に一回とかでも…。

「まさか、たまに会うのも……」

『無しだ』

「……二度と会えない？」

『そういうことだ』

悪魔の依頼主は冷たくそう言い放った。

(その冷たい目。やっぱり悪魔だ……)

痛っ！ 痛い。胸が痛い！ 胸の奥のほうで大事な何かがえぐりとられたみたいに胸が痛いよ。胸を引き裂かれるっていうのはこういうことなの？

空と会えなくなっちゃうなんて……絶対に嫌だ！ 絶対に！

## 最終話 願い事ひとつ

お昼過ぎに目を覚ました空を連れてアタシたち3人は沖縄からの帰路についた。

空はいっぱい眠ったせいかとつても元気で何かとアタシに甘えてくる。飛行機の中、空のはしゃぐ声のアタシの心を傷つける。空の笑顔を見ているとズギズキ胸が痛む。でも、空の前で泣くわけにはいかない。

(これって……辛すぎ……)

やっぱりあの依頼主は悪魔だ！

悪魔の依頼主は空という『幸せ』を与えてくれた。でもその代償として想像を絶する『苦しみ』をアタシに与えた。まさに天国から地獄…。

小さくて分厚い窓ガラスの向こうはまぶしい青空。鮮やか過ぎる青が目にしみる…。

\* \* \*

空港の到着ロビーにはお母さんが迎えに来てくれた。どうやらケン兄ちゃんが連絡を入れたらしい。

「良かったわ。美央も空ちゃんも元気そうで。でも心配したのよ！」  
そう言いかけたお母さんの表情が一瞬くもった。

「美央……何かあったの？」

「まあ、ちよつとね」

笑顔で応えたつもりだけどお母さんにはバレてるっぽい。

「ちよつとトイレに行きましょ。ケンちゃん。空ちゃんをお願いね」  
お母さんに手を引かれてアタシは人の居ない所に連れて行かれた。  
「とても旅行を楽しんできたようには見えないけど？」

お母さんはやっぱり鋭い。すぐにアタシの異変に気付いてるもん。

「ね。何かあったんでしょ？ 空ちゃんに関係することなんでしょ？」

「うん……」

なんだか急に泣きたくなくなった。空の前では必死にガマンしてたものが一気にあふれ出してきた。思わずお母さんに抱きついてしまふ。

「お母さん……」

「美央……」

しばらく泣いてからアタシは空と二度と会えなくなってしまったことを正直に話した。

お母さんはアタシの頭をなでながら「そう」と、小さくため息をついた。

「美央。偉かったわね。よく我慢したと思う」

その言葉にまた涙があふれてくる。もうグジャグジャだ。

お母さんはアタシの頬をなでながら呟いた。

「私も何て言っていないかわからない……でも、今は我慢しましょ。

空ちゃんとお別れするまでは」

空とお別れ

それを想像しただけで息苦しくなる。

「美央。今は精一杯、空ちゃんのために笑ってあげましょ。残された時間はあとちょっとしかないんだから……」

お母さんの言うとおりで。アタシに残された時間は少ない。その間、アタシが悲しい顔を見せちゃいけないんだ。最後の瞬間まで空を楽しませてあげなくちゃ。幸せな気持ちで送り出してあげなきゃ。

空のために……笑おう

\* \* \*

29日目。今日は空と過ごせる最後の一日。色々考えたけどなる



べく今までどおりに過ごそうって決めた。朝ごはんをみんなで食べて、散歩に出かけて公園で遊ぶ。買い物に行って好きなお菓子を一個だけ買ってふたりで食べる。空の気に入ってる絵本をたっぷり読んであげて一緒に昼寝する。夕方までおもちゃを使って3人で遊ぶ。

そして晩御飯の時にささやかなパーティを開くことにした。これは昨日の夜ケン兄ちゃんと相談したことなんだけど空がうちに来たら一度もお誕生日のお祝いをしてなかったから一度ぐらいはパーティをしようってことで。

最初で最後のサプライズ・パーティだ。

空はごちそうを並べるお手伝いをしてくれた。

「すきなものがいっぱい！」

空はワクワクしながら料理をながめる。これから何をするか知らせずに飾りつけも手伝ってもらった。空は不思議そうに「なにをするの？」って何度も聞いてきた。けどアタシは「内緒」ってごまかした。

で、いよいよパーティのはじまり。

ケン兄ちゃんがこっそり買ってきたケーキをテーブルの真ん中に置いて空に種明かしする。

「今日はね。空のお誕生日のお祝いなの」

「……おたんじょうび？ そらの？」

「そうよ。絵本でもあったでしょ。クマさんのお誕生日パーティのお話」

「あ、そっか！」

空の目が輝く。

ケーキにはロウソクを5本立てた。そして明かりを消して、お約束のバースデイ・ソングとロウソク消し。空はとっても嬉しそうに「フウッ」って息を吹きかける。でも初めてのことで一回ではロウソクが消えない。ほっぺをふくらまして一生懸命な空を見るとホントにホントに胸がきゅんとなった。これが最初で最後だな

んて考えたくない。

ケン兄ちゃんがにっこり笑って言う。

「さてと。お楽しみはこれからだぜ」

次はプレゼント・タイム。これまたケン兄ちゃんがこっそり仕込んでたおもちゃのセット。空が欲しがってたおもちゃをまとめて五つ大サービス。

「うわぁ」

空のテンションが最高潮になる。おもちゃのバイク。何とかレンジャーのロボット。鉄砲みたいな武器。ブロックのセット。そしてアタシがずっとダメって言った携帯ゲーム機。

「ね？ どうしてきょうはおもちゃがいっぱいなのか？」

「それは……」

いずれ言わなくちゃいけない事。でも、それは空にとって一番残酷な事。

今は黙ってても明日は確実にやってくる。これが最初で最後のパーティー。そう思うともう限界。これ以上、隠しておけない……。

「あのね空。ママの言うことをよく聞いてね……」

するとケン兄ちゃんの手がアタシの言葉を遮った。ケン兄ちゃんはアタシの顔を見て小さく頷いた。自分が話すつもりなのかもしれない。

「あのね空」

「ケン兄ちゃん！」

「いいんだ。オレが話す」

いつもより真剣な顔つきでケン兄ちゃんは空の顔をじっと見つめた。そして静かに語りかけた。

「何で今日はおもちゃがいっぱいかっていうと、それは……みんな空が大好きだからなんだ」

(……ケン兄ちゃん)

「パパもママも空が好きだ。大好きだ。だから空の喜ぶ顔を見てるとパパとママも嬉しくなるんだ」

空がちよつと驚いたようにたずねる。

「パパとママも……うれしいの？」

「そうだ。人間は自分の大好きな人が喜んでくれるのを見てると自分も嬉しくなる生き物なんだ。分かるかい？」

「……あい」と、空が小さくうなずく。

「だから……それを覚えておいて欲しい。ずっと」

ケン兄ちゃん言葉……。

アタシも同じことを思ってた。空が魔界に帰っても今の言葉を覚えていてくれたら……。今、この瞬間の気持ちをずっと忘れずにいてくれたなら……。この子は『悪い悪魔』になんてならない。きつと……。

その日は夜遅くまで3人で遊んだ。

いつもは「もう寝なさい」と言うアタシが「好きなだけ起きてていいよ」って言ったから、空は大はしゃぎ。みんなテンションが高くなりすぎて、いつの間にか……そう、いつの間にか寄り添うように眠った。明日なんて永遠に来なければいいの……って願いながら……。

\* \* \*

今日は約束の日。昨日は夜ふかししたせいで3人とも遅きるのが遅くなっちゃった。悪魔の依頼主がいつ迎えにくるかは分からないけれど今朝も昨日と同じように朝ごはんを食べてから公園に行く。空は念願のおもちゃバイクに乗りたくてうずうずしてる。そんなワケで3人そろって近くの公園で遊ぶことにした。

おもちゃのバイクを乗り回す空はホントに満足そう。片足をバイクに乗せて走り回る姿はかわいいんだけど見てて心配になってくる。

「空」 転ばないように気をつけてねー！」

「あい」って片手をあげる空。片手運転の方がよっぽど危ないんだけど。

ケン兄ちゃんが苦笑する。

「空はいまだに『はい』が『あい』になっちゃうんだなあ」

「いいじゃん。かわいくて」

「結局、最後まで舌足らずなのは直らなかつたな」

「しょうがないでしょ。まだ一ヶ月だもん。生まれてから」

「こつやって元気に遊ぶ空を見るとこのままずっと時間が止まってくれればって思う。たった1カ月だけど空との思い出はたくさんありすぎて……」。

のどかな公園の光景を見ると、なんだかここだけ時間がゆっくり流れてるような気がした。アタシは空を見守りながら密かに考えてたことを口にしてみた。

「ね、ケン兄ちゃん。……空を連れて逃げちゃダメかな？」

「……3人で、かい？」

「……うん。逃げて逃げまくるの。いけるとこまで」

それを聞いてケン兄ちゃんは「やれやれ」と首を振った。

「実はオレも同じこと考えてた」

「え？ そうなの？」

「ああ。相手は魔界の大物だけど全力で逃げれば時間稼ぎぐらいは……」

そう言うケン兄ちゃんの横顔は今までないぐらい素敵に見えた。

と、その時……

『無駄なことを……』

「え！」

振り返るとやっぱり悪魔の依頼主。

『そろそろ時間だ。息子を返してもらおう』

その言葉にアタシは茫然と立ち尽くす。

(やっぱり返さないとダメなのね……)

だめもとで聞いてみる。

「……契約延長とかできないの？」

『それは無理な相談だな』

がっかりだ。

(けど……もともと無理があつたんじゃない?)

ふとそんな疑問をぶつけてみたくなつた。

「ね、なんでアタシなの? 何でアタシを選んだの?」

悪魔の依頼主はチラリとアタシの顔を見て呟く。

『それは、純粹だからだ』

(や、純粹って……そうかなあ)

『正確に言えば単純』

(ん? 単純?)

アタシのリアクションを冷静に眺めていた依頼主は少し表情を崩した。

『あの子と共に笑い、怒り、感じる事ができる母親でなければならなかつた。一緒に成長するような人間であることが条件だつた』

(なんだか分かるような分かんないような……)

『私が試したのは「人間」そのものなのだよ』

「……試した?」

『前にも言つたようにあの子は天秤だ。そして結果は……』

バイクで遊ぶ空をチラ見して悪魔の依頼主は微かに笑つた。

(アタシの育て方は間違つていなかつたのかな……)

正直、自分では分からない。でも悪魔が天使かつて聞かれれば、空は……。

「マーマ?」

いつの間にか空がアタシの足元に來てた。

「このひと、だあれ?」

「あ、そ、それは」

言葉に詰まる。なんて説明すればいいんだろ。でも、もうこれ以上は隠しておけない。

『息子よ。そろそろ時間だ』

悪魔の依頼主はパチンと指を鳴らした。すると、いつの間にか依頼主の横に女の子が立っていた。

(……悪魔のコスプレ?)

なんだかアニメに出てくるような不思議な格好の子だ。歳はアタシと同じぐらいだけど……。

「これ、だあれ?」

空が依頼主の横に立っている女の子を指差した。

その質問に依頼主が答える。

『お前の姉だ』

意外な答えにアタシも驚いた。

「え? 空にお姉ちゃんがいたの?」

『そうだ。これからは姉の『リーゆ』がお前の母親代わりだ』

空はぼかんとしてる。たぶんお姉ちゃんの意味がわかってないんだと思う。

依頼主は空と向き合う。2人ともお互いの顔をじっと見る。まるでテレパシーで会話してるみたいに見える……。そのうち、だんだんと空の表情が固くなっていく。そして空がぼつりと口を開いた。

「ほんとのママ……じゃないの?」

『そういう事だ』

空はアタシの顔を見て言った。

「ママは……ママは、そらのママだよね?」

もう……これ以上は……。

涙がこぼれ落ちそうであタシは静かに首を振った。

空の目に涙があふれてくる。

いつもなら声をあげて泣くくせに。

わざと黙々こねてアタシを困らせるくせに。

どうしてこんな時だけ……そんな目でアタシを見るの?

『ではそろそろ帰るとするか。行くぞ息子よ』

「……やだ……ママといっしょにいたい！」

『何を言っている？ お前は魔界で永遠に生き続ける存在なのだぞ』  
「ヤダ、ヤダ、ヤダ！ ママがいい！」

必死でアタシの足にしがみついてくる空をぎゅっと抱きしめる。  
依頼主は空に語りかける。

『愚かなる息子よ。お前はここにいてはならぬのだ。人間はいずれ死ぬ。お前の愛する者が次々と消えていくのを見守るのは辛いことだぞ』

空が取り乱すのを見て姉のリーゆが表情を曇らせる。

『父上。やはりもう少し期間を延ばした方が……』

『ならん。契約は守らねばならない』

『しかし……』と、リーゆは美しい眉を寄せて首を振った。

突然、空が「はなして」と、アタシの胸を両手で押し返した。で、アタシが空を離すと空は両手を前にして叫んだ。

「ないない！」

でも……悪魔の依頼主はケロってしてる。

「ないない！ ないない！」って泣きながら繰り返す空。

けど、リーゆの前髪がふわっと揺れるだけで何も起こらない。

悪魔の依頼主はフンと鼻で笑う。

『無駄だ。お前の力では我々を飛ばすことは出来ない』

空はハアハアしながら眠気とたたかっている。

( やっぱ『ないない』した後は眠くなるんだ…… )

いつもの空ならここで力が抜けてそのまま眠ってしまう。なのに今日の空は違う。空は一生懸命に足をふんばっている。眠ってしまうないように泣きはらした目を大きく開いてがんばっている……。

必死で立ち向かう小さな姿に胸がしめつけられる。

( 空。もういいよ……そんなに頑張らなくても…… )

フラフラになりながら目に涙をためてる空。

もうこれ以上、見てらんない。

「やめて！」

アタシは叫んだ。そして悪魔の依頼主『ベルゼブブ』に向かって言った。

「約束……なんでも望みを叶えてくれるんだったよね？」

『そうだったな。構わぬ。何でも良いぞ。ひとつだけ願いを叶えよ』  
『っ』

「また会いたかったのはダメかな？」

『それは駄目だ。前にも言った通りだ』

「そっか……じゃあ……」

アタシは目を閉じた。そして願った。口に出さなくてもベルゼブブには十分伝わるはず……。

(……これがアタシの願いごと。これならできるでしょ？)

アタシは目をあけて心の中でベルゼブブに話しかけた。

ベルゼブブはアタシの顔をじっと見つめて一瞬、迷うような仕草をみせた。けどアタシの思いを感じてくれたのか小さく頷いた。

『……よし。いいだろう。では願いを叶えよう』

ベルゼブブはそう言って黒マントを翻した。その瞬間にアタシ達の周りの温度が急に下がったような気がした。突然、紫色っぽい霧が立ち込めてアタシたちを取り囲む。そして急激な立ちくらみ。

(……空は？)

視界に入ってきたのは空の悲しそうな顔。リ・ゆに抱かれながら小さな手のひらを伸ばして……何か……何か言おうとしている？

(空……空！)

紫の粒子が濃くなって視界をさえぎる。

(空の顔がよく見えないよ)

それに頭がぼおつとして……薄れ行く意識の中でアタシは願った  
(ゴメンね……空。ずっと一緒にいたかったけど、あなたは魔界で永遠に生きて。ずっとずっと幸せでいてね)

さよなら……アタシの空……。

アタシは精一杯の気持ちをこめて最後に秘密のおまじないを送る。

離れてても……心はひとつだよ。



ふと我に返ると紫色の霧も妙な寒気もどこに消え失せてた。  
公園にはアタシとケン兄ちゃんしか残っていないかった。

ケン兄ちゃんは隣で目をパチクリさせてる。

「え？　なんだ？　あれ？」

ケン兄ちゃんはアタシのことをチラリと見て首を傾げる。やっぱり気付いていない。ケン兄ちゃんはキョロキョロ周りを見回して驚いている。

「ここはどこだ？　てか……オレ何やってんだ？」

ケン兄ちゃんは携帯を覗いて首を傾げる。そして慌てて走り出す。慌てなきゃならないような生活してないくせに。

（さすが四大実力者……いい仕事してる）

アタシが依頼主にお願した事。それは……

アタシ以外の人の記憶をすべて消してください

この1カ月間に空に関わったすべての人の記憶を消すこと。でも誰かが空のことを覚えてあげないとあんまりだからアタシの記憶だけは消さない。

空が居なくなつて誰も傷つかないように。そしてなにより空が悲しまないように。傷つくのはアタシだけでいい。

空と出会えたのは奇跡。お別れするのは悲しすぎるけど空とすごした時間は宝物。

だから、アタシだけは……空を忘れない！

\* \* \*

空のいた痕跡はどこにも残っていない。携帯で取った写真もみんな空の姿だけがすっぽり切り取られたみたいになつた。お母さんは空のことをまったく覚えていない。あの後、ケン兄ちゃんには会つてないけどたぶん同じだと思う。一度だけ、あのマンションに行

つてみたけど郵便受けには『666号室』は存在しなかった。ちよ  
うどその時、ハマドとアシムがスーパ―の袋を提げて帰ってきた。  
でも2人ともアタシに気付くことなく通り過ぎていくだけ。やっぱ  
り空は最初から居なかったことになっているみたいだ。

\* \* \*

何もしなくても時は流れる。今、この瞬間は昨日のそれとは確実  
に違う。人は皆、無意識に時の流れに身を任せて生きている。けど、  
失ったものが大きい時ほど人は時の流れに置いていかれてしまった  
ように感じてしまう。

誰かを思っただけで秋は濃く、誰かを思い出しながら迎える冬は  
冷たい。

あれから二ヶ月……アタシは失ったものの大きさを嫌というほど  
思い知らされた。毎晩のように空を思い出しては静かに泣いた。心  
にぽっかりと空いた穴はあまりに大きすぎて何をもってしても永遠  
に埋められないような気がした。

\* \* \*

12月のある日。街中で小さな子供がお母さんに甘えるのを見た。  
強く胸が痛んだ。

(もしかしたら……空が甘えんぼだったのは子供でいられる時間が  
すごく短いからだったのかもしれない。だったら……もっと甘えさ  
えてあげれば良かったな)

今さらだけど後悔した。

(……空は元気でのいるのかな?)

冬の青空を見上げて冷たい空気を胸いっぱい吸い込む。

この空は大地より広く、海より広い。この大空の下でならこの世

にお互いが存在する限り必ずどこかで繋がってるはず。でも、空はこの大空の下のどこにもいない。

どんなに会いたくても会いに行けない。

もう二度と会えない。

それならせめて……いつか自分に子供が生まれた時、男の子でも女の子でも名前は『空』にしようって思った。

「あ、遅刻……」

ふと時計を見てあせった。ぼんやりしてたらもうこんな時間。また学校に遅れちゃう。

アタシは早足でバス停に向かう。

（あーあ。やっぱり間に合わなかったか）

たぶんバスが行った直後なんだろう。バス待ちの人は一人しかない。

（やれやれ）と、思ってマフラーを首に巻き直す。ため息が白く漂う。

ふと先客を見てはっとした。

（カッコイイ……）

ウチの学校の制服みただけけど見たことのない男の子。形の良い体型。目鼻立ちがハーフみたいにキレイ。

少しずつバス停に近付きながらその男の子に見とれてしまう。

（この時間帯にこんな男の子いたっけ？）

そんなことを考えながらそつと後ろに並ぶ。男の子は大通りの方をぼんやり眺めてアタシには気づかない。

（そっぴい最近恋愛もしてないな……）

いやいやいや。ダメだ。アタシっては何を期待してるんだか……。

ふいに男の子が振り返った。びっくり！

（そんな。心の準備が……）

目が合った瞬間、男の子は「あ」と、言ってその大きな目を丸くした。

「あ、ども」

アタシはバカみたいなりアクションで軽くおじぎをしてみました。知り合いでもないのに！

すると男の子は目を細めてすっと両手を持ち上げた。

(え？ なに？)

何するつもり？ ってアタシが首を傾げても男の子は動作を続ける。

両手を胸の高さにして手のひらでハートを作る。そして右手を前に、左手を胸にトン、トン…。

その動きを見て息が止まりそうになった。

胸がいつぱいで、目の前が涙で滲んで、まるで夢の中にいるみたい。

アタシが立ち尽くしていると男の子はすっと手を差し伸べる。そして…。

「会いたかったよ……ママ！」

そう言って悪魔の子は、天使のように笑った。

【おわり】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4399/>

---

Baby Baby Baby !

2010年10月8日13時50分発行